



# 素顔を隠せ



みずきあかね

## 俺の空

---

その日は、とても青い空に飛行機雲が一つの筋を作っていた。それを左右の人差し指と親指でキャンパスよろしく指で囲んで、あいつは言った。

「青空を欲しいって思ったことないか？」

運動場の真ん中で、100メートル走の順番待ちをしていた時だったと思うのだが、今ではあまり思い出せない。

「そんなもの欲しがってどうするんだよ」

って、聞いたら、あいつはすっげえいい顔をして、

「なんかさ、飛べば空つかめそうじゃん」

って言うんだ。

「そんなに空に行きたきゃ飛行機に乗れば？」

そんな簡単なこともわかんないのかなあってそう言ってみたら、あいつは首を横に振って、「それじゃ『俺が飛んだ』ってことにならないじゃん。そうじゃなくて、俺だけで飛びたいの。鳥とかトンボみたいに」

たしかに空にはアキアカネが飛んでいたようだったけど、それで飛ぼうと思ったんじゃない、よな？

「はあ？ お前中学までなって、何言ってんだよ」

あきれ顔で笑ってやると、あいつはすっげえ真面目な顔で俺の顔を指さした。

「わかった！ 見てろよ三宅。俺は絶対にこの空を飛んでやるんだから！！」

前々から夢のようなことを恥ずかしげもなく口に出す奴だった。『空を飛びたい』ってことからはじまって、『北極点に立ってみたい』だの、『アマゾン川でナマズ釣りをする』だの、『東京湾に潜りたい』だの。

それ以外は着ているシャツよりよれよれなあいつは授業中は居眠り三昧で、弁当の時間以外はあるのかどうかわかんないような存在感のない奴だった。

それでも夢を語る時だけは輝いていたから、面白くて僕はその夢を聞く役になっていた。

それから高校受験があり、あいつの方が偏差値めちゃくちゃよかったことをその時初めて知った。あいつは2ランク上の志望校にあっさり入っちゃって、僕は苦勞して高校に入学、それ以来音信不通になった。

そして何年か経ってあいつの名前を思い出せなくなった頃、僕はつまらない大人になっていた。それこそ空を見ても心が動かないようなつまらない大人に。仕事も順調だしたまに友達と飲みにも行くし彼女もいる。日々の生活も満足している。これといって不自由のない生活をしているけど、これといって楽しいこともなかった。

そんなある日、中学の同級生から連絡が入った。

朝、母が電話してきたという同級生の名前と電話番号を書いたメモをよこしたが、名前に聞き覚えが無い。誰だっただろうと朝から思い出そうと必死になっていたが、昼の会議中にようやく2年の時のクラス委員だったやつだと思い出した。懐かしい思い出が胸をよぎる。運動会だの文化祭だのに汗を流し、つまらない大人になるものかと粹がっていた時代が……。

「三宅君？」

課長に声を掛けられて、呆けていたことに気が付く。

「あ、すみません」

失笑を買うのと同時に、思い出は益々鮮やかさを増していった。

俺は日曜日を待って電話を掛けた。するとクラス委員の佐伯が、懐かしい声そのまま、  
「もしもし、三宅君。お久しぶり。元気だった？」

と、言った。

「うん、元気だった。そっちは？」

なんだか懐かしいだけじゃなくて心が浮き立つ。

「おかげさまで。それでね2組で集まろうって事になったんだけどね。どう？」

「ああ、いいよいいよ。いつ？」

みんなに会うのは中学卒業以来だ。きっみんなと変わったんだろうなあ。

「来月の九日金曜日に、ダイニングバーDenで」

「ああ、駅前の？」

「うん。そう。でね、ミスミ君のこと、知らない？」

「ミスミ??」

誰のことだ？

「三宅君と仲良かったでしょ？ 三角と書いてミスミくん」

それがあいつの名前だった。

「……あ、そんなやつもいたな」

「連絡取ってない？ あとミスミだけなんだ。連絡取れてないの。家は引っ越しているし、誰も行き先を知らなくて。三宅君仲がよかったから何か知っていたらと思ったんだけど」

そう言われて、思い出そうと思ったが、いかんせん思い当たる節はない。

「悪い。思い出せない」

「そっか……残念」

受話器の向こうで残念がる佐伯君には悪いけど本当に知らないし。

「じゃあ今度往復葉書出すから、メルアド書いておくってよ」

「あ、……うん」

ちょっとわずらわしく思いながら頷く。と、テレビを見ていた母が、素っ頓狂な声を上げた。

「ちょ、ちょっと、ゆうくん！」

と、あまりの声に俺は「ちょっと待ってくれ」と断って振り向いた。

「ゆうくんの同級生よね？ この子」  
母親が指さすそこに、あいつがいた。

四角いテレビの中でこれから飛ぼうとする白い機体の横に、どうして立っているんだ！？

慌てて電話口に駆けて行って、  
「佐伯君、テレビ付けてる？ チャンネルまわして、ミスミが！」  
「え！？ ミスミ君？ わ、かった。ちょっと待ってくれ」  
電話の向こうで何かを操作する音と共に、「あ！」という声上がる。  
慌てて新聞のテレビ欄を確認、どうやら手作り飛行機で空を飛ぼうという企画らしい。

ミスミが白い機体に乗り込むと、カウントダウンが始まった。

「5」  
白い機体が後ろから映される。  
「4」  
見ている人達の顔が心配そうに強張る。  
「3」  
湖の様子が映し出される。  
「2」  
ゲストやナレーターの期待に微笑む顔が。  
「1」  
ミスミの真剣な顔がコックピット越しに、  
「0！」  
機体は勢いを付けて、空へ！

そして……

母親の情報網というのはすごいものだ。次の日にはミスミの住んでいるところを割り出し、僕に教えてくれた。二つ駅向こうだ。僕は居ても立ってもいられなくなり、その住所へ向かった。独り暮らしらしいからとりあえず居座るつもりの飲み物と食べ物をコンビニで買って。

アパートの一室、ピンポンを押すと、中から  
「あ〜い」

と、間抜けた男の声がして、無精髭のあいつが出てきた。短パンにTシャツ。そのあまりのだ

らしなさに僕は思わず、

「何やってんだよ、ミスミ」

って怒ると、ミスミはあの目を輝かせて、

「ああ！ 三宅じゃん！」

って、笑った。

部屋の中に通されて、僕は息を呑んだ。あまりの汚さに、ではない。ミスミの部屋は綺麗に片づいていて、段ボールにいろんな物が突っ込まれていた。まるで引っ越し後か引っ越し前みたい。

「久し振りだな。よく来た」

そう言うミスミに差し入れの缶コーヒーを渡すと、「サンキュ」と言った。

「よくわかったなあ、ここが。引っ越したばかりだぞ？」

「ああ、母さんがな」

「うぬう、侮れん」

等と言いつつも何処か嬉しそうなあいつはプルトップを開けて缶コーヒーを掲げると、  
「乾杯」

と、笑った。僕もそれに習っておなじように「乾杯」。

「そういえば、テレビ見たぞ。見事に落っこちたな」

するとミスミは複雑な顔をした。

「ああ、あれなあ。ちょっと失敗だったな」

そう。あの時機体は後ろが引っかかった状態で落ちた。落ちる途中でスクラップと化したそれとともに、ミスミは水の中に落ちた。その様子に僕も受話器の向こうの佐伯君も声を失ったんだ。

失敗という割には何処か清々しいミスミに俺は不可思議に思った。そう見えるだけで本当は相当悔しいんだと思うんだけど。僕だったらきっと後悔しまくる。

「……また飛ぶの？」

「どうしようかなあ。でも飛ぶのは気持ちよかったから、またやるかな」

子どものように笑うミスミは、いつまで経っても曖昧で粗雑で、面白い。それに比べたら僕は……なんて思っていると、

「今度は、宇宙へ！」

ってさらに無謀な夢を言って、あの頃の顔でガッツポーズした。

数年後。

僕はまた、箸を落っこしそうになりながら、呆然とテレビを見ていた。

日本初有人ロケットの打ちあげ現場にあいつがいて、宇宙服を着て、こっちを見て手を振って笑っているんだから！

たしかに日本初有人ロケットが打ち上がるという話は聞いたよ？ でも搭乗員なんてチェック入れてなかった。

「……あなた、どうしたの？」

先日結婚したばかりの妻に心配そうに顔を覗き込まれて笑顔で返す。

「あ、ああ、ごめん。大丈夫だから」

そういえば、あの時は落ちたんだ……よな！？

ふとテレビで見たミスミ墜落の映像が脳裏を掠める。なんか嫌な予感。思わずテレビに釘付けになった。

「5」

ロケットが火を噴く。

「4」

管制塔の様子が映し出される。

「3」

観客が固唾を呑む。

「2」

乗組員の家族が映る。

「1」

ロケットが白い炎を上げて、

「0」

轟々ともものすごい音をたてながらロケットは地面から持ち上がり、そのまま空へ打ち上がっていった。それはもう綺麗な雲を吐きながら。

「……あいつ」

やったな。

ミスミは自分の空を捕まえるために、宇宙まで行ったのか。

宇宙からの中継は欠かさず妻に録画させて全部見た。妻は「仕方がないわね。同級生じゃ」なんて笑っていたが、特番どころかニュースさえも欠かさず撮ってくれた。

仕事をして家に帰るとご飯を食べながら二人で録画したミスミを見る。

宇宙ではしゃぐミスミを見ているとこっちまで楽しくて嬉しくて、笑顔で手を振るミスミに振り返したりしてね。

日常までもなんだか楽しくなって、自分がつまらない大人になった、なんて思わなくなった。

帰還するあいつを見てから、一ヶ月くらい経ってからのことだった。

一日仕事して疲れて帰ってきた僕を、妻がご機嫌に迎えた。

「あなた、葉書が来てるわよ」

何故かくすくすと笑う妻の手にはたしかに葉書が。

鞆と上着を妻に渡して替わりに葉書を貰う。

それを見て、僕は三度目の呆然と、微笑みを浮かべた。

円い窓から見える漆黒の闇に、くっきり青い大気を纏った地球が。

その横にあいつがピースサインをして写っていた。

その下に蛍光マジックで「MY SKY！」の殴り書き。

「俺の空、か」

僕も飛んだよ。

お前の空を。ミスミ！

end

## 旅は道連れ世はソーダ味

---

今日の朝ご飯は目玉焼きとご飯とおみそ汁。マシンガンみたいなお母さんの声が右から左へ通過していく。

「浩太、お弁当ここに置いておくからね。晩ごはんは冷蔵庫に入ってるからチンして。それから夏休みの宿題は必ずやりなさいよ。なにかあったらおばあちゃんの家で電話して。今日も遅いから9時には寝るのよ。行ってきます！」

ボタンと玄関が閉まる音といっしょにお母さんは行っちゃった。お父さんは中国に出張中で二ヶ月くらい帰ってこない。お母さんも仕事をしてるから、昼間は一人だ。

食べ終わってお茶わんを洗うと、僕は計画を実行に移した。お菓子は昨日のうちにリュックに入れたし、昨日お母さんにたのんだお弁当も入れた。お年玉の残りもしっかり財布の中。机の中にかくしておいた計画書でチェック。バスに乗って、電車に乗って、お父さんの会社がある街の駅で乗りかえだ。今日は海を見ながら夏季限定ソフトを食べるんだ。ソーダ味のソフトクリームなんて画期的だよな。

胸がどっきんどっきん大きい音をたてている。

帽子をかぶってリュックを背負って、家中の窓を閉めて、電気も消した。玄関の鍵を閉めて、ちゃんとかかったか確かめて、さあ、行こう！

近所のバス停からバスに乗って10分で近くの駅へ。大人と一緒にエスカレーターを駆け上がって、切符売り場に行く。「遠井海岸」までは690円。切符を買うだけにこんなにドキドキするなんて思わなかったよ。財布から千円札を出してお札を入れるところに差し込むんだけど、なかなか入ってくれない。なんで入らないんだろうって思っていると、とんとんと肩をたたかれた。ふり向いてぎょっとした。高校生くらいのお姉さんなんだけど、顔が黒くて金髪でなんだかかわそう。

「ちょっと貸しな」

お姉さんはそう言うと、僕の千円札を長いピンクの長い爪がついた手でひったくと、まっすぐに伸ばして機械に入れた。千円札はするする入って行って、金額の数字が黄色く変わった。僕じゃ全然ダメだったのに！僕はぺこっとおじぎして960円のボタンを押すと、下から切符とおつりがピーピー音と一緒に出てきた。この感動をどう言ったらいいんだろう。給食でゼリーのおかわり3こできたくらい？

急いでおつりを財布に入れるとリュックにそれを押し込んで走る。改札を通ると急いで下のホームに降りた。こっちから向こうまで続く線路は、夏の光を受けてピカピカと光っている。まぶしいなあと思っていたら、駅のアナウンスと一緒に風と音をまき散らしながら電車がホームに入ってきた。僕の目の前でぶしゅーっとドアが開いて、ワクワクしながら乗り込んで座った。お隣はよれよれシャツのおじいちゃん。その向こうにいるのはさっきのお姉さんだった。お姉さんはこっちに手を伸ばしてきた。

「食べるかあ？」



それはピンク色の小さいアメだった。もらうべきか悩んでいると、僕とお姉さんの間に座っていたおじいちゃんが、つまんで口の中に入れちゃった。僕もお姉さんも目が点。おじいちゃんはニコニコ笑って、お姉ちゃんに両手を合わせた。

「おおきに。ありがとう」

お姉ちゃんは怒っているような困ってるような顔をして、何か言おうとしたけど、ふんと鼻を鳴らしてむこうを向いてしまった。

電車は順調に駅を通過。駅に止まるたびに人が増えたりへったりしたのに、おじいちゃんもお姉ちゃんもまだ横にいる。もしかして行き先一緒なのかな？

その時、スーツを着たお兄さんが隣の車両から怒った顔をして来て、お姉さんの前に立った。お姉さんの知り合いかな？

「亜佐美、ここにいたのか」

お兄さんは言いながら僕を見て、目を丸くした。

「あれ？ 内田さんの……浩太君？」

いきなり名前を言われてびっくりした。

「あ、はい。そうです」

「やっぱりそうか。お父さんが転勤される前は、私はお父さんの部下だったんだよ。ほら、一度会社のお祭りで会っただろ？」

「ごめんなさい、覚えてないです」

「そうか。これからどこ行くの？ 親戚の家？」

「はい。親戚の家が遠井海岸の近くで」

とっさにうそをついちゃった。

「その前で降りてしまうけど、一緒に行こうか」

僕はうそをついたことをはげしく後悔した。一人で行くつもりだったのに！

お兄さんはお姉さんに、一方的に話し始めた。お姉さんは補習で学校に行ったはずだったのに、ゲームセンターで遊んでいて補導されたんだって。前はすごくいい子だったのにお兄さんはなげくけど、お姉さんはあくびと生返事ばかり。隣のおじいちゃんも大きくあくびしたと思ったら、とうとう眠り始めた。いびきがすごくうるさくて、お兄さんも話をやめた。まわりの人もうるさそうに顔をしかめていたら、おじいちゃんが、とつぜん立ち上がった。

「ばんざあい！ ばんざあい！」

大きな声で叫びながら、両手を何度も上げるからびっくり。お兄さんがあわてておじいちゃんに言った。

「お静かにお願いします」

おじいちゃんはいしょぼんとして座ると、またすぐにいびきをかいて眠り始めた。

次の駅に着くと、お姉さんが立ち上がりながら僕を見た。

「じゃあな。がんばれよ」

手を振りながらお兄さんと降りていった。僕はほっとした。

路線図を確認すると、本当にあと少しで目的地だ。早く発車しないかなあって待っているのに、ドアが開いたまま全然動かない。おかしいなあと思っていたら車内アナウンスがながれた。

『ただいま全車両に対して緊急停止の指示がありました。そのため上下線とも運転を見合わせております。情報が入り次第ご案内致します。しばらくお待ち下さい』

何度も同じ事をくり返すアナウンスに、電車の中がさわがしくなってきた。「こりゃだめかな」とおじさん達がバスに乗りかえようとか、タクシーに乗ろうとか言っているけど、帰りのことを考えたらタクシーは乗れない。バスはよくわからない。どうしようって手がふるえた。その時

、

「浩太君、大丈夫か？」

お兄さんが戻ってきてくれた。後ろにお姉さんもいる。

「電車あ、しばらく動かないみたいだから、一緒に遠井海岸行くぞ」

キャンディを舐めながら言うお姉さん。

「行くって、どうやって？」

「車でだよ。こいつがどうしてもソーダソフトが食べたいって言うからさ」

お兄さんがお姉さんを指さした。僕がどうしても食べたかったヤツだ。

「僕も食べたい！」

「じゃあいっしょに行こう。遅くなるから親戚の方に電話をしたいんだけど、番号を教えてください？」

それはまずい。

「大丈夫です！ 自分で電話します！」

「そう？ 絶対するんだよ。じゃあ行こうか」

電車を降りてお姉さんに腕を引っ張られながら駐車場に連れて行かれた。お兄さんが鍵を開けたのは、白くてピカピカのオープンカーだ。すごい！

「おじゃまします」

いそいで後ろの座席に乗った。お姉さんも乗って出発と思ったら、ゆっくり横のドアが開いて、電車で横に座っていたおじいちゃんが乗ってきた。

「遠井海岸行きはこちらかのお」

お兄さんはいそいで降りて、おじいちゃんに言った。

「ちがいます。これは私の車です！」

力いっぱい腕を引っ張っておじいちゃんを降ろそうとしたけど、びくともしない。

「いいじゃあん。行き先いっしょだし？ 旅は道連れ世は情けだろ？ 兄貴」

助手席のお姉さんがふり向きながら笑った。

「お前がそんな言葉を知ってるとは」

お兄さんは渋い顔をもっと渋くして運転席にもどると、エンジンをかけた。

住宅街をぬけて田んぼを抜けると、山道をずんずん走っていく。車の天井がないから、頭の上

を緑の葉っぱがキラキラ後ろへ流れていくのがいい感じ。

建物のすき間から海が見え始めてすぐ、目の前に海が現れた。岩がごつごつしている向こう側に、まっ青な海が広がっている。海のおいがぷんとした。白い波の間をサーフィンの人たちがアザラシみたいに浮かんでいておもしろいな。

隣のおじいちゃんは、何も言わないでぼんやりと海をながめてる。風の音と一緒にお姉さんがお兄さんと話をしているのが聞こえてくる。

「遠井海岸に着いても泳がないよな？」

「水着なしで泳げってえ？ 兄貴エロい」

ケラケラ笑うお姉さんに、お兄さんは無言で運転を続けた。僕はちょっとはずかしかった。

海沿いの道は、漁船やヨットが並んでいる港や、旅館もあった。干物やさんの前で、イカが洗濯ばさみではさまれて、赤ちゃんのオルゴールみたいにくるくるまわっているのは何？ お兄さんに向かって風に負けないように大きな声で聞いてみた。

「お兄さん、あれはなに！？」

「イカの一晩干しだよ！ 親戚の家に行ったら食べさせてくれるんじゃない！？ 名物だから！」

大声でお兄さんが答えた。心臓をつかまれたような気がした。親戚の家がないって言わなくちゃ。アイスを食べに来ただけって言わなくちゃいけないのに言えなかった。

ヤシの木の向こうに、遠井海岸という看板があった。車は大きな駐車場に入って、お兄さんは車を止めた。たくさんの車の向こうに、黄色い小さな店で、水色のアイスクリームの看板。テレビで見たままだ。海岸の方は海水浴の人たちでいっぱいだ。

車を降りたお姉さんは僕の方のドアを開けてくれた。

「そんじゃ先行くわ」

お姉さんと手をつないで、さあ行くぞと気合いを入れた。その時おじいちゃんも降りてきてすたすたとお店と反対の方へと歩いていった。

「おじいちゃん、どこ行くの？」

いそいで追いかけるんだけど、おじいちゃんはものすごいスピードで追いつけない。砂浜の上にある花のようなパラソルをもろともせず、レジャーシートやサンダルをけちらしてまっすぐ海へと向かうおじいちゃん。コーラを持った金髪の若い人も小さい子を連れたお母さんも、見るだけで止めてくれない。

お姉さんがやっと追いついて、おじいちゃんの手を握った。

「おい、じいちゃん！」

おじいちゃんはふりむいてお姉さんの顔を見ると、びっくりしたみたいに目を丸くして、わなわたと震えながらお姉さんの両肩をぎゅっつつかんだ。

「すまなかった。仕方がなかったんだ。命令で、君たちの村を」

「なんだよ。村ってわけわかんね。キシヨい」

「あんたたちの家族を殺して、本当に」

おじいちゃんの目がキラキラと輝いた。僕はこわくて動けなくなった。

「はあ？ 初対面じゃん。手え放せよじいちゃん！」

「申し訳ないことをした。許してくれ」

後ずさりして、熱い砂の上に土下座をして誤り続けるおじいちゃんに、お姉さんは混乱してたけど、そのうち大きくため息をついて、

「わかったよ。許してやるよ。だから立てよ」

ちっちゃく舌打ちをしてそう言うと、おじいちゃんはほっとした顔をしたと思ったら、あっという間に海に入っちゃって、ざぶざぶ腰までつかるところまで歩いていった。そしてピタリと止まって、かっこよく敬礼しながら、怒鳴った。

「原上等兵ただいま帰還しましたあ！」

その叫び声に、まわりの人たちが一瞬びっくり顔で止まったけど、しばらくして何事もなかったように動き出した。でもおじいちゃんは泳いでいる人の間で敬礼して固まったままだ。そのうち警察官も来て、人垣もできちゃった。でもおじいちゃんは全然動かない。あんまり動かないから心配で、僕は思い切り叫んだ。

「おじいちゃあん！ こっちだよお！」

波うちぎわから呼ぶと、おじいちゃんはゆっくりふり向いて笑った。

「もうごはんかな？」

海から戻ってきたおじいちゃんはずぶぬれだった。警察官が言った。

「事情を聞きたいので、ちょっと来てもらえますか？」

お兄さんはおじいちゃんと派出所まで行くことになったらしい。

「行ってくるから、亜佐美と浩太君はソフト食べてきて」

お兄さんは、警察官と一緒におじいちゃんを連れていった。

「もどるぞ。やっとなべられる！」

お姉さんと僕はソーダソフトの店に行った。でも店の前はすごい行列だ。僕たちはダッシュで最後尾まで行った。ソーダソフトのプラカードを持ったおじさんが、

「ただいま三十分待ちです。ソーダソフト、ただいま三十分待ちです」

と、汗をふきふき叫んでいる。

「え～、三十分？」

お姉さんがいやな顔をした。だって上から下から熱い光線が僕らを焼くんだよ。ふたりにジュースを飲んだりしていたけど列は全然短くならない。そのうちお姉さんはカバンからガムを出してぷーっとふくらませ始めた。僕もガムを出してふくらませると、お姉さんにはやっとなべられてガムを三つ追加すると、ぷーっとふくらました。みるみるお姉さんの顔くらいになってびっくりした。

「まけるもんか！」

僕も二つ口の中に放り込んでガシガシかむと、ゆっくりとふくらませた。でも大きくはなるけど、目の前がガムになっちゃったところで、われちゃうんだ。

「やるじゃん」

お姉ちゃんにはやっと笑ってもっと大きくふくらました。僕もくやしくてもっとふくらませて……気が付いたら、目の前にお店があった。やっとやっと、食べられる。僕は感激しながらお財布を出した。その時、

「ソーダソフトふたつ」

横でお姉さんVサイン出しちゃった。急いで六百円出しておばさんに注文しようとしたら、お姉さんに手でことわられた。

「しまっておきなよ、おごるから」

「ちがう！ おばちゃん後二つ！」

僕らはおばちゃんから4つのソフト受け取って、両手に持っていそいだ。

遠井海岸派出所は、駐車場のすぐ下だった。おじいちゃんとお兄さんは、警察官と話をしている最中だった。僕は二人にちょっと溶けかけたソーダソフトをあげた。

「いいの？ 浩太君」

「うん。とけちゃうから早く食べよう」

警察官はちょっと笑ってた。お兄さんは恥ずかしそうに、おじいちゃんはうれしそうに受け取ってくれた。僕もお姉さんからもらってみんなで一緒に食べた。さっきまで熱くて熱くて焼かれるお魚みたいな気分だったけど、ひとなめしたらふっとんだ。

「おいしい！」

ソーダの味の冷たいクリームが口全体を涼しくして、そのまま胃の中に直行していくのがわかる。すっごくさわやかな味。思った通り！

「ソーダ味だ。ホントにソーダ」

だじゃれを言ってケラケラ笑うお姉ちゃんと苦笑するお兄ちゃん。

おじいちゃんはゆっくり食べながら、ぽつんとつぶやいた。

「ラムネはうまいのう。子どもの頃を思い出すわい」

しばらくしておじいちゃんを迎えに老人ホームの人が来た。その人はお兄さんと警察官にすごく謝っていた。おじいちゃん、老人ホームを脱走したんだって！

「でもどうしておじいちゃんは遠井海岸に来たの？」

僕が聞くと、老人ホームの人はちょっとかがんで僕に目線を合わせた。

「あのおじいちゃんは、昔南の国に戦争に行ってたんだよ。そこで仲間が死んだことや、たくさんの人を傷つけたり殺したことをずっと後悔しているんだ。夏になると遠井海岸から戦地へ出発したことを思い出して、ここまで来ちゃうんだよ」

おじいちゃん、そんなことがあったんだ。なんだかかわいそうだなあと思っていたら、お兄さんがぷっと吹き出してお姉さんを指さした。

「わかった！ さっきお前、南国の現地人と間違われたんだよ！」

「はあ？」

たしかに顔が黒いし目の周りは白いし、まつげバサバサで金髪で、日本人とは違う顔になっているもんね。お兄さんが超笑うから、お姉さんますます怒っちゃった。

食べ終わると、おじいちゃんひまわりの絵が書いてある小さなバスに乗り込んで、手を振りながら行ってしまった。

「さて、あとは浩太君だな。親戚の人に連絡は付いたのかな？」

僕は食べ終わったソフトクリームの紙をポケットに入れ、覚悟を決めた。

お母さんに電話をしてくれたお兄さんは、少し話をしてから僕にケータイを渡してくれた。お母さんは、一人でアイスを食べに言ったことをゲキ怒ったけど、そのあと言った。

『お母さんもそのアイス食べてみたいから、今度のお休みはそこに行こうか？ 電車で行くから、浩太、案内してくれる？』

僕は大きくなずいた。

「もちろん！ いろいろ教えてあげる！」

行き方も料金もばっちり調べてある。電車も今度は止まらない。待ち時間にはガムがサイコー。

そしてソーダソフトは、画期的でフクザツでさわやかな夏味だって事を。

## 五月蠅い

---

音とは、物の響きや人や鳥獣の声、物体の振動が空気などの振動として伝わって起す聴覚の内容、またはそのもととなる音波そのものを指す。

つまり、その音は相手に届いたときはじめて、「音」と認識される。相手が受け取るか受け取らないかなど考えもせずに。

特に近代から現代にかけて発展した文化は、便利と共に世界に音をあふれさせた。

テレビから流れる音。

車が道路を走る音。

人のしゃべり声。

隣の家洗濯機の音。

階下の子どもが走り回る音。

それらは頼んでもいないのに俺の耳に飛び込んでくる。

中でも一番五月蠅いのは、斜向かいの家から流れてくるピアノとへったくそな歌だ！ 毎日午後八時からきっかり一時間。それが聞こえてくるとマンガのようなさげび声をあげながら目の前のまとめかけのレポートをビリビリと破りたくなる衝動に駆られる。

五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い！

アレに比べたら五月の蠅などかわいいものだ。

思いきり立ち上がると反動で椅子が倒れて床で跳ねた。頭をばりばりと搔きながら玄関を出ると、古い廊下と階段を思い切り足音を立てて降りきり、斜向かいの家の前に立った。

俺が住む安アパートの前にこれ見よがしにそそり立つ瀟洒な建物。噂では県会議員の家だという。

しかし！ 県会議員だろうがなんだろうが、もう我慢の限界だ！

「五月蠅い！」

腹の底から思い切り怒鳴りつけてやったら、ピアノ音がびたりと止まった。

ふん。思い知ったか！

少しすっきりした俺は、部屋に戻ってレポートの続きを始めた。これを今月末までに仕上げないと単位がもらえない。俺にとっては死活問題なのだ。

しかし安アパートの壁は薄く、いつもの騒音にプラス、裏から新築マンションを建てる重機の音、さらにお隣からアヤシイ声まで。壁が薄いってわかっているのに彼女なんぞ連れ込むな！

こうなったら仕方がない。最終手段だ。

引き出しから耳栓を取り出して耳にはめる。

音はほぼ遮断され、耳の奥には血液が流れる音だけ。

俺は安らかな気持ちでレポートに向かった。

この有効と思われる手を最終手段としたのにはわけがある。

忘れもしない受験まっただ中の中三の冬。耳栓をしていて母の呼び声に答えなかった俺は、いつの間にか後ろから来た母に胸ぐらをつかまれ右頬をはり倒されたあげくきつく叱られた。

「何度も何度も呼んでいるのに、何で返事をしないの！ そんなのしてたらいざというときに何も聞こえないわよ！！ 強盗が入ってもあんたしらん顔で勉強してることになるわよ！」

ヒリヒリ痛む右頬を抑えながら激高する母の顔を見上げながら、なんて物騒なことを言うんだと思ったが、可能性は拭いきれない。それ以来耳栓を封印していたのだが単位がかかっているとすれば話は別だ。

どれくらいたっただろう。遮光カーテンの向こうは昼なのか夜なのかわからない。時計を見ていないと時間が過ぎていく感覚がない。音がないだけで集中できるものだ。

どやどやと廊下を走るっていく足音がするのは飯に出ていく隣のカップルだろう。何やら焼ける臭いもするし、腹も鳴っている。口の端っこから流れていたよだれをそれでふき、そろそろ飯にするかとふり向いたときだった。

黒い煙がドアの隙間から流れ込んできていた。

「まったく、誰だよ廊下で魚焼いてるのは」

そう思って立ち上がると、分厚い遮光カーテンの隙間から赤色灯がチラチラと危険を知らせているのに気が付いた。次の瞬間、振動と共に扉が叩き壊され、中に入ってきたのは映画のワンシンのような重装備の男達。一人が近づいてきて何か言っているけど何を言っているのか全くわからないが、この煙が魚や肉を焼いたものではないことは理解できた。

「ちょ、ちょっとまってください。これだけは！！」

レポートが入ったノートパソコンだけを抱えて男に連れ添われて窓に待機していたはしご車のゴンドラに乗った。

安アパートは三階から音もなく赤い炎を上げて燃えさかっていた。昔は白かった灰色の壁を炎が黒く舐めていく。音を消したテレビのような非現実的なショーは、その日の夜遅くまで続いた。

全焼で骨組みだけが黒く焼け残った三階建て安アパートをノートパソコンだけを抱えて見上げていた。大家さんがいろいろとなんだか話していたようだけど、聞こえなかった。同じアパートの人たちも同じように見上げてはいたが、そのうち荷物を持って一人一人、この場を去っていき、最後には警察と消防と俺だけとなった。

俺はあの瀟洒な建物の壁にもたれかかって座り込み、肺の中の空気を全部出し切るようにため息をついた。

なんで財布を持たずに出ちゃったんだろう……。



金が一銭もないということは、ファミレスで一杯のコーヒーを頼りに夜を明かすことが出来ないということだ。明日大学に行こうにも10キロの道を歩いていかねばならないということだ。頼れる人もない。実家は500キロ彼方。大学に泊まり込むという手もあるが、不審者扱いされるのがオチだ。

火事よりもよっぽど強盗のほうがいいじゃないか。母に悪態をつきながらこれからのことを考えていたら、誰かが俺の肩を叩いた。

見上げるとゴージャスなかんじのおばさんが俺の前に立っていた。口が「あの」と形作る。しまった。耳栓をしたままだ。

「ちょっと待ってください」

そっと耳栓を抜いたとたんあふれる音の洪水。それが耳の奥にある鼓膜を否応なく震わせて脳に伝わる。その中で彼女の声だけが優しかった。

「行くところがないのですか？」

「あ、はい」

「ずっと、というわけにはいきませんが、次の下宿が決まるまで私の家にいらっしゃいませんか？」

太めのおばさんの声が、天使のささやきに聞こえるあたり、俺はどうにかなってしまっていたらしい。即答で了承していた。

「よろしくおねがいします！」

深々と頭を下げる俺に彼女はゆっくりと微笑み、言った。

「いいえ、昼間のお礼です」

その笑顔は本当にこわくて全身が凍り付いた。

昼間のって、怒鳴りつけたあれか？ もしかしてあの仕返しなんじゃないのか？

しかし仕返しの不安より、単位がかかったレポートだけは仕上げたいというささやかな願いを是が非でも叶えたかった。

こちらへどうぞと連れて行かれたあの家は、玄関だけでもだだっ広くてめちゃくちゃゴージャスなのに、中に入ればシャンデリアと高そうな玄関マット。出されたスリッパはふっかふかで、廊下の床はさらにふっかふかだった。本当のお金持ちなのだと思ったら、何やら情けなくなってきた。二階に上がって通された部屋は元々は誰かの部屋だったらしく、ベッドやたんすが所狭しと並び、ベッドの横の壁には5年前大流行したビジュアル系バンドのポスターがデカデカと貼ってあった。

「昔使用人が使っていた部屋ですわ。こちらをお使い下さいね。それから」

そして彼女は手を出した。

「耳栓は没収です」

にっこりと笑う彼女に、俺は観念して耳栓を差し出した。

「おなががすいたでしょう？ キッチンに用意してますから、どうぞ」

キッチンの言葉におながが反応した。ぐうと鳴る音に俺は屈服するしかなかった。お手伝いさ

んが出してくれた白いご飯となにやらごちゃごちゃ入ったスープをごちそうになった。うまかった。

食後のコーヒーまでいただきながら、俺はそっと聞いた。

「あの、なんで親切にしてくれるんですか？」

すると彼女はゆったりとした二重あごをふるわせながら笑った。

「困ったときはお互い様でしょう？」

その言葉に裏はないだろうなと勘ぐっていたその時。あのピアノの音が聞こえた。このところずっと聞こえてきていた歌だ。

「あのお……」

これは拷問でしょうか。

「私たちも困っているのですよ。ですのでお泊めする代わりに、一つお願いを聞いていただけないでしょうか」

そう言っておばさんは立ち上がると、優雅に手招きをするので仕方なく付いていく。

応接室のふっかふかのじゅうたんを踏んでいくと、奥の方にグランドピアノが置いてあった。どんだけ金持ちなんだこの家は！ 若干の殺意を覚えながらピアノに近づいていく。

そこにいたのは、俺と同じくらいの年の女だった。手を止めておびえた様子でこっちをじっと見ている。そのうちぽたぽたと涙を落としながら泣き始めた。

「梨音さん、こちら今日の昼間に怒鳴り込んできた方ですよ。火事で焼け出されたのでうちでお世話することになったの。えっと、名前はなんでしたっけ？」

言ってなかつたらどうか。

「奥田です。奥田孝。律大工学部の三年です」

「あらそうなの。ほら、ごあいさつなさい」

おばさんがピアノの前で泣いている女をうながすと、彼女は涙をハンケチでそそとぬぐい、「ワタクシ聖音大二年の林野原梨音です。よろしく申し上げます」

深々と頭を下げられて、俺も思わず深々と頭を下げた。あの丘の上のお嬢様学校か。

「あの、五月蠅かったですか？ 耳栓で死にかけくらい五月蠅かったですか？」

そんなこと言われても……本当に五月蠅かったのだがそう言うわけにはいくまい。

「昼間のことは謝る。レポート作成中で気が立っていたんだ」

「でも五月蠅かったんですね」

「……」

「やっぱりそうなのね！」

号泣する彼女を母親は抱きしめて頭を撫でた。

「そんなことはありませんよ。あなたはとても上手よ」

「でもでも！ この方は五月蠅いって、五月蠅いって怒鳴ったんですよおお！」

いい年して鼻をすするな。そもそも何でこんなお金持ちなのに音がだだ漏れなんだ。

「この部屋、防音とかしてないんですか？」

「防音はしていますが、閉め切った部屋はこわいみたいで、気が付くと窓を開けてしまうので困っ

ていたところなのですよ」

おほほほとおばさんは笑った。だからあんなに大音量で聞こえてきていたワケか。甘えにも程がある。

俺の中でぶちんと何かが切れた。

「あ……んのなああ！ 窓開けて中途半端な歌なんざ歌うんじゃねえ！ 何様のつもりだ。人に聞かせられるまでは防音室でやるのが礼儀ってもんだろ！ 一人で練習するのがこわいだと？ 何甘えてんだ、小学生でもあるまいし！ 舞台では一人だろうが！ そんな根性なしは歌う資格はねえ！ やめちまえ！」

怒鳴る俺を、娘さんは硬直して凝視し、おばさんは何故か優しいまなざしで見ている。

しまった。これから寝泊まりさせてもらおうとしている家の娘さんを……。

するとおばさんはくるりと娘さんに向き直り、きりっとした顔で言った。

「いいですか、梨音さん。奥田さんには毎日あなたの歌を聞いていただきます」

「そんな、お母様！」

まさか、あの歌を毎日至近距離で聞かされるのか？

あまりのことに言葉を失っていると、おばさんがこちらに向いて有無を言わせない口ぶりできりりと言った。

「一ヶ月後にオーディションがありますの。上位入賞者は3月に四鳥居ホールで演奏することになっています。それまでこの子の力になっていただきます。合格までの衣食住は保証致します。住み込みのバイトだと思ってくださいね」

ものすごい威圧感だ。言葉を失っていると、おばさんはやさしく娘の肩を抱いた。

「この子は歌が大好きなのですが、今ひとつぱっとしないといえますか……私も夫も音楽は素人で、この子のどこが悪いのか全くわからないのです。お願いします。是非ともこの子の力になっていただきたいのです」

「でも俺、多少の経験はありますが、素人ですよ？」

「いいのです。お客がいた方がはげみになりますから」

そう言われて俺も腹を決めた。このご時世で住み込みのバイトが見つかるなんて、俺はついでなのかもしれない。

「わかりました」

これも衣食住充実のためだ。我慢、我慢。

「早速奥田さんに聞いていただきましょうね。梨音さん」

「はい、お母様」

娘さんはステレオに向かうと、スイッチを入れた。

毎日聞こえてきて俺を苦しめたにつくきピアノ伴奏と共に彼女が歌い出す。

これ……

ああ高音が……

そこはそうじゃない……ってのに！

「おい！」

びくっと彼女の体が硬直した。

「おまえの音、全然届いてねえ！」

「届いて、ない？」

うるうるした目で俺を見上げるな。

「おまえが歌ってるのは、中田義直のさくら横ちょうだろ？ 恋を想う歌だってのに、お前のは夜桜宴会じゃねえか！ 高音にぶら下がるな！ 支えがないからふらっふらだ！ それにこのピアノ伴奏、学生か？ 録音してもらうなら教授クラスにしろ！ ピッチがあってねえんだよ！」

畳みかけると、ものすごくいい顔をした彼女がいた。

「は、はい！ わかりました！！」

うれしそうに頬を染めるな。Mかおまえ。

「もう一度、最初から」

ステレオのスイッチ入れて、ピアノ伴奏聞いて、……出だしっからだめじゃねえか！ 「上ずってるぞ！ 腹とケツの穴締めろ！ うつむくんじゃねえ！ 上っ面の技術だけが歌だと思ふなあああ！」

それから俺は大学に行く間と寝ている間以外は特訓につきあうこととなった。おばさんが言ったとおり、衣食住は保証されている。親にも、

「おたくのご子息ですが、火事に遭われて、ほんとお気の毒で、ご近所でしたので、下宿先が決まるまでこちらでお世話させていただきますわ。ええもちろん、ご迷惑だなんて、おほほほほ」等と連絡されてしまったため、逃げようものなら親に通報されかねない。

梨音は（面倒だから呼び捨てにしてやる！）音大に行くくらいだから歌い方等は一般人よりうまい。技術だけならかなり上位に行くと思う。ただ微妙に、本当に微妙に音がずれる。それが耳障りで困る。

しかし教え始めてからは成長が著しく、夜桜の下の酔っぱらいはもういない。

午後9時を過ぎ、そろそろ休もうかと思っていたときだった。梨音がへろへろと楽譜を整えながら聞いてきた。

「あの……奥田さんはどこで歌を習われたのですか？」

いきなり言われて少し考えた。

「ピアノは三歳から高校卒業まで。声楽の基礎は少年少女合唱団に所属していた頃習った」

「え？ それだけなんですか？ すごく詳しいですね。音も正確ですし」

「絶対音感があるって言われたことはある。おまえはいつから歌を？」

「私……」

梨音ははずかしそうにうつむいた。

「昔から好きなんです。私、歌以外はなにをやってもダメで、勉強もあんまり好きじゃなくて、

仕事をするなら音楽関係がいいなあって。だからたくさんの人に聞いて欲しくて。教授は『君の実力なら大丈夫』と言ってくさるのですが、すごく不安で。奥田さん、私、受かるでしょうか」

心配そうな声に俺は顔をしかめた。

「その後ろ向きな考え方向とかしろ。これから受けるってのに落ちる心配だけか？ 少しは本番どうするのか考えているのか？ まあ大丈夫だとは思いますが」

目の前にあったから何となく梨音の頭を撫でていて、はっとして手を引っ込めた。悲鳴でも上げられたらやばいと思ったが、彼女は何にも言わず赤い顔でうつむいていた。疲れたのか？ 風邪でもひかれたら大変だ。

「俺、レポートあるから部屋に戻るな。おまえも寝ろよ。寝不足だとい声が出ないぞ」

「は、はい。おやすみなさい」

梨音の声を背中に俺は部屋を出て自分にあてがわれた部屋に向かった。今日こそレポートを仕上げてしまわないと。扉を閉めてノートパソコンの電源を入れて、上着のポケットから新品の耳栓を取り出した。これで今日は朝まで集中だ！ そう思っていたのだが.....。

ケータイの目覚ましブルブルとポケットの中で震えて、朝が来たことを告げた。顔を上げれば画面一面に訳のわからないローマ字が並んでいる。キリのいいところまではやったことは覚えているが、いつの間にかキーボードに突っ伏して眠ってしまったらしい。データが消えていないことを確認してから、DELキー押しっぱなしで意味不明の文字を消していく、その時ふとかたわらにクッキーの皿がお茶と一緒に置かれているのに気が付いた。不格好で手作りっぽい。お手伝いさんかな？ それともおばさんかな？ 今日はやけにサービスがいいなあと、手を伸ばしたら人の気配を感じた。ふり向くと梨音が立っていた。

「え？」

自分の声が耳の中で震える。

梨音は俺に手を伸ばすと柔らかい指で頬に触れた。いつも歌うとき見つめている口が、いつもと違う言葉を紡いだが聞こえなかった。彼女は困った顔でもう一度同じ事を言ったが、俺が困惑している間にさっと表情を変え、ばたばたと部屋を出て行ってしまった。

いつ入ってきたんだ？

ゆるゆると耳栓をはずしてノートパソコンの横に置くと、昨日から着ていた服を着替えた。ふと、冷め切った紅茶の横にあるクッキーをつまんだ。悪いのは形だけで素材も味も申し分なかった。まさか梨音の手作りか？

足取り重く朝食に降りていくと、目を赤くした梨音がうつむいて廊下に立っていた。

「あの」

そう口を開きかけたのを、俺が止めた。

「今日も帰ったら聞くから。それからクッキー、うまかった」

照れくさくて上目遣いでそっと彼女の顔を見ると、梨音はうれしそうに頬を染めていた。俺もほんのりと笑ってはみたが、いつの間に来たのか、梨音の後ろでおばさんの鬼の形相に硬直した

「二人とも、いいかしら」

食卓に三人が座ると同時におばさんが話し始めた。給仕してくれるお手伝いさんはともかく父親である県会議員氏も触らぬ神に祟りなし精神で我存せぬの姿勢を貫き新聞に目を通しながら黙々と食べている。

「奥田さんにはとても感謝しているの。梨音さんの歌は格段によくなって、先生方にお褒めのお言葉を頂きましたわ。でも梨音さんを部屋に連れ込むなんて……」

冷めていく朝食を前に、俺はおばさんへの憤りを隠せなかった。俺が梨音相手にそんなことするかよ。

「お母様、奥田さんは悪くありません。私が勝手に」

「おだまりなさい！」

おばさんの金切り声に隣の県会議員氏が口をはさもうとしたが、鬼の形相に黙り込んだ。

「奥田さんには新しい下宿に移っていただきます。後で不動産やさんに案内してもらいますから、荷物をまとめていただけますか」

怒りで腹の中がどうにかなりそう。これ以上おばさんの顔を見るのも嫌だ。俺は即座に席を立った。

「お世話になりました！」

新しい下宿はひとり暮らし専用マンションだ。家具付きのところだったから、買いそろえなくて済んで助かった。

引越し早々レポートを徹夜で書き上げて提出。留年は回避された。ほっとしつつカップ麺で夕食を取る。わびしい生活だが自由でいい。なによりここは壁が厚くて静かだ。

でも、静かすぎても落ち着かないものだな。

パソコンを立ち上げて、ソプラノ歌手のアルバムを再生。梨音を教えているときに参考にとレンタルしたやつだ。

何曲か後にさんざん聞いた歌が始まった。

加藤周一作詞・中田喜直作曲 さくら横ちょう。

梨音と違う安定した高音。豊かな叙情性。目の前に満開の桜が咲き誇っているかのように思えるから不思議だ。でも、若い果実のように青臭くいぎいきとした声ではない。

この歌のように、あいつはここにいない。また会ったとしてもあのおばさんがいるんだ。梨音との間にはなにも始まらない。

ふと、上空から幻の花びらがひらひらと舞い落ち、俺の頬に触れた。

梨音が俺の頬に触れたときのように。

これじゃない。

俺が聞きたいのはあの歌だ。青臭くて音がはずれる度にイライラするあれだ。急いでケータイから、考え得るだけの知り合いにメールをばらまいた。

『聖音大のコンサートのチケット、手に入らないか？』

数日後、チケットを持っているという同じ学部の女と学内のカフェテリアで待ち合わせた。友達が聖音大にいるのだそうだ。

「悪いな。無理言って」

彼女は高そうなバッグから一枚の紙切れを取り出した。

「奥田君が音楽好きなんて知らなかった。知り合いでも出るの？」

「ちょっとな」

そう言われて差し出されたパンフを見て愕然とした。梨音の名前がない。俺は慌てて立ち上がり、チケットをカバンに入れた。

「これチケット代。いろいろサンキューな」

財布から二千元出してテーブルに置くと急いで外に出た。ケータイから電話をしてみたが、梨音の家は留守電で誰も出やしない。こうなったら家に直接行くしかない！

電車に乗って、通い慣れた道をたどっていく。見慣れた街角の中にあるはずの前の下宿先は、早々に駐車場になっていた。なんだよ。早すぎるじゃないか。そう思っていると、彼女の家から相変わらずのへたくそな歌が聞こえてきた。またピッチがあってない。他にも言いたいことが山ほどあるのに。チャイムなんて押したらきっとおばさんに追い返される。さてどうしたものかと思っていると、音が止まり、窓から梨音が顔を出した。その時の顔はびっくりしすぎて目が飛び出るほどだった。

「奥田さん！？」

自然に笑みがこぼれる。なんだ。平気そうじゃないか。

「よう。花でも見に行くか？」

俺たちは電車を乗り継ぎ、大きな市民公園に来ていた。ここには早咲きの桜があって、毎年この時期にきれいなピンク色の花を付ける。去年物好きな悪友が提案した早すぎる花見の場所を探した。あやふやな記憶を頼りに砂利道を歩いていくと、地味な色の木立の向こうに淡い色を見つけた。急ぎ足でその真下に出る。

咲き誇っていたのは河津桜。ソメイヨシノよりも大きく鮮やかなピンクの花を満載した枝は、音もなく風に揺れていた。

「きれいだろ？ 本番前に咲くこれを見せておきたかったんだ」

すると梨音は顔を曇らせた。

「オーディション、残念だったな」

落ち込ませてしまうだろうかと思ったが、そうではなかった。梨音は思い切り俺に頭を下げたのだ。

「ごめんなさい。あんなに教えていただいている、申し訳ないとは思ったんですが、私、棄権したんです」

意外な言葉に俺は聞き直した。

「棄権？ かなり歌えるようになっていたのに」

「歌うと、つらくなってしまって……」

梨音の声がだんだん小さくなっていく。

「たくさんの人に歌を聞いてもらうんじゃないのか？ 辛いから棄権するなんてその程度だったのかお前！」

俺の怒鳴り声に犬を散歩しているおじいちゃんが目を丸くして通り過ぎていく。俺はすぐさま恐縮して口をつぐむと、梨音が珍しく口をとがらせた。

「奥田さんに聞いてもらえないのに」

「はあ？」

なんで俺？

「奥田さん、あの時の返事、聞かせてください」

あの時、といわれて聞こえなかった梨音の言葉のことだと見当が付いた。

「悪い。あの時耳栓していたから、何言ってるのかわからなかった」

すると彼女は惚けたように口を開けたが、すぐほっとしたように微笑んだ。

「そうだったんですか。私てっきり……」

なんなんだよ、それ。

「じゃあもう一度言ってくれないか？」

梨音ははずかしそうに顔を伏せ、それでも思い切ったように顔を上げた。

「もう二度と言いませんから、ちゃんと聞いてくださいね。あの」

そこまで言って彼女は口をつぐんだ。

「どうしても言わなければいけませんか？」

「すぱっと言ってしまうえ。すっきりするぞ」

このままでは俺がすっきりしない。

「じゃあ、言いますよ？」

小首をかしげて、かわいいじゃないか。

「オーディションに受かったら、ふたりっきりで桜を見に行きましょうって、言ったんです。それで」

「桜、見に来てるけど」

話を分断した俺をにらみ、梨音は思い切りむくれた。

「ええそうです。今見に来てます。奥田さんに先を越されたんです！」

梨音はくるっと後ろを振り返りうつむいた。何かをこらえるように肩が小刻みに震えている。まるでウサギみたいだ。

「それで？」

「あの歌のように花を見て、何かを始めるでもなく一緒にいられたらいいなって」



もごもごと口ごもる梨音ははずかしそうに顔を伏せた。

「……え？」

戸惑う俺に梨音がはにかみながら微笑む。

「にぶいです。奥田さん」

音とは、物の響きや人や鳥獣の声、物体の振動が空気などの振動として伝わって起す聴覚の内容、またはそのもととなる音波そのものを指す。

つまり、その音は相手に届いたときはじめて、「音」と認識される。

だが梨音が発した「音」を瞬時に理解することは出来ず、10秒以上経過した今になって、そのはずかしげな仕草に納得がいった。

梨音のくせに、俺のことをにぶいなんて言うとは許せん。

俺は梨音をぎゅうぎゅうと強く抱きしめ、耳元でささやいてやった。

「五月蠅い」

先に言うな。

オレンジ色の電車がゆっくりとホームに入ってきた。

それを待つ通勤通学客でホームはほぼ満員。電車の中にもぎっしり人が詰まっているのが見えて、春菜は顔をしかめた。

ドアが開くのと同時に、押し込まれるように電車に乗り込むのと同時に人波に押され、気がつけばいつの間にか電車の中程にいた。これでは降りるのに困るだろう。そう思いながら辺りを見回した時、

「おはよう」

聞きなれた声に見降ろすとそこに、窮屈そうに座る友人の仁美がいた。

「おはよう」

自分では元気一杯笑顔で応えたつもりだったが、仁美は春菜の顔を見るなり、咎めるような口調で言った。

「寝不足？　すごいよ、目の下」

「だって……昨夜は宇宙望遠鏡の特番だったのよ」

うっとり、美しい深宇宙の映像を思い浮かべる春菜に、仁美は、

「深夜でしょ？　そんな色気のない……」

と、苦笑した。

けれどもその時にはもう、春菜の視線は人混みの向こうに釘付けになっていた。心臓の鼓動が大きくなる。実は今日春菜がこの電車に乗ったのも、彼に会えるのかも知れないという淡い期待があったからだった。

最初に彼を見かけたのも、三日前の同じ車両だった。ポールにもたれて本を読む姿がとても優しげで、伏し目がちの長いまつげに、なんて綺麗な顔をした子なんだろうと暫し見とれてしまった。

そして今日、期待通りに彼に会えた。その嬉しさから春菜は、親友が目の前にいるのにもかかわらず、つつい彼と友人達の会話に耳を傾けてしまうのだ。

彼の朗々とした声は、とりとめない無駄話を価値ある話に変える魔法のようだった。

「……それでその子の名前、わかったのか？」

彼と一緒にいる太めの友人が背の高い友人に言った。

「声かけるだけでも相当勇気いるってのに、名前なんてどうやって聞くんだよ」

本当に困ったというように、その友人がため息をつく。

その時、彼がぼつんと言った。

「アルファケンタウリって知ってる？」

それを聞いて驚いたのは春菜だった。まさか彼の口から、大好きな星の名前が出るなど思いもしなかったからだ。春菜は高鳴る胸を押さえながらじっと耳を傾けた。

「おまえのことだから、どうせ星かなんかだろ？」

太めの友人が言うと、彼は目を伏せる。

「うん。地球から一番近いって言われてる恒星」

そう言って彼は背の高い友人に笑いかけた。

「小さな星にも一つ一つ名前があるんだ。それは人間が付けた名前で、本当の名前なんて誰にも判らない。でも名前を付けることで、それは他の星と区別される」

「で、何が言いたい？」

「……つまり、名前はそれだけ重要ってこと」

少し照れながら、彼が笑った。

「二学期も終わるっていうのにクラスの奴半分も覚えられないお前に言われたくない」

太めの友人がそう突っ込むと、ばつが悪そうにまた笑った。

春菜の頭の中は彼の言葉でいっぱいになっていた。

たしかに名前は重要だ。名前を知らなければ、呼び止めることも出来ない。彼の名前を知りたい。春菜は心底思い、彼等の会話の中に彼の名前が出ないものかと耳を傾け続けた。

「どうしたの？」

先程からあさっての方を向いたままの春菜に仁美が声を掛けたが、春菜は視線を彼から離せない。仕方なく他のことを考え始めようとした仁美に、

「ねえ、あの制服って、どこだろう」

春菜が聞いた。

「え？ どこよ」

仁美は少し腰を浮かせ、春菜の指さす方向に目をこらした。が、立っている乗客が壁になって、仁美からは見えない。

「見えないなあ。その子が降りる時に教えて」

「うん」

するとすぐに電車が停まり、人が動いた。

「……あ、今降りた」

「どこどこ、どの子？」

振り向いて彼を捜す仁美に、となりのサラリーマンが迷惑そうな視線を向ける。

駅のホームには同じ制服を着た男の子が沢山いて、春菜は正確に彼を指さしたが、仁美には判らないようだった。しかしその制服には見覚えがあったらしい。

「ああ、あれ蒼明学院だよ」

と、春菜に教えた

蒼明学院といえば、有名私立男子校。そういうことには疎い春菜でも、その名には覚えがある

。

「いいよなあ。あそこ大学もエスカレーター式だから受験なんてないんだよね。うらやましい

よねえ」

苦笑していた仁美がいきなり、「あ」と、声を上げた。

「もしかして、気になる人でもいた？」

「そんなんじゃないよ。ただちょっと、か、っこいいかな……って」

戸惑いつつ言葉にだしてみた春菜は恥ずかしさに首をすくめた。本当は澄んだ冬の空に一際輝くシリウスのようなのだと思ったのだ。彼を思うだけで頬は上気し、鼓動は激しさを増した。流行のアイドルに心ときめかせたことはあったが、この気持ちは間違いなくそれ以上だ。

「星しか興味がなかった春菜がねえ。ま、蒼明の子ならいろいろ貢いでくれそう」

少しからかいを含んだ仁美の言葉に、春菜は顔をしかめてみせた。思わず首をすくめた後、仁美は何かを思い出したように悪戯っぽく笑って春菜を引っ張った。

「春菜。いいことを教えてあげる」

「なに？」

不機嫌に答えると、仁美は笑ったまま囁いた。

「おまじない。好きな人とお近づきになれるって」

どきん、とした。

「そ、そんなのあるの!？」

「あるある。会うたびにね、スケジュール帳にシール貼るの。それが七つ溜まったら、告白のチャンスなの」

「こ、告、白、なんて」

目の前がチカチカと点滅したように感じた。告白なんて、考えてもいなかった。

「だってさ、あんたが星以外のことで興味を示すなんて今まで無かったことだもん。応援したいんだよね」

仁美がそう言ってくれたことが、春菜はとても嬉しかった。

「ありがとう、仁美ちゃん」

家に帰ると、春菜は机の引き出しからシールを取り出した。文房具屋で一目惚れして買ったのだが、もったいなくて使えずにいたものだ。

キラキラ光る色とりどりの星が貼り付いたシートから小さな黄色の星を選び、スケジュール帳に貼った。おまじないを信じた訳ではないが、少しでも話す機会が出来るならという淡い気持ちがそうさせたのだった。

次の日も同じ車両に乗ると、彼は同じ場所で文庫本を読んでいた。何を読んでいるのだろうかと思って、そっと背伸びして人の間から覗くと、自分もよく行く本屋のカバーがかかっていた。そんな些細な共通点だったが、少しだけ彼に近づいたようで嬉しかった。学校に着いて真っ先にスケジュール帳に青い星のシールを貼った。オレンジと黄緑色のボールペンで書かれた予定の

中で、それは燦然と輝いていた。

次の日も朝の電車で見かけた。今日は友達と一緒に。楽しそうに笑う彼の笑顔にふさわしい、シルバーのシールを貼った。

その翌日は夕方の電車だ。部活の帰りだろう。大きな荷物。疲れた様子が少し気にかかる。家にたどりつくとすぐに、彼の疲れが癒えるよう願いをこめて緑の星を貼った。

次の日は会えなかった。昨日の疲れた様子を思い出し、春菜は心配になった。もしかして風邪でもひいたのだろうか。それとも……。

そんな彼女の顔を見て、仁美はにまにまと笑いながら彼女の席に近寄ってきた。

「どしたの？ あ、もしかして今朝彼に会えなかったから？」

「うん」

「そっかあ。でもコレ聞いたら元気になるよ。新情報。彼の名前、わかったよ」

「ホント!？」

「うん。実は今朝一緒に電車だったの。その時友達にね、マコトって呼ばれてた」

「マコト……君」

それを聞いて思わずシールを貼りたくなった春菜だったが、会ってもいないのにそれは出来ない。春菜は悔しかった。

「何時の電車？」

「七時四十五分かな？ 今日ちょっと遅めだったんだ」

自分よりも一本遅い電車だ。寝坊でもしたのだろうか。でも、元気に学校に行ったのだと分かって、春菜は少しほっとした。

放課後、仁美と電車に乗って次の駅、彼ことマコト君は友人達と話をしながら電車に乗り込んできた。

「よかったね、春菜。彼、いるよ」

「うん」

春菜は膝の上にスケジュール帳を出すと、シールを貼った。今日は赤い星。春菜はそれを蠍座の心臓アンタレスのようだと思った。

友人達と談笑するマコト君の横顔を見つつ、明日も会えるだろうかと思っていると、

「携帯貸して」

突然仁美が春菜の手元から携帯を奪い、さりげなく彼等の方に近づいていった。

「ほら。写真」

戻ってきた仁美から携帯電話を受け取りながら、春菜はその行動力にビックリしたが、それよりも仁美の心遣いが嬉しかった。

携帯の画面で、彼の横顔が小さく笑っていた。

次の日も電車で見かけた。今度は紫色の星を貼った。

シールが増えるたび嬉しさが増す。同時にどんどん欲張りになっていく。姿を見るだけで良かったのに、ここ最近は寝ても覚めてもマコト君のことばかり考えている。

マコトってどんな字を書くのだろう。趣味は？ 部活は？ 好きな音楽は？

きっと星は好きなのだろう。でなければアルファケンタウリなんて、会話の中にぽんと出てくるわけがない。

けれどもこんなに彼のことを考えていても、彼は春菜のことを全く知らない。

知って欲しい。話がしたい。でもどうやって言葉を届けたらいいのかわからない。

すぐ近くに見えるのに、はるかに遠い。まるで星のような存在の彼。

仁美が撮ってくれた横顔は、楽しそうに笑っているだけでこちらを見てはくれない。

春菜は、携帯を充電器に置くと、窓を開けた。冷たい空気が部屋の中に流れ込んできて、春菜は身震いした。

ふと見上げると、空には小さな星がたくさん瞬いていた。

今日は空気が澄んでいるようだ。

「明日も会えるかな」

そう呟いたその時、あの言葉が頭をよぎった。

「小さな星にも一つ一つ名前があるんだ。

でも、それは人間が付けた名前であって、本当の名前なんて誰にも判らないんだ」

「名前……かぁ」

呟く言葉が白く濁り、のぼりながら消えていった。

春菜は思う。この満天の星一つ一つに、地球人が付けたのではない本当の名前があるのだろうか。

だとしたら自分にも坂井春菜ではない、命そのものの名前があるのかもしれない。

春菜はシールの上を指でなぞった。

シールは六つ。あと一つ。

おまじないがチャンスを作ってくれる。その可能性を信じようと春菜は思った。

次の日。

緊張しながら乗った電車だったが、いつもの場所に彼の姿はなかった。

教室でスケジュール帳を眺めていると、

「後一つだね」

と、覗き込みながら仁美が笑った。

「うん、ありがとうね。仁美ちゃん」

嬉しそうな春菜の笑顔を見ながら、仁美も嬉しくなった。

実はあのおまじないは、仁美が思いつきでついた嘘だった。春菜は背中を押さないと絶対に動かないタイプ。男の子関係は尚更である。その嘘が、願わくば本当になりますように。親友の幸福を願って止まない仁美だった。

そしてその帰り道。

春菜はいつものように改札をとおり抜け、ホームの屋根の向こうに広がる空を見上げた。さっきまであんなにも輝いていた西の空は既に色あせ、替わりに小さな星が一粒。

やがて電車がやってきて、目の前で止まった。彼は乗ってくるだろうか。そう思いつつ電車に乗ると、反対側の入り口付近に立った。

窓越しに空の色が徐々に変わっていく。ガラスに映る自分の顔が、心配そうに自らの顔を覗き込んでいる。

そんな顔しないで。彼はきっと乗ってくるよ。

と、自分に言い聞かせていると、次の駅に着いた。すると彼が春菜のすぐ後ろのドアから乗ってきて、いつもの位置でポールにもたれて本を取り出した。

春菜は慌ててすぐ側で空いていた席に座ると、いそいそと鞆の中からスケジュール帳を取り出した。

そして、緊張で震える手で台紙からシールを剥がして貼るとすぐ閉めた。

これで声を掛けても大丈夫。きつとうまく話せる。

気持ちを静めるために春菜はもう一度スケジュール帳をそっと開いて、ぎょっとした。

七つ貼ったはずのシールが、一枚ない。彼の笑顔を思い浮かべながら貼ったシルバーの星だ。仁美と見た時は間違いなくあった。どうして、何故、が、頭の中を駆けめぐる。

慌てる春菜の膝から、派手な音をたててスケジュール帳が落ちた。中に挟んであったシールやプリクラ、友達に貰ったメモが無惨に床に散らばった。

周りの視線を感じながら、春菜は顔を真っ赤にして床のものをかき集め始めた。彼に見られた。こんなみっともない所を……。春菜はそれらを無造作に鞆に突っ込み、ばつが悪そうに席に座った。

その時、それまで本を読んでいた彼がこちらに歩み寄ってきた。

どくん……春菜の心臓が跳ねた。思わず体を硬くする。

彼は春菜の目の前で少し屈み、白く長い指でそれを拾うと春菜に差し出した。

「はい」

スケジュール帳から落ちた細いペンだった。座席の影になって、見落としていた。

「あ……、ありがとうございます。マコト君」

咄嗟に出てしまった言葉に春菜は更にぎょっとした。いつも心の中で呼んでいた彼の名前を、まさか本人の前で言うとは。どうしよう。変な女だと思われたら……。春菜はドキドキしながら反応を伺った。しかし彼は、

「どういたしまして」

と、笑うだけだった。

知らない女の子から名前を呼ばれたにもかかわらず、彼は笑っている。

春菜は思わずぽかんと彼の顔を見つめてしまった。

スケジュール帳の星は、一つなくなってしまった。おまじないは不完全なはずなのに、もしかして、少しは効いてるってことだろうか？

だったらこれはチャンスかも知れない。

春菜は、頭の中で何度もシミュレーションしていた台詞を思い切って言ってみた。

「あ、あの、私、坂井春菜って言います。よかったら今度一緒にプラネタリウム行きませんか!？」

言ったとたん、かあっと顔が熱くなった。彼が怪訝そうな顔をしているのが分かる。

いくらなんでも唐突すぎた。彼の口から大好きな星の名前が出たからといって、しゃべったこともない女の子からの誘いに、いきなり乗ってくる訳がないのに。

「いいよ」

耳に届いた短い一言を理解するのに、数秒かかってしまった。頭の中で何度かそれを反芻して

「……え？」

思わず間の抜けた反応をしてしまった。見上げた彼の顔は優しく微笑んでいる。

信じられなかった。徐々に、嬉しさがこみ上げてきた。

彼は星が好きなのはだ。なら星の話をするればきっと仲良くなれるに違いない。そう考えてプラネタリウムに誘う事を考えたのだけれど、まさかOKしてくれるなんて。

恥ずかしさに彼の顔をじっと見ることが出来なくなった春菜が彼から視線をそらそうとした時だった。

「ちよつとごめん。何か付いてる」

そう言って少し屈むと、彼は春菜の髪に手を伸ばした。憧れ続けた彼の手が自分の髪に触れて



いる。それだけで卒倒しそうな春菜だったが、彼が見せてくれたそれを見て、思わず涙ぐんでしまった。

「なんだろう……シール、かな？」

その指先に、輝く星。

end

かたなかたんと電車から伝わる振動に身を預けながら、マコトはぼんやり外を眺めていた。ぶ厚い雲に覆われた空はかすかな閃光で雨の到来を告げている。今日の降水確率は十パーセントだったはずなのに、天気予報は当てにならないと嘆息する。

学校帰りの生徒でごった返す車内は、設定温度高めのクーラーでは効きが悪く、よどむ空気がなんとも情けない気持ちにさせた。

電源が切っている携帯は鞆の定位置。電源を入れればきっと口やかましい悪友達からのメールや留守電が入っていることだろう。春菜からの連絡もあるに違いない。

男子校ということもあって彼女が出来ると大騒ぎになることは知っていたが、マコトにはそれこそ異世界の出来事と同じで、さほど意味のないことだった。

その頃、毎日同じ電車に乗って来て、ちらちらとこちらを伺っている女の子がいた。きっと自分以外の誰かを見ているのだと気にもとめていなかった。

その彼女に突然プラネタリウムに誘われた。それでようやく自分を見ていたのだと理解した。元々星が好きだったマコトは、星好きの友達が増えることを心底喜んだ。

しかし、プラネタリウムを一緒に見ることをデートと言い、バレンタインのチョコレートを買ったら彼女のことを『自分の彼女』と言わなくてはならないらしい。

このところ悪友達も自分をからかう。

「おまえ、変わったよな。やっぱ、彼女出来たから？」

「やっちゃったとか？」

「きゃ～、マコトくん不潔！」

否定しても悪友達は何も聞かない。好奇の目は、居心地がよかった学校という閉鎖空間に毒を含ませ、胸が苦しくなった。

「変わった、変わったって。無表情少なくなったし笑うこと多くなった」

杉本が彼を小突く。

「そんなことない！」

「またまた～」

全力の否定も彼らの前では笑いに変わる。通学時彼女と同じ電車に乗り合わせると、悪友達はやにやしながら距離を取り、彼女の友人も一緒になって離れていく。『彼女持ちだから』と遠慮されたりからかわれたりするのが苦痛なのだ。

彼女と星の話をするのは正直楽しい。たしかにかわいいとは思いますが、愛とか恋とか、キスをしたいとどうしても思えない。

そんな関係がずるずると、もう6ヶ月続いている。

今日も帰り道、春菜がうれしそうにマコトを見上げてきた。

「マコト君、今度の日曜日、なにか用事がありますか？ プラネタリウムのプログラム、今日か

ら替わったんですよ」

そう言いながら彼女は頬を染める。それがたまらなく、苦痛だった。

「春菜さん、……ごめんね」

そう言うと、大きな目を細めて少し不満そうな顔をした。

「日曜日、用事があるの？」

答えに詰まってしまった。別に用事はないのだが、今は一緒に行こうと、どうしても思えないのだ。

「うん、まあ……ちょっと」

曖昧に返事をすると、ちょうど電車が止まった。

「今日はここで降りるから。それじゃ」

最寄り駅より一歩手前で、彼は電車を降りた。

ドアが閉まる瞬間に携帯が鳴った。見てみれば一緒に乗っていた悪友だったが、出ることもなくそのまま電源を落とした。

「このまま別れよう」と言ってしまうところだった。考えただけで喉の奥が詰まり、心が苦しく気持ちが悪い。気分が悪くなるくらい決断などせず、ずるずると今のままの関係を続けていければいい。でも、それに耐えられるだろうか。

一人意気地のないことを考えながら最近駅構内に出来たばかりの本屋の前を横切る。最寄り駅にもこんなのできるといいのと思うくらいの品揃えだ。しかし今日は寄ろうとも思えず通り過ぎようとした。

その時、ウィンドウに飾られている一冊の本に目が釘付けになった。

紺色の表紙に無数の星。きっと今月の新刊だ。ふらふらと本屋に入ると、すぐに平積みしてある同じ本を見つけた。

満天の星に彩られた夜空の写真。

あまりの見事さにどこで撮られたのだろうと本を開いて確認する。

意外にもここから電車で2時間もすればたどり着ける山中にある天体望遠鏡で撮影されたものだった。併設するプラネタリウムは夏季営業中で8時までやっている。今から行けば閉館に間に合うかも知れない。

そう思ったらもう行動に移っていた。本を買い、ATMで与えられているお小遣いを引き出す。軽く食べられるようにお菓子とペットボトルの水を買い込むと、片道の切符を買った。改札を通り過ぎながら、きれいな星空を思い浮かべ、その一つ一つの名前に想いを馳せた。頬がゆるんでいくのを感じながら、マコトは家に向かう電車と反対側のホームに立った。

春菜は電車をいきなり降りてしまったマコトを心配していた。どこか最近元気がないと気になっていたのに、自分は何も気を使えなかったと後悔していた。

「たあく、電源切りやがった！ 春菜ちゃんおいて行っちゃうなんて失礼だよな」

「気にしないでね。春菜ちゃん」

マコトの友達そう慰めてくれる。彼等はマコトとの仲を応援してくれていたし、気を遣ってくれるのもわかっていた。たまに過剰なほどに。

「大丈夫だよ、春菜。きっと用事があったんだよ」

仁美も気遣って近づいてきてくれた。

「そうだよね……うん」

無理に頷きながらも、さっきの「ごめんね」はなんだっただろうと気になって仕方がなかった。ひょっとして、好きな人が他に出来て別れようと思っているのだろうか。

「じゃあさ、久しぶりにどこか寄っていく？」

おどけるように言う仁美に、春菜は頷いた。

「俺も行っていい？」

「あ、俺も」

「僕も」

と、マコトの友人達が手を挙げる。すると仁美がううむとうなりを上げた。

「だめよ。今日春菜はあたしと、デートなの！」

ベーッと舌を出しておどける仁美に、男子達が笑う。その仕草を少し笑いながら見ていた春菜だが、心はマコトの一言にとらわれていた。

あこがれていた男の子に告白して、その仲が六ヶ月、何もなく過ぎているのは、マコトが大事に思ってくれているからだと思っていた。それが違うかも知れないという思いにとらわれ、不安になった。

「春菜？」

腕を絡ませてきた仁美が訝しげに春菜を伺う。春菜はそれに気が付いて慌てながら、

「みんな一緒の方が楽しそうだし。いいよね、仁美ちゃん」

そう気遣って笑った。その笑顔は多少引きつったものになってしまったが、友人達はなにも言わず微笑んでくれた。

その後、最寄り駅にある店をひやかし、ダブルのアイスクリームに舌鼓を打った。マコトの友達達はちょっとしたことでもおどけるので、春菜はうっかり笑ってしまった。どんなに悩んでいても笑えることが不謹慎な気がして、そっとマコトの後ろ姿を思った。電車を一人降りていく彼は寂しげに見えた。自分と一緒に寂しいのだろうか。そう思うといてもたってもいられず携帯の短縮を押した。マコトに通じているはずの電話は、一方的に拒否され、繰り返すアナウンスの音がむなしく耳元で響いた。

電車で揺られながら先ほどから降り出した雨を苦々しく思う。ぽつぽつと大粒の雨はあっという間に土砂降りに、雷鳴をとどろかせる空はどんよりと暗い。

「止むかなあ……」

という年配の男性の声に心で反論する。「もちろん止む」と。そして、空気中のゴミが雨で洗い流された後には素晴らしい星空が広がっているはずだと。

電車が止まった。年配の男性を含むたくさんの人が降りて、傘を持った少しの人が乗ってきた。とうとう立っている人がいなくなった。あんなに混んでいたのが嘘のようだ。冷たい冷房の風が肩を撫でて首をすくめる。あと三十分で最寄り駅に到着、その後はバスで1時間。ぎりぎり間に合う予定だ。自らを奮い立たせるように鞆から例の本を取り出した。きれいな星空。それがもうすぐ直に見られる。ミルクウェイにかくれるように飛ぶ白鳥が見られるかも知れない。こと座のベガ。アルタイル。他にもたくさんの星が自分を待っている。

でも外は雨。本当に止むだろうか。それでもこの天文台に行けばきっと誰か星の話をしてくれて、好奇心を十分に満たしてくれる、はずだ。

「止むかな……」

自分も呟いてみる。ふっと笑顔が浮かんだ。春菜の顔だった。

あれは五月、新しい番組を見ようとプラネタリウムに向かう途中、電車が事故で止まってしまい、間に合わないかも知れないとぼやいたときだった。力のある瞳が自分を見上げた。

「きっと大丈夫だよ！」

確信に満ちたその顔に、自分は気圧されたのだ。

どうして今あの時の笑顔が浮かぶのか、理解が出来なかった。それだけ一緒にいる時間が長かったということだろうか。もう別れようとしているのに。ひどいことをしようとしているのに。

彼女はどのようにしているだろう。きっと電話をしようとしているだろう。いや、もうこんな意気地のない自分など見捨てて他の子達と仲良くやっているかも知れない。そう思うとなんとなく、本当になんとか体の隅々を流れる血液が毒を帯びたように息苦しくなった。体中からその毒がしみ出してしまうのではないかと、まわりを伺うほどに。

早く着かないだろうか。

星達はこんな毒など吸い出してくれるはずだから。

仁美達と別れた春菜は、玄関先で靴を脱ぎながら、もう一度、と思いつつ短縮ボタンを押した。やはりアナウンスの声。いっそ電源を切ってしまうかとも思ったが、かかってくるかもしれないという一縷の望みにかけていた。

まさか、と、悪い考えが頭をよぎる。

仁美は機嫌が悪いただけと言ってくれたが、一度ついてしまった悪い考えは、彼女に安らぐ時を与えなかった。様子がおかしかったというマコトの悪友達の証言が、最悪の結果を容易に想像させたからだ。

「春菜、着替えたら手伝って！」

台所で母が怒鳴る。

「はあい」

と、生返事をして自分の部屋へ行くと、荷物を置き、胸元のリボンをほどいた。ハンガーに制服をかける。隣には先日デートに着ていったワンピースがかかっていた。

「マコト君……」

無事に戻ってきてくれる……よね？

声にならない言葉をため息と一緒に押し出して、春菜はTシャツとスカート姿になると母を手伝うため、台所に急いだ。

「レタスちぎってくれる？」

「うん」

瑞々しいレタスをちぎり、ボールに入れる作業をしていると、母が心配そうに、「なにかあった？ 心配事？」

と、聞いてきた。マコトのことを話してみようかと思った。でも勘違いだったらと思うとそれを口にするにはできなかった。

「なんでもないよ。ちょっと疲れただけ」

「そう？ ならいいんだけど」

母は軽く受け流すと、「これ盛りつけて」と、サラダボールをよこした。ちぎったレタスをサラダボールに盛りつけ、母が切ったハムとキュウリも彩りよく配置。コンロでは母が得意とするミートボールのトマト煮込みがおいしそうなおいを立て、春菜の食欲を刺激した。

マコト君、ちゃんと食べてるかな？

心の中でつぶやいてみた。

彼の家は共働きでマコトは塾に行つてそこで買ったものを食べるが多いらしい。今頃そうやって一人で食べているかも知れない。

盛りつけも終わって、母と二人で食事を取る。父は夜遅くにしか帰ってこない。

「春菜、今度彼をご飯に呼んでいらっしやいよ」

ミートボールをスプーンですくいながら母が言った。

「え？ お母さん、いいの？」

「ええ。もちろん」

にっこり笑う母に、春菜は心が弾んだ。今度会ったらご飯に誘ってみよう。きっと喜んでくれる。それを口実にご飯が済んだら電話をかけてみよう。

サラダのトマトを口にしながら、春菜はゆるむ頬を母に見られないようにひたすら普通の顔をしようと努力した。

電車を降りると、まっすぐ西口に向かう。同じように家路につくのだろうサラリーマン達の列についていくと、バス停にたどり着いた。一番後ろに並んで空を見上げる。さっきまで降っていた土砂降りがうそのように上がっていた。曖昧な雲の色は幽かにオレンジ色を帯び、灰と薄青のコントラストが美しい。これなら星空が見えるかも知れない。

バスは定刻通りに来た。スーツ姿のサラリーマン達は無言で乗り込み、家路につく。自分は家などというものには未練がないのかもしれないと唐突に思う。出るときは母親と一緒にだが、帰れば一人本を読んだりテレビを見たり。塾に行けば友達にも出会えるが、一人わびしい夕食は、家族は自分を遠ざけているような気持ちにさせた。そんなことはないとわかっているのだが。

このままどこかへ行ってしまおう。星を巡る旅もいいかもしれない。観測地点を一つ一つ回る。それなら一度戻って着替えやお金を取ってこなくてはならないが。

バスは住宅街を走りながら停留所で人々をおろし、山へ続く一本道を上り始めた。時計を見ればあと十五分で八時になる。間に合うだろうか。

マコトは外を見た。空は木々に邪魔されて見えづらくなっているが、ピンクと灰と紺が混じった不思議な色の雲の切れ間に、ひとつの星を見つけた。小さくても強く輝くあれはたぶん木星だ。

きれいだなぁと思いながらぼんやりと空を眺めていたら、自然とまぶたが落ちてきた。

目蓋の裏は暗闇だったのに、まもなくたくさんの星が浮かんできた。

黒い夜空に輝く星の川。その中を歩いて……。

「お客さん、終点ですよ」

揺り起こされてマコトははっと目を開けた。慌てて時計を見れば8時を過ぎている。間に合わなかったのだ。……力が抜けてしまった。

「お、おい。大丈夫か？」

「もう閉館ですよね……プラネタリウム」

すると、運転手さんは顔をしかめた。

「ああ、あれを見に来たのか……駅から乗ってきたけど、どこから？」

「有園です」

「こっから2時間はかかるべ？ そんな遠くから……と」

運転手は何かを思いついたように通路をつかつかと前方へ行くと、

「ちょっと待ってな」

運転席で操作をしてドアを開けた。冷たい空気と交換に生暖かい空気が入り込んでくる。「おおい、小林さん、あんたんこの客だぞ」

すると、ヘッドライトに照らされて向こうから一人の男性が歩いてきた。

「山口さん、こんばんは。もう閉館しちゃったんだけど」

「有園から来たってんだから」

「え？ そんな遠くから？」

マコトは促されて荷物を持つと、バスを降りた。バスの中とは違う湿り気を帯びた空気が彼の体を包んだ。目の前にいる小林という男性は、背がひょろっと高く優しそうな顔をしていた。

「君、ええっと、何君？」

「高槻、真です」

「高槻君か。星が好きなの？」

「は、はい。この本の星、ここで撮影されたんですよね？」

バックから取り出した本に、小林は驚き、微笑んだ。

「ああ！ 僕の本じゃないか。それでわざわざ？ うれしいなあ。それじゃ、ちょっとだけ見ていく？ 中はだめだけど」

「は、はい！」

うれしかった。撮影した本人に出会えるとは思っても見なかった。それに彼と一緒に星を見ら

れる、それだけで心が弾んだ。

「山口さんありがとう。この子は預かりますから」

「そりゃ助かる。終バスで山の中に置き去りにしたなんて寝覚めが悪いからな」

大人達の話し合いに、マコトは感謝した。

「あ、ありがとうございました」

一礼すると、「じゃあな」と運転手はバスに乗り込み、大きくUターンして町へと戻っていった。

「さて、高槻君。こっちへおいで」

小林はそう言ってプラネタリウムへの建物へと歩いていった。玄関から入るのかと思えばそのまま裏手に回る。街灯の光が届かない薄暗い中慎重に歩いていくと、非常階段が見えた。山の木や草が迫り、階段の途中まで覆っている。それをかき分けていくと、やがて目の前に鉄格子の扉が現れた。

「屋上まで上っていてくれる？ 望遠鏡取ってくるから」

鍵を開けながらそう言うと、小林はきびすを返して行ってしまった。

マコトはその扉を「いいのかな？」と思いながら力を込めて開けると、中に入った。目の前の階段はさび付き、ざらりとする手すりの感触にびくびくしながら、暗い階段を上がっていった。植物や杉の枝は彼の行く手を阻み、それらは日常とは違う不思議で恐ろしい影のように見えた。

しばらくあがると、踊り場があった。ようやく半分だと、空を仰いだ。

そこに、求めていた夜空があった。

「……あ」

その光景に、目を奪われた。

漆黒の天上を流れる星の川は白く淡く光っている。

ひときわ輝くのは、デネブ。それを基点に夏の第三角形を探す。あった。東南に目を向けると、サソリの火が赤く燃えているのが見える。

「……すごい」

プラネタリウムとは違う圧倒的な存在感。小さい頃家族でキャンプに行った。その時見た星空がこんなかんじだったかもしれない。幸せだった頃の思い出がよみがえり頬がゆるんだ。

でも、何かが足りないのだ。自分でも判らない何かが。

階段を上がるカンカンという硬い音がして小林さんが大きな鞆を提げてあがって来た。

「おまたせ。ごめんね、こっちの階段あまり使ってないから、恐かった？」

「……いいえ」

「よかった」

笑顔でそれを広げて大きな望遠鏡を取り出して組み立て始めた。足を組み立てるのを手伝うと、天体望遠鏡はすぐに組み立てられた。

「さあて、何を見ようか？」

それから小林さんは、いろいろな星を見せてくれた。

マコトは久しぶりに楽しく星の話を出来てうれしかった。小林さんはここで学芸員をしながら



夜空の写真も撮っているそうだ。先日は新星を見つけて新聞にも載ったことがあるんだと自慢げに話してくれた。

そんな話をしながら夜は更け、気が付けば時計は十時を指していた。

「一通り見たけど……どうする？ 寝袋も研修生用のがあるし、泊まっていく？」

「はい、是非」

「なら、家の人に電話をしてね。携帯、持ってるんでしょ？」

そう言われてはっとした。忘れようとしていた携帯の存在を思いだしたのだ。おそろおそろ取り出して電源を入れると、本当に何度も、春菜から電話がかかってきていた。最後の電話はほんの十分前だ。

その時けたたましく着メロが鳴り響き、バイブの振動でうっかり落としそうになった。広げるとまぶしすぎるディスプレイに悪友の名前があった。通話ボタンを押す。

「……鈴木？」

『マコトか！ 今どこだ、家か？』

耳元で怒鳴る鈴木の声に、マコトは胸が詰まった。

「……星、見てる」

『またか！？ ったくよお。春菜ちゃんに電話しろよ？ さっき電話で話したけど、すごく心配してたぞ！』

鈴木から春菜の名前が出てきて、マコトはむっとした。しかも電話で話したなど、なぜ春菜は鈴木電話番号を知っているのだろう。もしくはその逆か。そう思うと猛烈に気分が悪くなった。

『おい、マコト！？』

沈黙していたからか、鈴木の声が更に高くなる。

「今からかけるから」

何かを言いかけた鈴木の声はボタン一つでとぎれた。

春菜の着信を見つけて通話ボタンを押、そう思ったのだが、親指が止まった。

「彼女に電話？」

そう言われて振り向くと、小林さんがふふっと笑った。

「いいね。青春で」

「そんなんじゃありません」

顔が熱い。

最初は、彼女の髪に付いたシールの星だった。落としたシステム手帳から転がったボールペンを取ってあげると、赤くなってもものすごく慌てて……その時の春菜は、正直かわいいと思った。でも、

「好きとか彼女とか、よくわからないんです。向こうは彼女だって思ってるかも知れないんですが、週末にプラネタリウムに行くくらいで、それ以上のことはなにもなくて」

どうしてこんなことをしゃべってしまったのだろうと、マコトは戸惑った。でも口は止まら

ない。

「なのに、友達に彼女持ちだからとかからかうんです。それが嫌で。だからもう……」

「いいじゃん。星が好きで、その子も好きで」

小林さんはそう言いながら天体望遠鏡をのぞき込んで調整し、やがてマコトを手招きした。それに応じて天体望遠鏡を覗く。そこには一面の天の川。一つ一つが星だと思うとやはり不思議で壮大だと思った。

そうだ。こういうときは、いつも隣に……。

レンズから顔を上げ、見上げる夜空にぼんやりと浮かぶ天の川。その幾億の星一つ一つに名前があるように、自分にも特別で呼びたい名前がある。

背中を押されたように携帯をとりだして開くと、まばゆい画面に春菜の着信を見つけ、通話ボタンを押す。耳に当てると間髪入れずに彼女が出た。

『もしもし！』

耳元に響くクリアな声は、マコトの耳元で星くずのように輝いた。

「もしもし、春菜さん？ こんばんは」

『マコト君！ ……よかったあ！ ちっとも繋がらないから、心配してたんだよ！』

心配を乗り越えて怒っている声を、初めて愛おしいと思った。愛おしいという気持ちがこんなにも狂おしいものだとして初めて知った。その気持ちを押し返すように空を見上げる。

「今ね、空を見てるんだ。たくさんの星が空を埋め尽くしてる。春菜さんが好きなアンタレスも赤くて、手を伸ばしたら、届きそうなくらい」

携帯を持ちながら、夜空に片手を伸ばす。

届くはずがない星が、冷たく熱い点となり、触れるような気がした。

『……って、どこにいるの？ こっちは土砂降りだよ？』

「きっとすぐ晴れるよ。今度、ペルセウス流星群の頃にここに来ない？ 流星だけじゃなくて星がすべて降ってくるようだよ。遠いから泊まりになるけど、いいかな？」

小林さんが、ヒューっと口笛で冷やかしたが、耳に入ってないらしいマコトは、ゆるむ頬もそのままに続けた。

「この空を、春菜さんと一緒に見たいんだ」

すると春菜は、戸惑ったようだったが、

『うん』

と、返事をした。それに頷きながら、マコトは微笑んだ。

「それから春菜さんのこと、ちゃんと好きだってわかったよ」

受話器の向こうで、なにかが転げ落ちた音がした。

電話を切り、携帯を閉じると、暗闇が戻ってくるのと同時に軽い咳払いと小林の声がした。

「あのね、高槻君。言いにくいことだけど、その日は夜十二時までこの場所で観察会があるんだ。二人きりでロマンチックに、というわけにはいかないよ。それでも来る？」

にやにやする小林さんに反論しようとして一歩踏み出す。と、ざりっと何かを踏んでしまった

。小林さんの星座板だ。つま先で蓄光塗料の星がかすかに光るそれは、春菜の髪に付いていた星形のシールのように思えて、愛おしく切なかった。拾い上げて手で汚れを払い、小林さんに差し出した。

「来ます。小林さんにも紹介しますね」

すると小林さんは、

「星バカだねえ。君も」

と、笑った。

そして8月12日。

夜空に広がる星の中から、一瞬の光を放ち、流れ星が落ちてくる。

ペルセウス座流星群のことを小林さんが説明した後、それぞれに毛布が手渡され、その上で寝転がりながらの観察会となった。隣に春菜がいるというだけで、マコトはなんとも言えない幸福感に浸っていた……のだが、

「すごいね。春菜」

仁美の声が春菜の体の向こうからする。

「おお、すげえ、こりやすげえよ」

マコトの横で鈴木達もうるさい。泊まりの観察会だと説明したら、両方の親が「二人だけはダメ。お友達と一緒にだったら」という条件を出したので、悪友達と仁美と一緒に付いてきたのだ。それだけでなく、天文台の屋上のあちらこちらから歓声が上がるから、ロマンチックというものからほど遠い。

何となく手を伸ばすと、春菜の指先に触れた。それだけで、指先から星が散ったようだ。それが心地よくて、ためしに柔らかい指に自分の指を絡めてみた。春菜の顔を見ると、恥ずかしそうにマコトの方を見つめていた。にわかになまわりがざわついてあわてて目をそらす。

「すごい、今の三つに割れなかった？」

「成層圏で砕けたんだよ」

向こうの親子連れの声がした。また静けさが戻ってくると、春菜の指がきゅっとマコトの指を握り返した。

沢山の人間の中で、春菜の名前だけ呼びたい。

そういうのを、恋と、言うんだろうか。

「春菜さん」

名前を呼ぶと、春菜は小さく

「うん」

と、返事をした。

「春菜さん」

「はい」

返ってくる返事が、うれしく思っていると、少し春菜が近づいてきた。

「一緒に見られてよかった」

こっそりマコトにしか聞こえないような声でささやく春菜に、マコトは、  
「うん」

と、少し顔を浮かせて、春菜の頬にキスをした。唇の優しく柔らかな感触がして、かすかにいいにおいがした。離すと恥ずかしさと同時に何とも言えない達成感で、マコトは照れくさそうに微笑んだ。

春菜は丸い目をもっと丸くして、慌てて空を見上げ、つないだ手を、きゅっと握り返した。

END

殿はお天道様が眩しく光るのを仰ぎ見、呟かれた。

「空に三廊下とはいつのことか。今や照るばかりではないか。降ろうか、照ろうか、曇ろうかと空が迷う様が懐かしい」

私は平伏しながら同意する。殿が嘆くのも無理はない。元々雨は少ないが五月の頃からかれこれひと月、一滴たりとも雨粒が落ちて来ないのだ。

国の水瓶である竜神池ももはやひび割れた池の底土を晒すのみとなり、田畑は干涸らび、枯れることはないと言われていた城の井戸でさえも、最近泥水が混じる始末。それでも度々、天を突くように雲が青天に伸びることがある。それ雨だ、やれやれこれだと、皆が喜び勇んだとたんに雲は散り、人々を落胆させるのである。

「空梅雨にございます。いずれは降りましょう」

これは私だけでなく、国中の人々が望むことだ。しかし殿は眉をしかめ、

「悪戯に甲斐のないことを申すな。それを空に標結うというのだ」

と、再び空を仰ぎ見、薄くたなびく雲を鋭く睨み付けられるばかり。

暫くして、照念寺の和尚が現れた。雨乞いの祈祷では評判の和尚であるが、此度の祈祷はことごとく空振りに終わっている。

「これはこれは。本日もお日柄が良う……」

恭しく挨拶する和尚の鼻面に人差し指を突きつけ、殿が一喝した。

「千寿。雨はまだ降らぬのか！ 既に一月は経つというに、雨粒一つ落ちぬではないか！」

息巻く殿を宥めもせず、和尚は目を伏せた。

「私めも、昼夜祈祷を重ねております。ですが一向に。斯くなる上は雷神を縛り上げ、雨を降らすよう説教するほかありませんなあ」

「和尚！ 雷神を縛り上げるなどなんと畏れ多い事を。軽口にも程というものがあるろう」

そのような所行をして万が一雷神の怒りを買えば、降るものも降らなくなるではないか。しかしその時、殿の眉毛がぴくりと動いた。

「いや待て、誠之助よ。何、雷神を縛り上げるとな」

殊更に感心したような様子の殿に、私は内心慌てた。

「恐れながら殿、そのようなことをすればどのような天罰が下るやもしれません」

切腹覚悟で口火を切ったが、殿は暫し目を伏せられしみじみと、

「誠之助よ。民草のためだ。どんなことをしても雨を降らせるのが我が勤め。さあ、国中にふれを出せ。雷神を捕らえた者に褒美を取らせるぞ。和尚、待っている。必ずや雷神を連れて参るぞ！」

殿の喜々とした様子に、私も和尚もあぐりと口を開けたまま顔を見合わせた。和尚の間抜けな顔を見て、ああ、開いた口がふさがらないというのはこういう事を言うのだと納得し、また自らの口の中が乾いていくのを空悲しく思った。

『此度の日照りの元凶、雷神を、照念寺和尚直々の説教にて改心させる由、決し候。  
故、雷神を捕縛し城に連行した者には、金百両を与える』

そんな立て札が町のあちらこちらに立ったのは、それからすぐのことだった。

寺からは和尚の読経が厳かに続いている。万が一誰かが雷神を捕らえでもしたら、和尚は雷神に説教しなければならない。拒めば打ち首、説教をすれば雷神の怒りを買う。その前になんとしてでも雨を降らせねばと汗を流しているらしい。

立て札を眺める人垣の外に、呉服問屋の主、平八がいた。呉服問屋と言っても、裏では何でも売るよろず屋だ。とんでもない歌舞伎者で、女物を奇妙に着ているから何処にいてもよくわかる。その平八に「おい」と、声を掛けると奴は「おう」と、あきれ顔で応えた。

「お殿様も無茶言うねえ。雷神の機嫌を損ねりゃ雨どころじゃなかりょうに」

「きっと、何かお考えがあつてのことだ。殿はいつも民のことを考えておられるからな」

すると平八はなにやら神妙な顔になった。

「このところの日照りで桑もよくない。特産の絹もどうなることやら。昨日金を借りに来た奴あ、質草に娘を差し出したよ。女郎に売ろうが好きにしてくれと」

「なんということを！ 娘を売るなど」

その言葉に私は憤ったが、平八は私の顔を見てふんと笑うのみ。

「まあ、期日までに払えなかったら望み通り娘は売るがな。家の者は食い扶持が減って助かるし、娘もよいべべやうまいおまんまにありつける。借金に追われてひもじい思いをするのとどちらが人らしい暮らしか」

「お前には血も涙もないのか。売られた者が人らしい暮らしが出来るなどと、本気で思ってるのか」

「さてね。空情けならやめろや。娘に迷惑だ。ま、お前がなんとかするって言うなら店に来い。昔なじみで安くするよ」

平八はそう言い残し、カラカラと下駄をならして店に戻っていった。

三日もすると、御城下は雷神を捕らえようと集まってきた人々でごった返した。噂を聞き、一攫千金を狙って来た余所の国の者までいる。雷神がいるという山に出かけていく者、妖しい呪術を試みる者、巨大な凧を作りそれで空高く飛ばうという者まで現れ、街は騒然となった。加えて大規模な護摩を焚く和尚。焚かれる護摩の煙が空の真ん中に揺れるのを眺めながら思う。

このままではいけない。雨が降らねば売られる女子供が増える。冬には多くの者が飢えて死ぬ。しかしどうしたらいいものか。空を歩むように落ち着かぬ。

私は居ても立ってもいられず旅支度をすると、よく雷が落ちると言われる山へ登った。ぬかる

んだ山道は滑り、わらじを足袋を泥で汚す。どうやら雨が降った後のようだ。どうせなら領内に降らせてくれればと、考えても仕方のないことを思いつつ山頂を目指す。

やがて辺りの木が、道が、視界全てが白く覆われていった。濃い霧のようだが、これは雲だ。この雲を持ち帰ればあるいはと、私は雲を両手で捕まえてみた。しかし手の中に白く煙る雲はなく、じっとりと両手が湿っただけだ。手で駄目なら衣に包んでいけばどうだろうと、羽織を脱ぎ、それを袋状に縛って雲を取り込み包んでみた。が、結果は同じことだった。

雲を掴むことなど出来るものではない。雷神も現れない。私は途方に暮れた。

仕方なく引き返そうと思ったその時、木立の向こうに小さな庵のようなものを見つけた。近づいてみると、それは古い祠だった。傾いだ木戸を開け、「御免」と中に入る。足下を小さな鼠がちよろちよろと這い回り、何処かへ逃げて行った。かわいらしいものよと頬が緩む。

ふと顔を上げたその時。目の前に一筋の光が届いた。

板の隙間から差し込んだ西日に映し出されたのは、雷神。鋭い金の眼光に貫かれ、私は動けなくなった。やっと会えたのだと喜び、また恐れに拳が震えた。しかしそれも束の間のこと。よく見れば古びた掛け軸で、対の風神も隣に並ぶように掛けてある。風神は白い雲の上、雷神は黒雲の中で雷を掴んでこちらを睨んでいる。落胆と安堵の中、私は気付いた。

「雷神は黒雲の中……か」

そういえば凧で雲の中に行こうとする者がいたな。もしや黒雲に凧で突入すれば雷神に逢うことが出来るやもしれぬ。

「よし」

自らを奮い立たせるようにかけ声を掛けると、急ぎ山を下りた。

町に戻ると、河原になにやら人だかりが出来ていた。何事かと人垣を掻き分けていくと、無惨に壊れた巨大な凧の傍で、血塗れの男が呻いてるのを遠巻きにしているのだった。男は、足と手それに体もあらぬ方向に折れ曲がり、なすすべもなく息絶えた。町方がやってきて検分を始める中、まわりの話を集約すれば、大凧は揚がりはしたものの、上空で風に煽られそのまま墜落したのだという。

ふと見れば、人垣の向こう側に平八がいる。手を振ると、気が付いた平八が「お帰り」と手を振り返してこちらに来た。そして、「こんだけの人だかりに見物料を取らないなんて勿体ねえ」と笑った。人が一人死んでいるのだ。笑い事ではない。それに、今はあれが空へ揚がる唯一の方法だ。

「平八。黒雲まであれで行けると思うか？」

原形を留めぬほど壊れた凧を指さすと、平八はふふんと笑った。

「おまえも雷神を引きずり下すと？ やめな。ああやって死ぬが落ちだ」

「雨が降らねば困るのはお前も一緒だろう」

「へえ。手を貸して欲しいと？」

小賢しい笑みに私は頷くしかなかった。不本意だが、平八の知恵と財力は他の者に引けを取らない。いや、こいつだからこそ、よい知恵の一つもあるはずだ。案の定平八はにやりと笑い、

「一つ、いい手がある。ちょっと顔貸しな」  
と、そのまま平八の店へ行くこととなった。

紺地ののれんをくぐると、

「いらっしやいませえ」

という黄色い声。そして、薄桜、山吹、白藍、真朱、等々の反物の色の洪水。それらが私の耳と目を混乱させる。番頭が揉み手をしながら、

「これはこれは誠之助様。今日はどのようなものを？」

と愛想笑いでやって来る。それを平八が手で制し、

「今日は俺の客」

と言うと、番頭と女衆はつまらなそうな顔をしてそれぞれの仕事に戻っていった。と、表に水を張ったたらいの横に女が立っていた。

「その足、なんとかしろ」

平八に言われるまま、表で泥の付いた足をたらいにつけると、水に映る青空が揺れ、水が泥で濁った。足を丁寧に洗ってくれるこの娘は先日売られた娘なのだろうか。なんと不憫な……  
とっていると、平八は私を嘲笑うように笑んだ。そして、

「お菊、奥にお茶。あとは暫く二人にしてくれ。夕方まで誰も入れるな」

と女に命じた。女は私の足を拭きながら「あい」と返事をし、たらいを持って下がる。その後磨かれ黒光りする廊下から奥座敷に通され、暫くすると先ほどの女が分厚く切られた羊羹と茶を持って現れた。茶の香ばしい香りに喉が鳴る。それらを置くと何も言わず、女はそそと退室した。誰もいなくなったことを確かめるためか、平八はおもむろに立ち上がると外を見、勢いよく障子を閉め、私の向かいに座る。

「誠之助、これを知っているか」

平八は懐から紙切れを出し、私に差し出した。そこには筒のようなものが描かれていた。何だこれは。

「先日大陸より仕入れた『かせん』というものだ。空鏡をも打ち落とすという。ま、空言であろうが」

「月を……」

なんという恐ろしいものを。手が震え、紙ががさがさと鳴った。

「火薬を使い空に打ち上げる。これなら黒雲くらい楽に届くだろう。雷神を打ち落とすこともできるやもしれん。少々値は張るがな」

「飢饉に苦しむものも出ようと言うのに、金の話か？」

「百両にまけておいてやるよ」

「ううむ……」

平素ならおいそれと出せる額ではないが、雷神を城に連れて行けば殿より褒美が出るはずだ。

「わかった。では黒雲が現れたら早速」

平八がそろばんを弾きながら頷くのを横目で見ながら、私は茶請けの羊羹を薄く切り、口に運んだ。その味わいは甘くて苦い。



私は雷神の怒りを買って、雷に打たれて死ぬだろう。しかしそれで殿とこの国の者達が救われるのなら本望だ。

「大丈夫だ。骨は拾ってやるよ」

相変わらずの平八の軽口に、私は「ああ」と頷き、温い茶で乾いた喉を潤した。

今日も護摩祈祷は止まない。死人騒ぎの後でも、懲りずに巨大な凧を飛ばそうとする者、また雷神を打ち落とそうと石つぶてを雲めがけて打ち、下の長屋に多大な被害を出す連中等、迷惑千万と町方に捕らえられる者も後を絶たない。雷神捕縛はもう無理だと、諦めの声も上がり始めた。

その十日ほど後のこと、山の際に黒い雲が湧いて出たのを町の者が見つけた。

「雷神だ！」

口々に町人達は呟き、雷神捕縛に来た者達はいきり立つ。巨大な凧を揚げようと目論む者達は、町はずれの野原に凧の準備に出向いたようだ。私と平八も後を追う。寺の中から巨大な火柱が上がっているのが見えるが、きっと和尚もやけっぱちなのに違いない。

「さて。これだ」

ふふふと笑いながら平八は大八車に乗せられた被いを外した。私はそれを見て仰天した。例の筒が長い棒にくくりつけられ、ずらりと並んでいたのだ。自慢げに微笑む平八の肩越しに、お侍衆がやってきた。先頭を切るのは、

「これは殿！」

走り寄って跪くと、殿はうむと頷き、大八車に目をやった。

「これか。例のものは」

「左様でございます」

平八が頷くと、殿は不気味に笑いながら、

「よし許す！ 思う存分にやれ」

と、言い放った。どういうことかと平八を見ると、口笛を吹きながら空知らぬ顔をする。殿にも売りつけたのか。こいつめ悪どい商売を。じろりと睨み付けてやったが、当の平八はどこ吹く風。お侍衆に混じって筒の準備に取りかかった。件の黒雲は徐々に迫りつつある。大凧は大勢の男衆に引っ張られ、今にも飛び立たんとする。そこをお侍衆が取り囲み、

「暫し待て」

と、引き留められた。不満そうな男衆を尻目に、殿がふふんと鼻をならす。

「邪魔者は押さえた。さあ打ち上げい！」

殿の一声で、導火線の一本に火が放たれた。一同固唾をのんで待ち受ける中、じりじりと焼けて移動する小さな火が筒に吸い込まれていった。と、次の瞬間大きな音と共に長い棒ごと空に打ち上がっていった。

「おお！」

人々がどよめく中、稲光がそれを撃ち、光を放ちながら木っ端みじんになった。雷神が跳ね返したのだ。

「よし、雷神はあの中だ！ 次！ 怯まず打て！」

「空つぶてではいかん、狙うのだ！」

一発、二発と、導火線に火が放たれる。黒雲の中で光りながら四散した火花や欠片が、地面にばらばらと落下する。殿は黒雲への攻撃の手を弛めることなく、しかしどれだけ打ち込んでも雷神は降りてこない。それどころか、黒雲は見る間に空を覆わんばかりに広がり、次々と閃光を煌めかせ始めた。

「雷神様はお怒りじゃあ！ 天罰じゃ。天罰が下るのじゃ！」

いつの間に来ていたのか、和尚と坊主共が団体でお経を唱えながら平伏す。

「殿！ 危のうございます。お下がり下さい」

と、誰かが叫んだその一瞬、目もくらむ光と腹に響く轟音が辺りを揺さぶり、私も平八も尻餅をついた。

おそろおそろ目を開き、辺りを見渡す。立派だった大風は無惨に壊れ、焦げた匂いが鼻をついた。倒れた男衆はぴくりとも動かない。天罰が下ったのだ！ 男衆に駆け寄ろうとしたその時、頬に何かが当たった。手をやると、微かに濡れている。

「雨……雨だ」

「雨が降ってきたぞ！」

「雷神が降らせてくれたのだ！」

「皆の者、でかした！」

殿が喜々として両手を広げる。稲妻閃く空から、大粒の雨は降り続ける。平八は私に歩み寄り、「やったな」と肩を叩いた。和尚は感極まってお題目を唱え続け、死んだかと思われていた男衆も、一人、また一人と立ち上がり、雨の感触に歓声を上げた。

たちまち雨は土砂降りとなり田畑を潤し、枯れていた竜神池も満々と水をたたえ、これで国は安泰だと、皆が安堵した。

縁側に座り、暗い空模様を眺めつつ銚子を傾ける。最後の一滴を盃に垂らし、それを舐めるように飲み干すと、いつの間に来ていたのか平八が側に来て座った。

「誠之助、空酒は体によくない」

平八の気遣いが無性に腹が立つ。

「あれからもう七日か。降りすぎだ。雷神の怒りを買ったのは間違いないな」

私は項垂れた。今私は雷神捕縛計画の責任を負わされ謹慎中の身である。いつの間にか雷神を打ち落とそうとした張本人は私ということになっており、真犯人は目の前で、空っとぼけて座っている。

と、表で誰かが叫んだ。それを聞きつけた平八が立ち上がり表へ駆けていった、かと思うと間もなく息を切らせて戻ってきた。

「またおふれが出たぞ。今度は風神を連れて来いってさ！」

喜々としたその声には私は驚き、よろめく足で立ち上がった。

「風神、を？」

「雷雲を追い払うように祈禱するのだと。和尚は既に護摩を焚き始めているぞ」

平八はそう言うと愉快そうにはははと笑った。

「謹慎は終わりだな。誠之助」

平八の言葉に頷きながら、私は黒雲の立ちこめる空を仰いだ。

「ああ！」

風神が乗る白い雲を探し、是が非でも風神を捕らえるのだ！

完

## しょくらとを

---

夏のはじめの雷神騒動の雨の後もお天道様は機嫌が悪く、冬が越せるだけの蓄えが出来るか心配であった なんとか無事に年を越すことができた。ほっとしたのもつかの間、雪がちらつくようになると、城下でたちの悪い風邪が流行り始めた。城内もこっちでずるずるあっちでくしゃみと、医者は縦横無尽に走り回っている。寝込む者が続出する中で、疫病対策に乗り出して誰よりも働いていた殿がとうとうお倒れになったという噂を耳にした。殿のことが心配でどうなっておられるのかどなたかに聞かねばと思っていたところ、

「おお、杉本、さがしておったぞ」

廊下で声をかけられた。握り拳のような厳ついお顔の城代家老の土田様だ。

「これは土田様。殿のご様子は……」

いつもより眉間のしわを深くされていた。

「実は熱がお高く喉が腫れているからか物が食べられないそうだ。草原殿の見立てでは件の風邪であろうと」

ああ。

毎日民草のためにと寝食を惜しみ働いてこられた殿のお姿に、我々家臣一同は感服するばかりであったが、そのいそがしさがお体に障ったのだろう。

「そちは先の雷神騒ぎの際、雷神を怒らせ雨を降らせたことがあったな。まああの時は降ることは降ったが後ほどの豪雨で少々困ったことになったが」

「きよ、恐縮にございます」

頭を下げると天の声のように土田様の声が降ってきた。

「その力、殿のために貸してはもらえぬだろうか」

なんと嬉しいことをおっしゃるのだ。

「殿の御為ならば命を賭してでも。それで……私は何を」

すると土田様は、げんこつを固めたような顔をくしゃくしゃとして、

「おお、おお。そう申してくれると信じておった」

懐から巾着袋を取り出された。

「これを持って平八のところへ行き、“しょくらとを”なるものを手に入れて参れ」

平八の名前に自然と眉が痙攣した。平八は呉服問屋の主で、いつも女物の着物を妙なかんじに着崩している歌舞伎者だ。それに呉服問屋とは名ばかりでどんな物でも手に入れてくれるよろず屋でもある。

夏の日照りの際、奴の提案で雷神を打ち落とすための「かせん」という空に上げる爆薬を手に入れてくれたのだが、その時の借金が残っている。

土田様が女中のお盆から私の手に紋入りの巾着袋を置いた。受け取ればかなりの重さ、中を覗けば金子がぎっしり入っている。手に入れて欲しい物は非常に高価な物らしい。しかし聞き慣れぬ言葉だ。

「その、しょ、しょ……というのはどのようなものでしょうか」

こほんと土田様は咳払いをすると、また眉根の間のシワを深くされた。

「しょくらとをである。南蛮人が航海中に食す物だそうだ。それは滋養によく、かの国では神が食す物として重宝されているらしい。それほどのものだ。もしかしたら不老不死の力があるやもしれぬ」

「ふ、不老不死で、ございますか？」

ごくりと喉が鳴る。万が一にでもそのようなものをてにいれたとしたら平八のことだ。自慢げに見せつけるにちがいない。いや、ほくそ笑みながら隠し持っている事も考えられる。

「味はほろ苦く甘いらしい。なんといつて南蛮人が売らぬほどだというから貴重なものに違いない。とにかくそれを手に入れて参れ。手にはいるまで戻ってきてはならぬぞ」

「は、ははー！ 殿の御為とあらば例え火の中水の中、この杉本必ずや手に入れて参ります」

私は金子を受け取ると、平八の元へと急いだ。

……しかし、この敷居は高すぎる。

でんと構えた店のから女達がかしましく反物やら小物を客に勧める声が聞こえる。番頭の機嫌がいい声もいつもの通りだ。金が入るごとにちまちまと返済しているものの、百両もの大金をそう簡単に返せるものではない。時には払えないこともあり、用があってもものれんをくぐるのにたいそう勇気がいる。

店の前でうろうろとしていたが、意を決してのれんをくぐった。

「ごめん」

「いらっしゃいませえ〜っ！」

相変わらずの反物の色の洪水と女中達の黄色い声にくらくらしながら、番頭の元へ向かった。

「平八はおるか？」

「これはこれは杉本様。いらっしゃいませ。旦那様は奥です。これお菊」

「あ〜い」

奥から箒を持ったままのお菊が現れ、いつものように奥へと案内してくれた。

平八はよく手入れされた庭で庭木を見上げていた。今日も妙な着物を妙な感じに着ている。雪が少し残った庭に一輪の花が咲いたような赤い……いや、毒花だな。

「よう。今月の返済にはまだ間があるが、なにか儲けでもしたのかい？」

そんなわけがない。口から吐かれた平八の毒に、私は顔をしかめた。

「今日はお前に頼み事があって来たんだ」

「へえ、頼みねえ。まあここではなんだ。中に入ろう」

そして部屋に入り、温かい火鉢の側に座った。平八はだらしなく座ると煙管をぷかりとやりはじめた。

「で？」

そう聞かれたので答えた。

「実は殿が風邪を引かれて伏せっておられてな」

「今流行っているらしいな。うちも何人かあの風邪で休ませてるんだ。お殿様はお前が血相かえ

てここに来るくらい悪いのか？ あのお方なら風邪の方が裸足で逃げ出しそうなものだが」

「熱がお高く食欲もないそうだ。食べるものも食べられないでは、ますます弱るばかりだと、土田様も困っていらっしやった」

「へえ、あのお殿様が食べられないとなると本当に悪いのかもな」

平八に言われて益々不安になる。

「それで、……しょ……なんとかとかという滋養によく不老不死の薬になるというものを売ってはくれまいか」

頭を下げた。雷神騒ぎの時もそうだが、こういうときは平八に頼むのがいちばんだ。しかし平八は渋い顔をするばかり。

「まあ、頭を上げなよ。そのしょ……って、ああ、あれか。この前退屈しのぎにそんな話をしたな」

ぶつぶつと平八が呟く。

「ここに預かってきた金がある。これでなんとかならないか」

懐から巾着袋を出して目の前に置いた。かなりの額だ。これなら絶対と思ったのに、平八はきっぱり、

「ならんねえ」

首を横に振った。

「なぜだ！ ここにはないのか？ ま、まさかお前、その、しょ……というのは、この世にないのではないか？ 殿を謀るとはいかに平八とて許さんぞ！ っげっげほっ」

怒鳴ったからむせてしまったではないか。

「おいおい、お前さんも件の風邪じゃねえだろうね」

「違う！ それでその物はどこにあるのだ。一刻も早く手に入れてくれ！」

詰め寄ると平八は困ったように笑い頭を掻きつつ大きく息をついた。

「……あのなあ。そのしょくらとをとってえのはおいそれと手に入るもんじゃないんだ。南蛮人が長い航海の間自分たちが楽しむために持っているから、売ろうって気がない。まあ、運がよけりゃなにかと交換で分けてもらえるかもしれんが……」

な、なんということだ。

南蛮のものだということは察しは付いたが、まさか売り物ではないとは。

「私はこれを手に入れぬと城には戻れぬ」

殿の信用がなくなる以前に合わせる顔がない。

「売ってはくれないが、そうだな、物々交換ならあるいは。なにか珍しいものを手に入れて交渉すればなんとかなるかもしれぬが……」

のらりくらりとする平八の言葉を最後まで聞かず、

「わかった、何かしらの物と交換すればよいのだな！」

けんか腰のまま、その南蛮人の妙な物を求めて旅立つこととなった。

国境を目指して雪が残る深い山を越えるころには天候は更に悪化。一面のすすき野原の上はうねる竜のように雲が流れ、今にも降り出しそうだ。足下は雪と泥で濡れて冷たく、かじかんで痺れてしまっている。

それにしても腹が減った。向こうに大きな木の側に祠が見える。そこで昼飯にしようと腹に力を入れるとぐうと腹が鳴った。大きな木の下、大きな石に腰を下ろし、祠の道祖神様に三つあったうちの一つにぎりめしを供えて道中の安全を祈願する。目を閉じて手を合わせていると、  
「……飯」

と、小さな声がした。目を開けば手がにゅっと伸びて道祖神様のにぎりめしを取ろうとしている。見れば祠の影に一人の男がいた。頬はこけ、粗末な着物からのびる手足は痩せ、折れてしまうのではないかと思うほどの細さだった。しかしその手はにぎりめしに届くことなく、ぱたりと地に落ちた。行き倒れか？ 私はその男を抱き起こした。

「どうなさった。さあこれを」

私は持っていた竹筒を男に差し出し水を飲ませてやると、男はやっと一心地ついたと言う代わりにほう、と息をついた。そして何やら口元をむにゃむにゃと動かしながら手を合わせた。

「ありがたやありがたや。これも仏様のお導き」

私はほっとして竹筒をそばに置くと、もう一つのにぎりめしを男に手渡した。

「これを食べなさい」

「へえ……でもお侍様」

男は遠慮して食べようとしないので、にぎりめしの上から手を添えた。

「かまわぬ。さあ食べなさい。私も食べるから」

私は残った一つを手にとるとかぶりついた。冷たい飯はじっくり噛むと甘くなった。男はうれしそうに頬をゆるめると、にぎりめしを両手で掲げてしばらくうっとり眺め、やがて小さく口を開けて一粒一粒味わうようにじっくりとにぎりめしを食べた。全て食べ終えて手についたごはん粒ををねぶった男は、穏やかに笑った。

「ああ、ありがとうございます。これで村まで帰れます」

「それはよかった。しかしどうしてこのようなところにおるのだ？」

「へえ、隣村まで笠を売りに行ったところ、道に迷いまして。やあっとのことで村のそばまでたどり着いたのですが、三日飲まず食わずだったものでここに腰を下ろしたらうごけなくなりましてな」

「そうか。私はよいところに通りかかったというわけだな」

「お侍様、この笠をお持ちください。売れ残りですが、おらが丹誠込めて作ったものです。丈夫にできております。どうかどうか……」

そう言われてそちらを見ると、笠が二つ束ねてあった。しかし笠は持っている。どうしたものかと思ったが、

「これも仏様のお導きがあってこそでございます。なんまんだぶなんまんだぶ」

手を合わせて拝まれてしまっは「いらぬ」とは言えず、その笠を持って私は次の宿場町まで急ぐこととなった。

よいことをしたとは思いますが、腹が空いているというのは何とも情けない気持ちにさせるもの、あのにぎりめしを取り返せばよかったですかと思っていると、うねる空から雪交じりの雨が降り始めた。

「降ってきたか……」

自分の笠をかぶり、手にもらった笠を持ちすすき野原に行く。鼻がむずむずしてくしゃみが出る。きっと殿も今頃熱やくしゃみや咳に苛まれているに違いない。急がねば。

しばらく歩くと大きな木の横に数人が立っているのが見えた。女だけのところに自分が混ざるのは気が引けるが、みぞれの中、一人でないことは心強い。一礼して木の反対側へ行くと、荷物を降ろして木にもたれた。これはしばらく止みそうにない。困ったと思っていたところ、後ろから、

「お嬢様、しばらく止みそうにありませんね」

「困りました。暗くなる前に帰りたいのに」

「旦那様もご心配なさっているに違いありません」

そんな声がする。見れば、身なりのきちんとした女と女中、それに荷物持ちの男が話している。たしかに暗くなる前に宿に着きたいものだ。

「申し、お困りか？」

声をかけると、若い女が振り向いた。

「これはお侍様。見ての通りでございます。墓参りに出かけたところ、突然のみぞれで難儀しております」

なるほど。笠もなしでは帰るに帰れまい。

「ならばこれを差し上げましょう。供連れとはいえ、女の人がこんなところに長くいるものではありません」

ひのふのみ……。女と連れで三人、笠は私の分を合わせて三つ。三つとも女に差し出すと、慌てて手で制された。

「そ、それではあなた様が濡れてしまいます」

「いえ、私のことはかまわず、さあ、お行きなさい」

「ありがとうございます。代わりこれを」

女はそう言って、根付けを取ると差し出した。見るからにかなりの値打ち物だ。

「こ、こんな上等なものを頂くわけにはまいりません」

恐縮すると「いえいえ」と押し返された。

「もしお困りのことがございましたら、この先にある照安寺をおたずねください。成田屋ゆかりのものと言え、よくしてくださるでしょう」

三人が一礼しながら行ってしまおうのを見送ると、雨が小降りになった。今のうちだ。

ぬめるわだちに足を取られながら、歩く。疲れたのだろうか。ふらつく足を奮い立たせるように叩きながら歩く。いったいどうしたというのだ。さっきからこの調子だ。みぞれは雪になりつつある。夕闇も近い。早く宿に着かねば夜になってしまう。



「お侍さん、だいじょうぶかね。だいぶふらついているようだが」

いきなり腕をつかまれた。見上げると身なりの汚い男が私を支えてくれていた。黄色い歯が口からのぞき、臭い息が顔にかかって私は顔をしかめた。

「お侍様、しっかりなせえ。宿場までもうすこしだで」

男は私を立たせるとにやりと笑って追い越していった。あのような気遣いをするような男に見えなかった私は懐の金子を探った。袋がない。さてはあの男！

頭に血が上ってかあっと体が熱くなり、切り捨ててやろうかと思ったとたん、体がまた傾ぎ、がっくりと膝をついてしまった。びしゃりと膝が泥水で濡れてしまった。雨は容赦なく私の背やぬかるみを叩く。寒い。これはいけない。本当にいけない。

「殿……に」

しよくらとをを……。

ふと、いいにおいで目が覚めた。嗅ぎ慣れた匂いだが、なんだただらう。

「う……」

声を出そうとしたとたん頭が痛んで口をつぐむ。喉がからからだ。

「お、目え覚ましたか」

聞き覚えのある声がして、大きな手が降ってきた。それは私の額を触った後ゆっくりと離れていった。

「熱が下がり始めたな。ったく、この借りはきっちり利子つけてかえしてもらうからな」

この軽口は平八？ 首を声の方に傾けると平八のにやけ顔が見えた。ああそうか。この匂いは平八がいつも持ち歩いている匂い袋だ。

「お前この前少し咳をしてただろ？ 家まで薬を届けたらもう出立したというから追いかけてきてやったんだぞ。感謝しろよ。ちと起こすぞ」

背に手を入れられ起こされると口元に湯飲みを添えられた。ああ、白湯だ。ぬるくうまい。一口二口、腫れた喉の奥へと入るとじんわりと染みた。

「あそこから店までの籠代と薬代はちゃんと払ってもらうからな。ったく。やっと見つけたと思ったら泥水の中で倒れてるし籠で店まで運んでも三日も寝たまんまで、このまま死ぬかと思ったぞ」

そうだったのか。何とも申し訳ない。そうだ、

「殿は？」

私が倒れている間にお加減が悪くなったということはないだろうか。

「死んだって話聞かないし、早馬も出てない」

よかった。万が一のことがあったら早馬で伝令が行くが、そうではないらしい。

それにしてもしよくらとをはどうしたものか。頂いた金子もすられてしまったし……ああそうだ。

「平八、根付けは？」

ひりつく喉で言えば、

「お前さんの懐に入ったこれか？」

俺の枕元に手を伸ばし、それをぶら下げた。

「どうしたんだこれ。ものすごく値打ちもんだぞ？」

「これであれを……手に入れてくれないか？」

「あれって、しょくらとをか？」

「困っている女人を助けたら頂いたのだ。成田屋の娘さんで、お寺に行けばとか助けてくれるとか……」

「それは照安寺のことか？」

「ああ、そんな名前だった」

「そうか……」

平八は暫し考えていたようだが、

「わかった。後は任せてお前はここで寝てろ。家に帰してやりたいところだが、帰っても一人だろ？ このまま帰して飯が喰えなくて風邪こじらせて死んだなんてことになったら寝覚めが悪いや」

たしかにこのまま家に戻っても飯も炊けず寝ているだけだ。

「世話になる」

素直にそう言えば、やはりからからと笑われた。

平八が店の人たちに見送られて出て行く声が聞こえてくる。店の主人がいなくては店も困るだろうに。申し訳なく布団の中から手を合わせていると、お菊が薬を持ってきた。お菊は先日の雷神騒動の前に売られてきた娘だが、結局売られずにここで奉公をしているのだ。

「誠之助様、お口をお開け下さい」

目の前に出された薬は鼻がひん曲がるようなひどい臭いがした。

「あ」

と口を開ければ、すざまじく苦い煎じ薬が口の中に入ってきた。内心悲鳴を上げながら無理矢理ごくりと飲み込む。白湯をもらって一心地着いたところで店から客を出迎える黄色い声が聞こえた。

「平八はどこへ行ったのだろうか」

「だんなさまは物好きなお殿様のご機嫌を取るとかで港の方へ行かれました」

「なんと！ 殿のことを物好きとは無礼であろう」

何という口の利き方をするのだと怒ったのだが、あまり大きな声は出なかった。するとお菊はくすくすと笑い出した。

「お殿様第一主義の誠之助様はそうおっしゃると思っていました。だんなさまのとおりにおっしゃるのですね」

くすくすと笑われ居心地悪く布団をかぶるしかなかった。殿のことを第一に考えて何が悪い。この国のことを考えれば当たり前のことではないか。

二日もすると普通に食事が出来るようになり、これなら勤めに出られそうだったのだがお菊が、「だんなさまがもどられるまでは！」と部屋から一步も出してくれなかった。

しかしこのままでは皆に迷惑をかけてしまう。本気で部屋から抜け出そうと考えていたときだった。

「誠之助様、土田様がお見えです」

お菊の声と共に土田様が部屋に入ってこられた。慌てて布団から出て座り直し、平伏した。

「これは土田様。このような恰好で申し訳ございません」

土田様はよいよいと言いながら私の目の前に座った。

「流行病だと聞いたが、元気そうでなによりだ。ゆっくりと養生せよと殿からのお達しだ」

殿も私が病を得たことをご存じなのか。お優しい言葉に涙が出る。

「ありがたき幸せに存じます。して、殿のお加減は……？」

「ああ、お前が平八に頼んでくれたしょくらとをのおかげでぴんぴんしておるわ」

そうか、平八が届けてくれたのか。安堵していると土田様の後ろから黄色い声を背に平八が部屋に入ってきた。

「よう。顔色もいいしすっかりよくなったみてえだな。よかったな」

旅装束のままの平八は疲れた顔一つせず笑って見せた。

「あれは……手に入ったんだな」

「ああ。大変だったんだぞ。あれから」

そして平八は大きな身振り手振りを交えながら旅の説明を始めた。

「まず最初にお前が助けた娘ゆかりの照安寺に出向いてだな。事情を話したら気の毒にと一筆書いてくださったんだ」

平八よ、どんなふうにして事情を話したのだ？ と問う間もなく平八の話は続く。

「あそこの和尚は達筆で有名だが何かないと書いてくださらない御仁だからな。それを掛け軸にして隣の国のお殿様に売りつけた」

「……は??」

「そのお殿様はえらく書が好きな方でな。代わりにえらく高価な茶碗をくれた。それを今度は小物やに持って行くと馬鹿でかい真珠のかんざしに化けてな」

「か、かんざし？」

「これまたいいもので。そいつを持って今度は遊郭に出入りしてる廻船問屋の旦那のところに行くと、お気に入りの遊女に是非贈りたいと言われてな。何かと交換したいと申し出たら、ならば船をやらうと言われてな」

「船だと？」

信じられない話に土田様は大きく頷きながら聞き入っている。きっと同じ話を殿の前でもしたのである。お菊は私と同じようにぽかんと口を開けたままだ。

「まあいろいろとあって、最後には象になった」

「ぞ、象っていうのはどんなもんですか？」

お菊が口をはさむと、平八はにんまりと笑った。

「そりゃ小山ほどもある動物だよ、うちわのような大きな耳をしていて長い鼻でなんでも持つことが出来るのだよ」

はあ、象ですかと、お菊は口をつぐむ。象とは。私も何かしらの絵で見たことはあるが、それを手に入れたのか。やはり平八はたいした男だ。

「象は動かせねえから俺が書き付け持って南蛮人のところに交渉に行って、例の物と交換したというわけだ」

その時、「失礼します」と声をかけられ、しかめっ面の女中が入ってきた。お盆には抹茶色の茶碗がのっている。

「おお、できたか」

女中はそれを私の目の前に置くと、そそと下がっていった。

「これがしょくらとをだ」

「これが……」

一見汁粉のようだが妙な臭いがする。持ってきた女中のしかめっ面は、このせいかな。

「南蛮人の滋養の元。疲労回復に気力回復、媚薬の効果もあるらしい。長い航海のお楽しみなんだと」

「そうだ。お前が平八を指示して手に入れてくれたのだと聞いたぞ。殿は感謝しておってな。手に入れてくれたしょくらとをを全てお前にくださるそうだ」

なんということだ。殿が私をおもんばかりでこんな高価なものを……。

「殿はお気に召さなかったみたいだけどな。まあ甘いものだから滋養にはいいだろう」

相変わらずの平八の失礼ぶりに少々顔が引きつったが、殿のお心遣いが嬉しかった。

「ありがたく、頂戴仕る」

ぐいっと飲めば、苦く渋く甘くねっとりしていて、何とも言えない奇妙な味がしたが、とにかくありがたかった。

それからまた数日が過ぎた。

しょくらとをが効いたのか、体力気力を取り戻し、今日家に帰ることになった。

着がえ終わった頃に平八が部屋に来て俺に言った。

「お前の借金だが、いろいろ計算したら……結局元に戻っちまったぞ」

日々のことを削ってやっとのことで返してきた夏の借金がふりだしに戻ったのか。仕方あるまい。病で倒れて迷惑をかけたのだ。

「ちゃんと返す。いや、少しずつしか返せぬが、必ず」

「いや、金はいい。今度のことでかなり稼がせてもらったからな」

「え？」

「いやあ。繋ぎをつけたかった問屋やらなにやらと取引が出来るようになったんでね。お前のおかげで助かったよ」

なら返さなくていいのか？ 助かった……と思っていたら、

「でもお前への借りは返してもらわねばな」

と、にまりと笑う。たしかにそうだ。

「もちろんだ。世話になったままでは心苦しい」

すると平八は傍らで微笑むお菊の手を引いた。

「こいつをもらってくれないか？」

「は？」

「え？」

二人で顔を合わせて目が合って、もらってくれという言葉の意味を考えて、顔が赤くなった。

「おいおい、何も夫婦になれってんじゃねえんだよ。まあそれでもいいがな。……こいつを住み込みの小間使いとして雇ってくれって言ってるんだ。ちゃんと仕込んだし、元々お前が目をつけたんだから責任取れよ」

確かに夏にお菊が親に売られてきた時に可哀想にと思ったが、

「あ、あれは違う。断じて違うぞ！」

「いいじゃねえか。俺の店も手狭になってきたし、今回みたいなことがあってまたお前をここに泊めるのも面倒だ。何よりお前には大きな貸しがある」

困った。たしかに独り暮らしだし屋敷も広くないがそこそこだ。一応の手入れはしてあるものの、行き届いていないのが現状。一人雇うだけの余裕もある。いてくれれば助かることは助かるが、年頃の娘を家に住まわすのはお菊のために良くないのではないだろうか。

「お菊はいいのか？ 家は私一人住まいなのだが」

するとお菊は紅潮した顔のまま、握り拳を胸の前で組み、私を見上げた。

「よ、よろしくおねがいします！」

そう言われては仕方がない。渋々承諾した。

次の日からお菊は家に住み込みで働くこととなった。家の中の細々としたことも外の掃除もかいがいしくしてくれる。そして、無精をしていると怒られる。例えば、水が冷たいから顔を洗うことを渋っていると、

「わたし旦那様がお洗いになるまで手ぬぐい持って見ておりますから！」

と、せまってくるので無精が出来ない。他にも箸使いがおかしいだの身なりをきちんとしなくては出世できないと言われ放題だ。

しかしこの口うるさいこの小間使いは、出かける前になると、

「だんなさま！ 今日だんなさまのお好きな物をお作りしますから、お勤めがんばってくださいね！」

等と満面の笑みで可愛いことを言う。

病床で味わったあのしょくらくをのような、なんとも複雑な気持ちである。

おしまい

やけに、きれいな夕焼けだった。ビルとビルの中に、ミカンみたいな夕日がのんびりしずんでいて、頭上の雲なんかピンク色していて、塾帰りの子ども達が、

「じゃあな、バイバイ」

なんて言っていて別れていく。後ろから焼き芋屋さんの、

「いしや～き～いも～」

って調子っぱずれの音が聞こえるのといっしょに追い越していった軽トラックから、鼻にくすぐったい薪が燃えるにおい。荷台にはあったかそうに火なんか燃えちゃってさ。おいしそうに芋が焼けてるのよきっと。

なあんだかしあわせそうな世界。

そこからこぼれた私には、ちょっとうらやましいよ。

今日はホントについてなかった。

朝一番で目覚まし時計がこわれていたことが判明、起きた時点で二時間目の真っ最中なんてありえない。

「お母さん、会社に行く前に起こしてくれればいいのに！」

と恨み言を言いながらあわてて身支度して、自転車で飛び出したら車にひかれそうになり、おまけにいつもの駐輪場はいっぱいで、路駐しようとしたらおまわりさんにとがめられ、えっちらおっちらスペースを作って自転車を止めて駅までダッシュ！

やっとの思いで飛び乗った快速電車は、次の駅に着いた直後、三つ向こうの駅で起きた人身事故で一時間以上止まった。ようやく動いた快速電車は各駅停車になっちゃって、のろのろと動く車内で化粧をする女の人に心の中で悪態をつきながら学校にたどり着いたときには昼を過ぎていた。

昼休みの教室にこそっと入ろうとしているところで、廊下の向こう側から来る佐藤くんに会えた。

恋ってすごい。会えただけで空気が代わる。朝の出来事が嘘のよう。

ずっとあこがれていたの。佐藤君。頭がいいし頼りになるし、なによりもかっこいい！

だから私から告白した。そしたら、付き合っていた田中さんと別れた直後だって即OKもらって、有頂天で付き合い始めたんだ。だから今は、私が、彼の彼女。

「おはよう！」

ハートを飛ばしながら近づいていくと、

「電車が止まったんだって？ 大変だったな」

苦笑する彼は私の手を引いて、

「こっち」

なんて、人気のない階段の踊り場に連れ出した。うわ、うわあ、もしかして？ だめだよ。

まだ昼よ、キスなんて初めてだしどどどうしよう！ って思っていたら、

「あのさ」

って、険しい顔をする佐藤君。どうしたの？ って言おうとしたとたん、今の今まで気がつか  
なかったんだけど、彼の後ろから田中さんが申し訳なさそうにこちらを見ていて、……事態が把  
握できないんだけど。

「おれたちやり直すことにしたんだ。だから、付き合えない。ごめん」

そう言いながら深々と頭を下げる佐藤君。衝撃的な告白に、私は立ちつくすしかなかった。極  
めつけは、田中さんの申し訳なさそうな顔とおじぎだった。私と違ってしおらしく温和しくてか  
わいらしい彼女。

……ちえっ。

「わかった！」

怒りを乗り越して自分に呆れた。二人に背を向けて教室に入って、机に思い切りカバンをたた  
きつけた。別れただなんて言って、喧嘩してただけだったんじゃない！ 腹いせに使われるな  
んて。見抜けなかった私の目が節穴だったってことよ！

心をぞうきんみたくぎうぎうに絞りに絞って出した、私の勇気と告白を返せ！

そんでもって傷心の午後、英語でいきなり当てられて答えられず、帰りは午前的人身事故で乱  
れに乱れまくったダイヤで運行する電車でぎゅうぎゅう詰めにされて、やっとのことで最寄り駅  
に戻ってきたら、自転車が盗まれていた。無惨に切られたチェーンロックを握りしめ、暫し呆然  
。そんなこと知ったことかとはばかりに、ほのぼの色に染まる夕焼けをみていたら、沸々と怒りに  
燃えてきた。

これを不幸といわずになんと言おう。なんで私ばかりこんな目に！

「神様なんかだあいきらいだあああ！ ばっきゃあろおお！！」

怒る猫みたく全身の毛を逆立てて夕日をにらみつけていると、

「ばかだと？」

って、男の声がした。うそ、聞かれてた？ 誤解された！？

「ご、ごめんなさい。ひとりごとですから。あなたのことじゃないですから」

ぺこぺこお辞儀をして、ひとまず謝った。でも顔を上げて道行く人ばかりでそれらしい人は  
いない。通行人は変なものでもみるように私をチラ見してく。うぁも一っ空耳に謝っちゃった？

恥ずかしい！ なんてことさせるのよ！ 神様のぶわああっかああ！

「また言ったな」

……やっぱり声がするよ？ 耳鳴り？ それとも超能力ってやつ？ まさかまさか、私フラレ  
たショックで頭がおかしくなった！？

「2番が正解に近い」

うげ、また聞こえた。

「あのお、超能力って使ったこと無いんですがあ。てか人の考えていること勝手に読み取るなん  
て迷惑超ウザッ」



するとまた耳の中から声がしてきた。

「これ以上の罵倒、許さぬ」

体が宙に浮くかんじがして、目隠しされたように目の前が真っ黒で何も見えなくなった。

気がつけば暗い中で一人ぼつ～んと立っていた。

ここはどこ？ 私は誰？ なんつって。私は誰だかわかる。鈴木さんちの長女の綾ちゃん。高校二年生。でもここはどこ？

その時、いい香りがふっと鼻をかすめた。これ、木のにおいだよね？

目が慣れてくると、脇にでんで～んと円い柱が並んでいるのがうっすらと見えた。

ああこれだ。白木の柱。床も白木。これだけあればにおいはするわよね。でもかすかにちがうにおい。ここには全くそぐわないたぐいの。

一段上がった向こうにでっかい丸い鏡。その台の向こう側、ぼんぼりっていうのだけ？ おひな様に飾られてるようなチョウチンみたいなもの下に、あぐらを掻いて座っている人がいた。さっきの声はこの人だろう。ばかにしたんじゃないってちゃんと言わなくちゃ。そして帰してもらわなくちゃ！

「あのお」

おそるおそる声をかけるけど、完全無視。

「こんにちはあ！ 呼んだのはあなたですかあ！？」

.....まだ無視する気？

腹立ち紛れにどかどかと足音を立てて近づいてみて仰天。だって、足下に無数のゲームソフトにPSP。飲みかけのペットボトルの林と菓子袋が散らばってるんだもん。においはこれだわコンソメ風味のポテチ。

その中央に、シーツを体に巻き付けた男があぐらをかいてDSやってる！ 神聖なとこっぽいのに、ビジュアル的にあり得ない。

「少し待ってくれ。今手が放せない。思いの外、手こずっている」

かちかちと激しく連打するボタンの音と共に、私のボルテージも上がっていく。

「あのさあ！ 人を呼んでおいてDS！？ どこまでバカにすれば気が済むの！」

「先に我をバカと言ったのはお前だ。それにこれはゲームではない」

ひょいとDSの画面を覗くと、ロリ萌え系体操服美少女が、モジモジしながらこっちを見つめていた。

『あたし.....あなたのこと、ずっと、ずっと好きだったの』

ほったた真っ赤でこっちを見てる可愛い子、少し田中さんに似てて、さらにムカッ！ 「この女人のために一日費やしてしまった。全く、昨今の女人はワガママで困る」

そう言う男の顔を拝んでみたら、あらこの人、けっこうイケる顔だけど、髪型があり得ない。教科書で見た古代日本の絵にそっくり。ツインテールをまるめて束ねたあの髪型なのよ！ なんでもそんなかっこうしてるの？ コスプレ？ それに言ってる内容と口調がちぐはぐすぎて最悪。

「偉そうな口をきく割に、エロゲでニヤつくあんたはどうなのよ!？」

「しばし待て。エンディングだ。これで今日のノルマは終了」

どれどれ? はあ。たしかに、エンディングが流れて、……あり? テロップが全部同じ名前。監督も音楽も作画も声も全部「神」って書かれてる。

「すごいじゃない。これ、ぜんぶ一人の人が作ったんだあ。えっと“じん”って読むの?」

「いつもは神様と呼ばれておるがな」

むすっとそう言って、DSの電源を切った。

は? 神様!? 神様って、さっき私がばきやあろおとか言っちゃった神様?

たしかにこの神殿って、七五三の時にお参りする神社にそっくりだけど、その中でポテチ食べながらゲームしてるのが神様って言われても……。まあよく見れば高貴といえなくもない美しい立ち姿。白いシャツだと思っていた物は、日本神話に出てくる神様チックな白い衣装だけど。

「運命決めの効率を上げるため、シミュレーションゲームにしたまでのこと。お前ら人間だってこれくらいのはするだろう」

「シミュレーションするにはゲームっていいのかもしれないけど。それはあくまでゲームじゃないの。そんな簡単に人生決められても困るわ」

「簡単ではない。人間どもは我がすることを『神の気まぐれ』とか言うが、出来事すべてシミュレーションして結果を出してから事を起こすのだぞ。大変なんだぞ」

「へえ～。それにしては、不幸な人がたあつくさんいると思うんだけど?」

その筆頭は今日の私ね。事故りそうになるしフラれるし自転車取られるし、超絶大不幸だったわよ! すると自称神様はつばを飛ばしながら私を怒鳴りつけた!

「ばかもの! 自分にばかり都合が良くては、他のものたちが困るだろうが!」

「それはそうだけど……まさか私が今日ツいてなかったのも、シミュレーションの結果?」

「いや。お前の怠慢だ」

ひどい。

その時、ケータイのバイブ音がした。ここ、電波入るんだ。意外に思いながらポケットに手を差し入れると同時に、

「はい。日本支部」

って、あんたか!

彼はローブの中から取り出した黒光りするケータイの上部をつまんで耳に当てて話し始めた。

「はあ? 何言ってるんですか。困りますよそんなの。……決定事項? 待ってくださいよ、私いなかったじゃないですか。え?」

慌ててごそごそとポテチの袋の山をどかして、一枚の紙切れを取り上げる。

「あちゃ～、今日だったんですかこれ。でも連絡くらいしてくださってもいいじゃないですか。何度も電話? ……わかりました。ではこちらは全力で阻止させていただきますから。はい、はい」

そう言ってケータイを切った彼の顔つきが変わった。

「着信23件。気が付かなかった」

そう言いながら、大きなゴミ袋にポテチの袋をつっこむと、ゲーム類も片隅に片づけはじめた。

「今の電話、何？」

なんだか不穏な空気だわよ。全力で阻止って、何？ 神様が困るような出来事って……。

ごっくんと生つばを飲み込んでいると、一応の片づけが終わった彼はじろりとこちらを見下しながら言った。

「汝、我をあがめよ」

おっと、いきなり神様モードですよ。あがめよとききましたよ。えらく威厳があるし後光まで差して来ちゃってまぶしいったら！

「我の力は人々の願いが元となる。昔は人々も信仰心が厚く、我も神風を吹かせることなど造作もないことだったが、最近は勝手な願いばかりで手も合わせぬ奴らばかりだ。このままでは足りぬ。力を貸すのだ」

「いやですう。いきなりあがめろって言われても困るよ」

すると自称神様はうむと考えながら、ぽんと手を打つと、

「ならば見せてやろう」

と、私の腕をつかんだ。

同時に私たちは、さっきの神殿っぽいところではなく、オレンジ色に明るい空の、

「ううえええええ！」

「悲鳴を上げるならもっと可愛らしくしたらどうだ」

無理無理無理！ 首をぶんぶんと横に振りながら、足下をおそるおそる見る。

夕焼け雲ですよ。雲！ 足下一面に！！ そして、私の隣に夕日がまぶしい。

「高いところダメなんです！ 元に戻してえええええ！」

必死になってシート、じゃなかった、ローブをつかんでいると、彼は雲に出来た隙間を指を差した。

「あそこを見ても」

言われるまま覗いてみた。あれって、富士山？

ぽっかりと丸いカルデラ……っていうの？ その雪をかぶったてっぺんから裾野が美しく広がっている。

「向こうに見えるのが、海だ。どうだ美しかろ？」

反対側を見れば夕焼けに光っている海。きらきらとまぶしくて。

……なんて光景。神々しすぎて涙が出る。

「作ったのは、この私だ」

正直引いた。

「それもシミュレーションの結果で？」

「もちろんだ」

鼻高々としている彼の頭、思い切りはたいていいですか？ 答えは聞いてない！

震える右手をこぶしに代えて、振り上げた時だった。

「来たようだ」

ずっと指を差すその先に、きらりと輝く星が見えた。

星？ ううん、ちがう。だって動いてる！

「なにあれ。まさかUFOとか？ そんな非常識なもの！？」

「何を言うか。あれはお前達のものだろう。お前達人間が技術の粋とやらを凝らして作った、たしか日S型ロケットとか言っておったな」

「ロケット？ ロケットってあの、人工衛星やら人間やらを宇宙に運ぶ？」

「他に何かあるというのだ」

そう言えば、昨日のニュースで今日打ち上げるって言っていたなあ。何十億というお金を使って飛ばすんだっていうから、そんなお金があったら私にもくれないかななんて思ったんだよね。正直、ロケットなんて、テレビやなんかで知ってる程度でぴんと来ないけど、向こうから迫ってくる光を見る限り、それっぽい。

「あれは東京に落ちてくる。日本が滅びればいいと言う若者の願いを、他の担当者が聞き入れてしまったんだ」

「なんで！？」

「神様議会では、増えすぎた人間を減らすため、日々努力している。人間が増えすぎたことで、森は減り、水は汚れ、他の生命には多大な影響を……」

「増えすぎ？ そんなことないわよ。日本じゃ今少子化でたださえ若い人が子どもを産まなくな……って、まさかそれもあんたのしわざ？」

「それは」

ぐっと、言葉を詰まらせながら、彼はその場にしゃがんだ。

「減らせ減らせって、ノルマがきつついのだ。平和的にノルマをこなそうとシミュレーションを繰り返し、その結果を今度の会議で発表し、なんとか回避したかったが」

そうして右人差し指で地面、じゃなくて夕焼け雲にのの字を書こうとしたけど、雲は指先で霧散して、幽かに下界が見えた。

ん？ ちょっと待て。

「その大事な議事をゲームで忘れちゃった訳？ あんた、日本の担当なんでしょ？ 日本が壊滅しちゃったらどうするのよ！」

「仕方ないだろう？ あれとて大切な仕事なのだ」

「なんだとおお！」

言ってる間に、目の前に迫り来る大きな光の球は迫ってくる。

やばいどころの騒ぎじゃないわよ！

「あんた神様ならなんとかできるでしょ？ なんとかしなさいよ！」

「ならば、これだ」

と、とりいだしたるものは、……ゲーム機のコントローラー？

「一度しか言わぬぞ。私の気合いゲージを上げるには、上上下下左右上下上下右、○ボタンだ」

「……は?? なに、あんた、ゲームかなんかなの!？」

でもこれ、どこにもつながっていないじゃないの! あ、もしかしてワイヤレス?

「このコントローラーならお前の気合いが入りやすかろう？」

「こんなので気合いが入るなんてあんただけよ! 力になりたいとは思うけど、コマンド入力くらいで気合いゲージが上がるの？」

すると彼は両手を広げて、ぴか〜んと輝いた。おわっまぶし!

「人々の願いや祈りは光となり、我の力となるのだ。今の我の力では支えるのでせいいっぱいだ。失敗したら東京に落ちて、多数の死者が出る。頼んだぞ」

死者が出るってそんな。神様なのに力が足りないなんて。それなら無駄に光らないで省エネを心がけなさいよ。

そうこうしているうちに、大きな光の球は、どんどんどんどん大きくなっていく。

こうなったら、……こうなったら!!

「うおおおおお!!!」

激しく連打してみた!

上上下下左右……カチカチと手元で激しく音をさせて入力していったのだが、最後の○を押そうと思ったら、目の前に光!

「た、たすけて神様!!」

思わず叫んで、来るだろう衝撃に備えながら、儚い人生を嘆いた。

ああ、こんなことなら、もっと人生楽しんでおくんだった。

彼氏なんて一人にこだわらずにたくさん作って逆ハーでウハウハすればよかった!

自転車置き場にあふれる自転車なんて蹴散らして。堂々と止めてやればよかった!

ほかにも楽しいことがまんしないで、やればよかったあああ!!

でも、来ると思っていた衝撃はいつまでたっても来ない。おそろおそろ目を開けると、目の前に彼が立っていた。右手を掲げた先に、不自然にぐしゃりと潰れたロケットらしき物があり、それはやがてそのままの形で雲の海へと落ちていく。彼の後ろから後光が差していて、まるで本物の神様みたい。きっとこれで大丈夫なんだわ。彼の穏やかな顔にほっとしていた次の瞬間、遙か下方からとんでもない光と音と衝撃波がやってきた。

「きゃああ!」

彼にしがみついて事なきを得たけど、ま、まさか!!

「ちょ、ちょっとおおお! 爆発しちゃったじゃないの! どうすんのよ!」

「うむ。ちと力が足らなかったな。消滅とまでは行かなかったが、安心せい。人がいないところに落とせたぞ。環境に悪い物は極力取り除いたから、海のものたちにも影響は少ないだろう。一応日本に落としたから議会の面目も立つ」

「でも日本でしょ？ 爆発したんでしょ！」

しかし彼は完全無視して私に微笑んだ。

「よくやった、娘よ。褒美に何か一つ願いを叶えてやろう」

お願い聞いてくれるなら、答えは一つだ。そんなの決まってる。こんなところから一刻も早く帰りたい！

「早く家に帰せええ！！」

願い、聞き届けたり

耳の奥で声がしたと思ったら、雲が抜けて落ちて急降下。

このままじゃ地面に激突してミンチよ！

「うわああん！！」

.....チュンチュンとスズメが鳴いている。

ふとんから手を伸ばして、目覚まし時計を確認。あれ、さっきまで夕日を眺めていたのに。どこからが夢だったんだろう。というか、今までののが全部夢だったって事！？

一日損した気分。

急いで着替えてリビングに行くと、両親ともまだ家にいた。

「おはよ」

「早くご飯食べなさいよ」

テレビではニュースがやっていた。

「大変なことになったなあ」

お父さんが真剣な顔でその画像を見ていた。海の真ん中にある珊瑚礁。その中に何か巨大な物が突き刺さっていた。ん？ 微妙に夢に似てる？

「でも、別に人に被害はなかったんでしょ？」

お母さんが味噌汁を運びながらお父さんに聞くと、お父さんは、

「ああ、まあそうだが.....」

と渋い顔。

画面の左上にあるテロップを見てみると、こう書いてあった。

『日S型ロケット打ち上げ失敗 どうなる排他的経済水域』

排他的？ なんだろうと思いながら味噌汁を受け取って、食べはじめたんだけど、コメンテーターが真剣に話しているのを聞いて、箸が止まった。

沖ノ鳥島の南粉島というところに打ち上げ失敗したロケットが直撃、その振動で隣の西粉島も

崩落寸前。珊瑚礁の中にある一見岩だけの島がなくなると、排他的経済水域とかいうのがなくな  
って日本はたいそう困るって！

確かに人がいないところだけど、大事な島なんじゃないの、ちょっとお！

でも……さ。東京とか、市街地なんかに落ちたら大惨事だったのよね、これ。

あれが夢だったのか本当だったのかはわからないけど、確かになにかに守ってもらった気はす  
るなあ。あの神様……かどうかはわかんないけど、ちょっとだけ、信じてみてもいいかな。

テレビ画面に手を合わせて、祈る。

守ってくれてありがとう。

信じてあげるよ。だから、神様もガンバレ。

「何やってるの！ 早く食べて学校へ行きなさい！」

「へえ〜い」

神様に、光、あれ！

## 終わる、世界

---

《今日はいちにち、風の強い日になるでしょう。午後からはところにより、世界が終わるでしょう……》

よく聞こえない天気予報の後、軽快に鳴り出すラジオに耳を傾けながら、スーツ姿の啓輔が席につくのを確認する。私は豆腐と油揚げのおみそ汁をよそい、彼の前におくと自分も席に着いた。啓輔はマナー通りに箸を取り、手を合わせて「頂きます」をしておみそ汁に箸先を付けて食べ始める。味、濃くなかったかな？ 何も言わないところを見ると、よかったみたい。安心して手を合わせ、

「いただきます」

と、食べ始める。おみそ汁は申し分のない出来。でも卵焼きは塩を忘れたみたいで味がイマイチ。おいしくないのか、啓輔は卵焼きをつついてはいる。気まずくてあれこれ話題を探す。庭のツツジが咲き始めたことにしようか、それとも近所の犬が五月蠅くてたまらないとか……それにしても、さっきのラジオ、変なことを言ったわね。

「変な天気予報だったね」

話しかけたけど、彼は何も言わなかった。普段から口数の少ない彼は、必要以上に物を言わない。

「世界が終わるって、聞こえた」

「聞き違いだよ」

啓輔は不快そうに新聞を広げ、顔を隠してしまった。そうよね、やっぱり聞き間違いよね。いくらなんでも天気予報で世界が終わるなんて言うのはおかしいわ。

私は卵焼きに味を足すために醤油に手を伸ばした。ふと、啓輔の手の先に触れる。彼がびくっと震えた衝撃で醤油ピンはあっけなく倒れ、濃い茶色のシミがテーブルクロスに広がっていく。

慌てて醤油ピンを立て直し、白いテーブルクロスが無惨に汚れていくのを見つめる。もしマジックが出来たら、テーブルクロスを一瞬で引いて醤油がこぼれるのを防げたかも。真っ白なテーブルクロス。醤油のシミを完全に取るのは無理かもしれない。

「ごめん」

啓輔が小さく謝る。私は努めてにこやかにした。

「大丈夫、後で洗うから。早く食べないと会社に遅れるよ？」

「ああ」

啓輔は大きな口でご飯の最後の一口を口の中に頬張って立ち上がると、さっさと身支度を調べて家を出て行った。

とにかくテーブルクロスを洗わなくちゃ。食べ終わった食器を食洗機に放り込んでテーブルクロスを取る。風呂場で手洗いをしてみたら、案外落ちてくれてうれしい。そのまま洗濯機に入れて丸洗い。



洗濯機が回っている間にお掃除をする。掃除機をかけた後部屋中をモップで拭いている間に洗濯機が終了した電子音が聞こえた。

窓を開ける。

今日もいい天気。でも予報通りに風が強い。テーブルクロスはよく乾くだろう。洗濯ばさみで飛ばないように押さえると、振り向いて「あっ」と声を上げてしまった。

家の中に入り込んだ風が机の上に重ねてあった啓輔の書類を次々飛ばしている。

「いけない」

慌てて窓を閉める。おとなしくなった書類は飛行をやめて着陸。一枚一枚拾い集めながら、ため息。あとで確認して貰わなくちゃ。

ふと、その中に一つの書類が目止まった。

「……え？」

ドラマでしか見たことのない、白地に緑の印字。こんなものを手にする日が来るなんて思わなかった。名前は書いてないけど、これは紛れもなく、離婚届。

啓輔、そんなこと一言も言ってなかったのに。

私に飽きた？ それとも他に好きな人が出来たの？

幸せだったと思ったのは、私だけ？

そう思うと情けなくなってしまった。

当たらなかつたわね。天気予報。

だって、午後から《ところにより世界が終わる》、だったでしょう？

まだ午前中じゃないの。

私なりに、がんばってきたつもりだったのに、啓輔はそう思ってくれなかったの？

風にはためく真っ白なテーブルクロス。その中央に落ちきれなかった醤油のシミ。

知らない間に私たちの間にもあんなシミが出来てしまっていたのかしら。

そのままお昼までぼうっとすごした。どんなに絶望していても、おなかだけはすくのね。でも何か作る気持ちになれず、残りご飯におつけ物で軽くすませる。

たらいの中にちゃぶんとご飯茶碗を沈めると、そのまま寝室に行き、ベッドに倒れ込む。

眠ってしまおう。ふとんをかぶっていればきっと目が覚める。

これは夢。これは夢よ。

絶対に。

目が覚めると、西日が部屋の中に差し込んでいた。

起きあがると鈍く頭が痛む。寝室の中には変わらない。でも、と思いながらのろのろ起きあがり雀の涙ほどの希望を持って書類の山を見て、後悔した。

夢じゃ、なかったんだ。

そうだ、テーブルクロスをしまわなくてはとベランダへ続く窓を開ける。テーブルクロスはまだ風に遊ばれていた。それをしまって、電気を付けた下で確認してみる。ああ、よかった。これなら目立たないかも。目立つようだったらもう一枚テーブルクロスを重ねてみよう。

黒っぽい木のキッチンテーブルに、真っ白なテーブルクロスを広げる。

これで朝と同じ。

少しシミがあるけど、大丈夫。シワも伸びるわ。

そう思っていると、

「掛井さん！！ 掛井さん！！」

どんどんどん、とドアを叩く音。隣のおばさんの声だ。何事だろうと思いながら急いでドアを開けると、

「やっぱりまだいたのね。早く逃げるのよ」

「なにか、あったんですか？」

「いいから早く！」

ぐいっと手を引っ張られて私はっかけのまま玄関を飛び出した。

一歩出て、言葉を失った。

空を、何かが飛んでいく。大きな飛行機。横に日の丸が見える。

あれは……自衛隊？ あんなにいっぱい……。

「みんな学校に集まってるわ。何も持ち出せなかったわね。いいわ、どうせたいしたことがないから。私ね、ご主人に留守を頼まれているのよ。昼間なにかあったらあなたをよろしくってね。いいご主人を持って幸せね」

道すがら、隣のおばさんはぺらぺらとしゃべってくれたけど、半分も頭に入らない。

幸せ？ それは朝までのことだったわ。

それまでは幸せな主婦でいられたのよ。

さっきまでの不安がぞわぞわと背筋を這い上がる。頭の中が警鐘を鳴らす。

「駅に……行かなくちゃ」

「駅！？ 何を言ってるの。避難しなくちゃ！ あ、ちょっと待ちなさい！ 掛井さん！！」

走り出していた。っかけじゃ走りづらいけど、でも。

「啓輔……」

坂道を足だけが駅にかけ出す。会って、話をしなくちゃ。話をしてちゃんと訳を聞かなくちゃ

。

その時、

「何か降ってきたぞ！」

男の声がした。近くにいた人がこちらに走ってくる。

「伏せろ！」

「え？」

その瞬間、それを浴びた私は、文字通り、フリーズしてしまった。体も心も何もかも。日常ではあり得ない、鉄臭いぬめっとしたそれは、血の色をしていた。

「な、に、……」

がくがくと膝が震え、立ってられない。ふわっと体が傾ぐ。と、がしっと腕をつかまれた。

「大丈夫ですか？」

全身カーキ色の制服とヘルメット。自衛隊？

「ここは危険です。避難指示が出ていたでしょう？」

「駅へ……駅へ行かなくちゃいけないんです。お願いします。行かせてください！ 行かないと、啓輔が」

もう家に帰ってこないかもしれない。こんなところに。そんなの、いやだ。いやだ！！

「けいすけえええ！！」

泣き叫ぶ私に、自衛隊の人はポケットからハンカチを取り出すと、汚れた顔を拭いてくれた。

「とにかく、落ち着いてください」

周りを見渡せば、あちこちに血の後とおぼしきものがついていた。夕焼けがそれらをどす黒く映し出している。

「駅には、どなたかいらっしゃるのですか？」

「夫が……帰ってくるんです。いつも7時25分の電車で。いつも迎えに行くんです。そろそろ迎えに行かなくちゃ」

うそだ。いつもは家で待っているのに。

「わかりました。ご主人が心配なのですね。同行しましょう、ちょうど駅へ向かうところなので」

自衛隊の人はそういうと私を支えて立たせてくれた。

空で、何かがチカチカと光った。大きな雷のような音がして、何かが落ちる音がする。自衛隊の人は私にヘルメットをかぶせると、静かに話し始めた。

「以前から日本のどこの区域とわからないところですが、攻撃するという予告があったんです。警戒態勢に入っていたのですが、情報は伏せてあったんです」

「じゃあ、戦っているのは、自衛隊の人たちなの？」

「ええ」

「相手は？」

「簡単に言えば宇宙人ですかね。先程この地域を拠点に地球を侵略すると宣言しました」

静かに淡々と自衛隊の人は説明した。

「でも、毎日テレビやラジオを見ていたのにこんなこと少しも話題に上がらなかったわ。もっと早く教えてくだされば」

「日本のどこかわからなかったからです。不確定要素が多い情報を流せば混乱するでしょう？ 最悪の場合暴動が起こるかもしれません」

苦笑する自衛隊の人に、私は押し黙るしかなかった。

じゃあ……私たち一般市民は、何も知らず、何も知らされず、ただ世界が終わるのを見ているしかないの？

いつも賑わっている駅前の商店街は、廃墟のようだった。そのかわり自衛隊の車両が駅のロータリーに何台も止まっていて異様な雰囲気だ。その中にひときわ大きなカーキ色のテントを見つけると、自衛隊の人は「ここで待っていてください」といいながら中に入っていった。しばらくすると、女性の自衛隊の人が出てきた。

「掛井さんですね？」

本部と書かれたカーキ色のテントの中に招かれる。電球の明かりに目を細めながらその中に入ると、無線機を片手に先程の自衛隊の人が、「いやあよかった」と頬をゆるめながら、「今ご主人のことを問い合わせてみましたが、ご主人の地域は攻撃範囲外でしたので無事が確認されました。さ、ご主人ですよ？」

そう言われて差し出された無線機を受け取る。この向こうに啓輔が？

「もしもし……」

『綾か？』

涙が……あふれた。

『大変だったな。大丈夫か？』

私を気遣う啓輔の声が、優しく、もう、どうしようもなく泣けてきた。喉の奥が熱く詰まって、言葉が出てこない。

ただただ無事で、彼が無事で、ほんとうによかった。

ほんとうに、よかったと……。

涙がほろっと、こぼれた。目の端っこから温かな液体が流れていく。

目を開けて、ふくふくとしたふとんの中にいることを不思議に思った。

まだ体のぬめった感覚があって、ふとんが汚れていないか心配したけど、ピンクの花柄のシーツは汚れていなかった。

手の指の一つ一つを動かして、足を曲げたり伸ばしたり。

大きく息をついて、天井を見上げる。

ああ、よかった。見慣れた天井だ。

寝汗がすごいな。シャワー浴びたい。シャンプーも。

「綾～！ 早く起きなさい！」

お母さんの声。

そうだ……。

私は、高校二年生、鈴木さんちの長女、綾ちゃん。

こっちが、現実。だ。

それにしても、ヤケに、生々しい夢だったな。しかも悲惨。宇宙人って何よ。昨日見たスクープ映像とか言うのの影響？ たしかに宇宙人が攻めてくる系の話があったけど、あれが夢に出たの？

しかも掛井君って人と夫婦だったよ！ ありえねえよ！ 知らない人だよ！ しかも分かれる寸前？ どんな昼メロだよ！ 私が専業主婦なんてありえない！ 結婚しても働くって決めてるのに。

もおおお！ 私が付き合ってるのは、佐藤くんであああ！！

しかもつきあい始めたばかりで、ラブラブなんだってえのおお！！

でもここは謝っておくべきかな？ 夢の中で浮気してゴメンって。

心の中の佐藤君に心底謝りながら、私はのろのろとふとんから這い出すと、カーテンを開けた

。

風一つない、穏やかな朝だった。

おしまい

## カボチャパンツと謎の魔女

---

ど〜でもいいんだけど、こどこよ。

あ、私はわかる。鈴木さんちの綾ちゃん、高校二年生。

さっきまで自分の部屋で本を読んでいたんだよね。ファンタジー系ライトノベル。大好きな本で何度も読んでるの。今日は最後の方シリーズ三冊を、禁断の夜中の今川焼きに眠気覚ましの珈琲飲みながら読んでただけど……、

気が付いたら、目の前がお城ってこのシチュエーションは何？ 読んでいた本の影響モロ受けの夢？ なんて戸惑ってるうちに

「何者！」

兵隊さんがやってきた。なんてこったい。それにしても軍服って迫力あるわ。逃げた方がいいだろうか。うんにゃ！ 逃げる！

あたふたと両足を動かそうとしてもさもさするのに驚いたのなんのって！ ドレスよドレス。私がドレス！ こりゃ笑っちゃうわよ。しかも金髪よこの私が！ くるんくるんって、姫っぽい髪型してるよ。ドレスには色鮮やかなリボンもあちこちに結んであって、頭の上に手をやってみるとちょこんとティアラが乗っているのですよ！ てか、従者はいないの？ 従者は！ こんな格好してるんだから私はどこかの姫じゃないの！？

「待て！」

と言われて待つ馬鹿がどこにいる！ 走って逃げなくちゃ！ でも、足下がわさわさわさわさわさって、超歩きにくい！ 歩きにくいったら！！

「捕まえたぞ！」

「うわああ、みのがしてくれええ！ 何もしてないって！ あやしくないって、ほら、お姫様でしょ？ 私」

そう言うと、兵達は顔をしかめて、

「ではこれはなんだ」

って髪の毛を引っ張った。ぎゃあ、そんなにいきなり引っ張ったら痛……なくて、ずるりと金髪が落ちた。ティアラが、かち〜んって固い音を立てながら転がっていく……って、ズラかよ！

「その黒髪は、魔女か！」

魔女に間違えられましたよ、私。黒髪だと魔女って決まって……たわそう言えば。小説の中で。これはやばいと思いながら……ふと、手元のヘンな感触に気が付いた。

私、なにか持ってる。

おそろおそろ手元を見て、私は失神しそうになった。

なんじゃこりゃ〜！！ 赤と黄色のシマシマ！ さっきまで持ってなかったよな？ 持ってなかったと思いたい！

「そ、それは王子のパンツ！」

なぬ、パンツ！？ な～にが悲しゅうて、乙女が男の小汚いパンツを盗まねばならぬのだあ  
ああ！！

と思っている間に両脇をつかまれてずるずると引きずられるように連行された。

うっわ～～～～ん！！

この前神様を罵倒した罰が当たったんだわ。てかこういうときこそ神頼みよ！

「神様、助けてえええ！！」

……祈って祈って祈りまくったにもかかわらず、ただいま私は牢屋の中。

牢屋って寒いって言うより冷たいんだね。足下からしんしんと冷えるよ。全部石造りだし、腰掛けるベッドも石の上にワラがしいてあるだけって、あたしゃアルプスの少女ですか？ それなら相応においしいチーズとパンをごちそうになりたいわ。熱くてとろっとしたの。

ベッド、冷たい。彼女のベッドは干したふかふかのワラだよな？

てことはヤギあつかい？ なんだかもう、泣きたい。

「うわああああん、もうしませええん！」

ベそベそ泣いていると、鉄格子が開いた。

「出る」

出るわよ、一刻も早くここから出たいわよ。

連れられるままに石の冷たい階段を上り詰めると扉が。開いたその向こうは白い壁に赤い絨毯の廊下！ 美しい庭も拝見できる造り。

はう～、バラが咲き乱れる庭って、す、て、き。

その廊下の角を曲がって白い階段を上って、さらにずんずんと歩いていくと、まっ白な大きなドアの前。

「連れて参りました」

「入れ」

ドアが開かれて中に入ると、そこに何人もの軍人さんが立っていた。ひい！ 尋問ですか？ てかこの人達みんな仮面かぶっていて怖い。

「やあ、君なのか。謎の魔女というのは」

そこに立っていたのは、カボチャパンツの王子様だった。なんで王子ってわかったって？ そいつだけが仮面軍服じゃないからさ！

しかし王子様って恥ずかしい格好をしてるんだねえ。

「どういう目的でパンツを盗んだのだ？ 私の魅力についついというやつか？ たまにそういう輩がいるので困るのだがな」

はっはっは～って、笑う王子に私は呆然。すると、

「どうなんだ」

ムチ持ってる軍人さんが私のあごにそれを突きつけた。ひい！

「し、知るわけないでしょ？ いきなりあそこにいたんだから！ あれはたまたま道ばたに落ちてたのをひろっただけよ！」

と、言うておこう。

「やはりアヤシイ。拷問して吐かせますか？」

マジですよ、この人。目がマジ！ すると横にいた体格のいい人が、

「まあまあ。魔女なら多少の魔法が使えるでしょう？ それで探させたらいかがですか？」

「むりですそんなのできないし」

すると王子様ががっくりと床に突っ伏して泣いた。

「ああ、寝食惜しんで集めたコレクションが！」

は？ コレクション??

「王子はパンツをコレクションされていたのだ。全部で108枚」

煩惱の数ですね。

「それが全て何者かに奪われたのだ！！ 盗んだのはお前ではないのか！」

「ちがいますってば！」

怒鳴り返したその時、窓の外から私の足下にびしっと何かが飛んできた。な、なに？ おそろおそろそれを見下ろして、ぞおっとしたわよ。矢よ、矢。太くってりっぱで殺傷能力高そうな！ 当たらなくて良かった。

「ん？ なんだこれは」

その羽根の所に何か結びつけてあったのを、軍服さんがとってくるくと広げると、素早く目を走らせ、愕然とした様子。

「王子、パンツはやはり盗まれたようです」

はう？ そんな物好きな奴が？ 王子のパンツを集める趣味がある人とか??

すると王子はめちゃくちゃ悔しそうに顔を歪めた。

「やはりあの姫君か！ おのれ！！」

「姫君?? お姫様がパンツを盗んだの？」

「隣の国のお姫様、王子の婚約者なんですけど王子が気に入らないらしくていつもこんないたずらをされるのですよ」

その気持ちわかるわあ。ウザいもんこいつ。お姫様に大い同情していると、王子はワナワナと震えながら私を指さした。

「そこのお前！ 盗まれたパンツを探してまいれ！」

かくして、私は、王子のパンツ探す旅に出かけるのであった。

……といっても、道すがらあちこちに落ちていたから数えながら拾うだけ。全部種類が違うボ



ンノーカボチャパンツ。さっき拾ったのは金の刺繍がしてあった。無駄に王子にそっくりで笑ったわ。それらをお付きの兵隊さんが十枚束ねて持ち帰ってくれるからラクと言えばラクなんだけど……軍隊持ってるなら人海戦術で探した方が絶対早いわよ！ 全く女の子に何させるのよ！

さて次は、と思いながらある生き続けると、大きな湖があった。中央にぷか～って浮かんでいるのは、紛れもなくカボチャパンツ。

「あんなところ、どうやって取れっていうのよ！」

そう思っていると、カボチャパンツが向こうからやってきた。すう～っと水面を滑ってくる。そして、それは音もなく持ち上がり、というのか、立ち上がったお姉さんが持っていた。

「あなたが落としたのは、この金のカボチャパンツですか？ それとも銀のカボチャパンツですか？」

「違います。あなたが嫌そうに枝に引っかけて持ってる小汚いピンクに緑のシマシマのです」

「あなたは正直な方ですね」

お姉さんにうっとりされても困る。てか、お姉さんなんでこんなに近いの？ 腰に手え回してるの？

「いただいてもよろしくて？」

「な、なにを？」

「気持ちがきれいな人は、体もきれいって聞いたことがあるわ。頭から足の先まで、骨も残さずきれいに食べて、あ、げ、る」

……みるみる目の前のお姉さんが、化け物に代わっていく！ うわああん、半魚人！？ 口がねば～ってせまってくるううう！！

……うえ？

「神の裁きを！」

その声が聞こえると同時に目の前の半魚人が悲鳴を上げながら消え……た？

きょろきょろと声の主を探してみると、木の陰から杖をかざす銀髪長身の男と赤毛の男と普通の少年が出てきた。

あ、あれは！！

眼鏡で銀髪長身のヨガイン。旅をしながら悪い城主を退治して回ってる水戸のご老公のような神父様なんだけど、結構俗物。

赤毛のストラは、剛剣アレクサンドラの使い手の勇者で、幼き頃生き別れた兄を捜して旅をしているの。ヨガインと一回戦って意気投合してから、一緒に旅をしているんだよ。

そして主人公の足手まとい、もとい普通の少年クター。戦闘シーンになるとお姫様みたいにかばってもらって、「僕も、強くなりたい」って毎回のようによく言ってる元農夫の息子。

この三人が幻となったフェーン王国に行くっていうお話。クターの出生の秘密もそろそろ明らか

かになるってところで、2年くらい単行本出てないの。

つまり、私がここに来る前に読んでいた本の主人公達なのよ！！

「大丈夫ですか？ お嬢さん」

ヨガインが私に手を差し伸べてくれた。わ〜いと思った瞬間.....がっくり。

だって、カボチャパンツ王子とか仮面軍服とかはリアルだったのに、主人公三人組は、二次元で紙っぺらなんだもん！！ 太陽の光とかマジ透き通ってるんですけど！ とりあえず薄っぺらい手を取ってみる。破れそうで怖い。

でも彼等はそんなことはお構いなしだ。

「危ないところでしたね。ここはよく妖魔が出没する所なんですよ。.....それは？」

ヨガインが指を差す先に、小枝に引っかかったままのパンツがありました。

「ええ、盗まれたあれを探しているのですよ。ほほほほほ」

パンツとは言いたくなくて言葉を濁す。ぶはっつと吹き出すストラに蹴りかましたいのを必死で堪えながら、

「王子のご命令で」

と言ってみた。ヨガインはふむふむと頷いて、

「なるほどお困りのご様子、では私どもも一緒に参りましょう。ちょうど行き先も同じのようですし」

そう言ってこれから歩いていく道を指さすヨガイン。

ドキドキするよお。だって想像していたとおりの声優さんの声なんだもん。低くて甘い声。素敵。

「い、いいんですか？」

「はい。美しい女性のためとあらば」

お世辞でも紙でもうれしいわ。

ということで、ペラペラ美形二人とペラペラ少年と一緒にパンツを拾う旅に出た。

お付きの人？ もちろん着いてきているわよ。邪魔だけど。

そして道すがらパンツを拾いながらやってきました。隣の国の城の前まで。念願の108枚目は紋の前に落ちていたから、これで任務完了。

そっか、ここはあの気の毒なお姫様のお城かぁ.....と眺めていたら、お姫様がすっとなってきた。本物の姫君よ。可愛らしいふわふわのドレスでふわふわの髪の毛。あんな王子と結婚が決まっちゃってるなんてかわいそう。

「なんであんななのよ！！」

開口一番怒鳴られた。は??

「王子様のご命令で.....」

「また来なかったのね。王子のいくじなし！」

キーキー怒るお姫様に、私は乾いた笑いが止まらなかった。この姫様、あの王子をおびき寄せ

るためにこんなことしたんだ。なんだ、仲いいんじゃない。

「よくも笑ったわね！ やっておしまい！」

姫様の命令で、兵隊さん達がやってきて、私たちに斬りかかった。きゃあ！！ こ、こんなときこそヨガインの魔法よ！ と思っていたら、ヨガイン、既に切り捨てられていた。

「うわああ！」

勇者ストラもクターも、さくさく切られてまっぷたつ！ 紙の三人はひらひらと地面に伏した。な、なんてもったいないことを！！ 切れちゃったとはいえ等身大の三人組！ 持って帰ってセロハンテープで直して壁に貼るわ！

なんて言っている場合ではなかった。

「最後はあんたよ！」

じりじりと、兵隊さんに包囲される私。こ、これはやばい。目が覚めればきっとベッドにいるんだろうけど、でも痛いのはやだああ！

「ちょっとまちなさい！」

って……王子だ。カボチャパンツ王子が白馬の張りぼてに乗ってやってきた！ 馬くらいちゃんと乗れるようにしておきなさいよ馬鹿王子！

王子は颯爽と走って現れ、うんとこしょと張りぼてから降りると、姫の前に跪き、

「この者を許してやってください。私が命じたのです」

と彼女の手を取り、そこにキスをした。

「だ、だって！ あなたが来てくれると思って」

「姫の心がわからなかった私の罪です。姫、愛してます」

うっわあ……。カボチャパンツさえはいてなければすっごくいいシーンね。でもその後の姫の平手打ちが、見事に決まっていい音がしたけど。

「で、この女はなに？ 魔女？」

「そうですが」

「魔女は火あぶりよね？」

「そうですね」

こらこら～、そこの二人い。納得しないように～。

「この者を火あぶりにしろ」

「ちょ、ちょっとまちなさいよ！ あんたの108枚拾ってあげたのは私でしょ！？ 恩人じゃないの！！」

「問答無用！！」

兵隊さん達に囲まれて、アッチこっちつかまれ、ちょ、まてよ、ぐきって、今首がぐきって！

！

.....は！

なんだ、あのまま寝ちゃったんだ。

机の上に突っ伏してたから、首が痛いわ。

なんだか夢を見ていたような気がしたけど.....まあいいや。

うん、と、体を伸ばして立ち上がる。おお、体のあちこちがなんだか疲労感たっぷり。

しまった、さっき読んでいた本、枕にしちゃった.....ってええええええ！！

見事にカバーが破れている。まっぴたつ。横一列に並んで仲よさげなかんじのいいイラストだったのに！　なんで？？　私そんなに寝相が悪かったの？　ショックのあまりよろめいてしまった。

「ごめんね」

セロハンテープでくっつけて、両手を合わせて謝って本を書棚へ戻し、ベッドに入った。

その翌月、待望の新刊が出た。読んでみると話の核心に迫る部分はなかったものの、カボチャパンツ愛好家王子と謎の魔女のかけあいが面白かったんだ。

なんでか、もんのすごくデジャブったけどね。

おしまい

## BUN-BORG ～Fight with Stationary～

---

「おっとここで、桜居君のランスが炸裂、柏木君の盾にひびを入れたー！」

アナウンサーの実況が満員の観客席にこだまする。

円形のフィールド中央、白魔導士のローブにマント姿、荒い息づかいで立ち尽くしていた柏木は、白銀に輝くブレードを握り直す。対して、特撮ヒーロー然とした桜居は低い姿勢を保ちながら、赤いラインが美しい漆黒のランスを構える。

すでに試合が始まって三十分。双方精神的にも体力的にも限界を迎えていた。

「いけ！ 柏木！」

「ぶちかませ、桜居！」

耳をつんざく観客の声が沸き立つ。

先に柏木が動いた。

ブレードを上段にかまえて桜居の頭部をめがけ振り下ろす。桜居はそれを巧みに避けつつ、

「うおーっ！」

叫び声を上げながらランスを柏木の右肩に突き立てた。

一瞬の静寂の後、

「SAKURAI WIN」

機械的な女性の声と共にアナウンサーが絶叫した。

「きまったー！！ 試合終了ー！ BUN-BORGチャンピオンシップノース予選優勝、本選への切符を手に入れたのは、桜居将真君！」

モニターに「WINNER SAKURAI」の文字と観客が放つ色とりどりの祝辞を述べる文字と花火が夜空に浮かび、満面の笑みを浮かべる予選の優勝者を祝った。

フィールド中央では、勝った桜居がまだ膝をついている柏木に手を貸し立ち上がらせると、笑顔で声援に応え手を振る。

片隅でその様子を見ていた善司は、優勝した級友に背を向け仮想空間から落ちた。

ネットが発達しスマホが一人一台当たり前の勢いで伸びる今でも、文房具を持っていない学生はいない。

そこに目をつけたゲームメーカーだった。

今や世界中の学生を虜にしている BUN-BORGは、文房具を武器にネット上の仮想空間でバトルするゲームだ。

まずペンケースをスキャン。中身の文房具はデータベースに照会した後、使

用感も加味され古今東西の武器からその文房具に合ったものが選別される。

予選では桜居のコンパスがランスに、柏木のシャープペンがブレードになった。ペンケースがスチール製なら防御重視の甲冑や鎧に、革製なら機動性が上がるレザーアーマーというように防具となる。桜居のペンケースはスピード重視のエナメル製。特撮ヒーローのスーツのように体にフィットした防具になる。柏木のローブは布製で若干HPが増える。ペンケースのデザインはできる限り反映されるため、桜居の胸にはスポーツメーカーのロゴが貼り付いていた。武具、防具共に多種多様であるため選別が戦略の鍵となる。

低迷していた文房具業界はデータベースを提供する見返りに、ゲームで照会されたデータに基づきニーズにあった製品を作るようになった。最近ではBUN-BORG初心者向けに専用のペンや定規のセットが発売したり攻略本を製作することでかなりの利益を上げている。

老若男女、誰もが楽しむゲームのチャンピオンシップ予選は、1万を超える観客がそれぞれの端末から見守った。

明日のニュースはこの話題がトップを飾ることになるだろう。かくしてそうになった。

「すごいね、桜居君！」

スマホでゲームニュースを読んでいた菅山綺羅璃は、朝から居眠りする雲井善司をつついた。

「私もやりたい！ ねえいっしょにやらない？」

「やらねえ。ダリいし」

「ええ～？ やろうよお」

綺羅璃はむくれながら居眠りを続けようとする善司の体を揺すった。

「おはよう、菅山さん」

顔を上げると昨日の優勝者が微笑んでいた。

「桜居君！ 優勝おめでとう！」

綺羅璃は自分のことのようにうれしそうにスマホをかざした。その記事を見た桜居は照れくさそうに微笑んだ。

「ありがとう。本選もがんばるよ」

桜居は善司を見るとにっこり笑い自分の席へと戻っていった。善司も手を少しだけ上げてそれに答えるだけで、声すらかけなかった。その様子に綺羅璃はぷくっと頬をふくらませた。

「善司はおめでとうって言ってあげないの？」

むくれる綺羅璃を無視して桜居を目で追えば、あっという間に人垣が出来た。昨日の優勝の興奮のまま桜居にペンケースを見せてアドバイスを求める奴までいる。

「桜居、次の対戦相手強そうなんだけど、なにか対策ある？」

「大事な対戦なら初めての武器は避けた方がいいよ。それから……」

真剣に相談に乗っている桜居はさぞ頼もしく見えるのだろう。綺羅璃もその輪の中に入って行く。

善司の口元が嘲笑うように少し上がった。

放課後。

善司は駅のトイレで私服に着替えると、ロッカーに制服と鞆を押し込んだ。夜勤で帰ってこない母親から夕飯用に渡された金で駅前の牛丼屋の並盛りをかき込む。店を出ると少し歩いて路地裏のビルに足を踏み入れた。一步一步階段を下がる度に都会の喧噪は聞こえなくなり自分の足音だけが存在を誇張してくる。開店前のバーやスナックのドアが並ぶ地下一階の静かな通路を歩き、一番奥にある鉄製の重厚な扉を開けて中にすべり込んだ。そしてもう一つ木製の扉をゆっくりと開けば、煙草とピアノの音が彼を日常から大人の世界に誘う。最低限のライトとアールデコ調のランプのやわらかな明かりがカウンターにいるマスターと客を照らしている。さほど広くない店の奥に設置された漆黒のグランドピアノで、緑色のチャイナドレスを着た女性がゆるやかなジャズを奏でていたが、善司がスツールに座ると同時に曲にピリオドを打った彼女は、ゆっくりと善司に歩み寄った。

「クラウド、いらっしゃい」

甘い声で善司の耳元に囁くと、彼の腰に手を回すと頬にキスした。深く入ったスリットから伸びる白い足を彼の左足に少し絡めてとろけるような笑顔を向けた。善司は香水とアルコールの吐息に軽いめまいを感じていると、先客の大柄の男がゆっくりと煙草を燻らせながら笑った。

「よう、昨日の決勝すごかったな。なんでお前、予選出なかったんだ？」

今朝からその話ばかりだ。善司は辟易していた。

「ガキの遊びなんかやるかよ」

苦笑する彼の前に白いコースターが置かれ、美しく塩の結晶が飾られたグラスにシェイカーから白濁した液体が注がれた。見た目はソルティドッグだ。グラスの塩をなめながら飲んでみれば、よく冷えた塩辛いグレープフルーツジュースだった。

「ガキだろうが」

子ども扱いされた善司はむっとしながらもグラスを傾けた。

「オーカー。あんまりクラウドをいじめないで。かわいそうよ」

「ライム、離せ」

善司は彼女の名前を呼び首に回された腕を叩いて放せと合図した。

「あら、今日のご機嫌斜めなのね」

ライムは手を離すとマスターからジンライムを受け取った。きらりと光るネ

イルを見ていると、オーカーが善司の肩に手を回した。

「そういえば、今日のデュエル何かあるのか？ お前のオッズ、跳ね上がってるぞ」

俺もお前に賭けてるんだとオーカーが笑った。

「相手はローシェンナじゃないだろうな。あんなのとやるのはごめんだ」

先週のデュエルで無様なデュエルをした青年の名前を口にすると、オーカーもライムも含み笑いをした。

「いいや。オーキッドってヤツ。お前をご指名だと。ガキだって見破られたんじゃないかねえか？」

「まさか」

善司は苦笑するしかなかった。

BUN-BORGを楽しんでいるのは子どもだけではない。

表のバトルに対して、裏で秘密裏に大人が楽しむBUN-BORGはデュエルと呼ばれる。デュエルには試合ごとに金を賭けられ、一攫千金を狙う大人達が集う。

デュエル参加者は勝てば賭けられた総額の一割が手に入る。

表同様全身をスキャンするため顔もそのまま反映されるが、表とは違いここでは顔を隠すのが常識だ。必ず本名で参加するよう義務づけられている表とは違い、デュエルではお互いを色に関連した名前呼び合う。万が一、本名や顔を知ったとしても双方の世界に持ち込むことは禁止されている。

9時10分前、マスターが店の内側から鍵をかけると、レンガの壁一面に白いスクリーンを下げた。瞬時に全国どこからでもアクセスできる仮想空間のコロッセオが映し出される。既に千人もの観客が待機しているらしい。数字を見て今日の観客の多さに驚いた。

オーカーが店の奥に消えた。やがてスクリーンに戦国武将姿の男が映し出された。顔は仮面で確認できないが、画面の表示でオーカーということがわかる。

彼は腰の日本刀をすらりと抜いて両手でかまえた。相手はタバルジンというインドの戦闘用の斧をかまえている。スチールメイル姿の相手がオーカーににじり寄る。オーカーは限界まで引きつけるつもりなのか微動だにしない。やがて相手のタバルジンがオーカーの左肩口に振り下ろされた。オーカーがその柄に日本刀を食い込ませる。

歓声はない。武器のぶつかり合う音と、オーカーと相手の息づかいだけが聞こえてくる。表のバトルと違い、デュエルは静かだ。

オーカーがいきなり相手の後ろに回った。急な攻撃に対応できずにいる相手を後ろから突き上げると、相手はそのままの形で倒れた。瞬時にオーカーの勝利が画面に表示されるのと同時に配当金の知らせが表示され、デュエルは終わった。



しばらくしてオーカーが戻ってきた。汗を手でぬぐいながらカウンターにいるマスターに向かって、

「マスター、ビール」

注文をしながらすれ違う善司の肩を叩いた。

店の奥にあるそれは西洋の棺桶の形をしている。マスターが特注したデュエル専用の装置なのだが、善司は毎回のようにマスターの悪趣味に苦笑する。横に置かれた黒光りする小さな台の上にペンケースを置いてスキャン。棺桶のスリットにエントリーカードを差し込み開いたままの棺桶に寝転がる。微かにオーカーの汗の臭いがして眉をひそめる間に自動で蓋が閉まり、全身のスキャンが終わった。

目の前の小さなスクリーンに映されていたコロッセオに『WELCOME』の文字が浮かび上がる。目を閉じ、そして再び開けるとギリシャにあるコロッセオを模した仮想空間にいた。文字とシルエットのみで表示されたたくさんの観客を仰ぎ見、目を落として手にした武器を見る。愛用のボールペンから変化したクレイモアという諸刃の剣。刀身に刻まれたメーカー名を確かめるように握りしめ、どう攻めるかをシミュレーションしていたその時、

「今日はよろしく」

聞き覚えがある声が出た。絶対にここでは聞かないはずの声だ。まさかと顔を上げた善司は相手の姿に目を見張った。そして今日のオッズが急上昇した訳を理解した。見覚えがあるスポーツメーカーのロゴ。昨日の試合で予選を勝ち抜いた級友は優雅にフェイスマスクを上げ、デュエルに似つかわしくない爽やかな笑顔。

「初めまして、クラウドくん。今日は存分に戦おう」

ノース予選チャンプの桜居将真の登場したのだ。観客達は静かに興奮しているようで、掛け金が更に上がっていく。

「本選前の腕試しか？ さ」

名前を言いそうになり、思わず口をつぐむ善司を桜居は鼻で笑った。

「オーキッドだ。ここはリアルを持ち込んじゃいけないんだろ？ ゼンジクン」

桜居は右手で自分の武器を持ち上げた。BUN-BORGでは個人の身体能力は反映されないが、武器の大きさは攻撃力と機動力に加味される。大きなハンマーは、破壊力はあるが動作が鈍くなる。桜居は重そうにハンマーを持ち上げ、善司に振り下ろす。善司はハンマーの頭をコンマ五秒でよけた。そのままハンマーは地面に激突。振動でふらつく善司の動向を見ながら桜居はゆっくりとハンマーを持ち上げた。その跡にはピンクの肉球が刻まれていた。

「思ったよりいいなあ、ハンコって」

楽しそうに桜居が呟く隙を突き、上段から袈裟懸けに斬りにかかるが、桜居

のハンマーの柄でふさがれた。ぎりぎり金属がこすれ、嫌な音をさせる。

善司を思い切り押し後方へ跳び、その反動を利用して桜居と間合いを詰めて切りつけた。HPが少し削られ、桜居から余裕の表情が消えた。

「てんめええ！」

桜居は叫びながら、両手でハンマーを善司の左側部に振り下ろす。地面を叩く轟音ととんでもない衝撃で体が吹き飛ばされ、武器が手から離れた。咄嗟に視界の右端にあるゲージを確認、HPは残り50%。クレイモアがはじかれ回転しながら場外へ飛ばされていく。場外に飛ばされた武器は使えない。右手を握り次の武器を出して善司は驚愕した。それは全長20センチくらいの警棒のようなものだった。こんなものを入れたか覚えがない善司は焦った。

「なにそれ。もしかして試合放棄？」

片手で武器を探っていると警棒に小さなスイッチがついているのを見つけた。善司は、強く警棒を握りしめると体制を低くして桜居の懐に飛び込んだ。

「え？」

戸惑う桜居のハンマーの下に潜り込み、手元のスイッチを押した。ブン、という音と共に警棒から光の剣が伸び、桜居の腹部に突き刺さった。桜居はその衝撃に奥歯をかみしめ体勢を立て直そうとした瞬間、善司はすかさず光の剣を抜いてもう一度切りつけた。絶叫と共に桜居のHPが0になった。

静かに、「CLAUD WIN」の文字と配当金が画面に表示され、善司は安堵のため息をついた。桜居はゆらりと立ち上がると握手を求めるように手を伸ばした。

「強いんだな」

「もう来るな。お前のいるべき場所はこちらじゃないだろ」

手を取ろうとしない善司に何か言いたげに口を少し開いたまま、桜居はリアルに戻っていった。

カプセルが開くとオーカーの煙草の匂いとゆったりとしたジャズのリズムが善司を安堵させた。ペンケースを掴んでカウンターに戻ると、中からちびた鉛筆を取り出した。蛍光緑の半透明キャップをしていなければ使うことさえ困難なそれは、父親が小学校入学する時に買ってくれた鉛筆だ。たまたま入れたこれに助けられるとは……善司は苦笑した。

オーカーはビール片手に善司の隣に座るなり、真面目な顔で聞いてきた。

「さっきオーキッドと話してただろ？ ノース予選チャンプと知り合いか？」

「別に」

善司の前にビールとジンジャーエールをステアしたグラスが登場した。シャندي・ガフ。狂犬のよだれという名のカクテルだ。泡がランプのほのかな明かりに輝き、ビールの香りに味を期待しながら一口飲んで、ため息をついた。ノンアルコールビールで作られたそれは香りだけはよかった。

「マスター」

善司の恨めしそうな声に、マスターはグラスをきゅっと一拭きをした。

「リアルで稼いで来たら飲ませてやるよ、坊や。……そうだ」

マスターは振り返り、棚の引き出しから一通の封筒を出した。

「君宛てだ」

渡された封筒の差出人は離れて暮らす善司の父だ。家に出せば母が善司に渡さない可能性を考えてこの店に出したのだろう。鉛筆のこともあり見覚えのある筆跡に頬がゆるんだが、封筒の中身を確認すると顔が引きつった。父を知るライムとオーカーも手元をのぞき込む。

「これ、サウス予選の参加申込書よね？」

「本選まで上がってこいってことだ。がんばれよ。現全国チャンピオンJr.」

肘でつついてくる二人に苛立ちを覚えながら善司はシャンディ・ガフもどきを一气飲みした。

「絶対嫌だ」

## ペンは剣になり強し

---

それは私の平凡な人生の中でひとつだけ輝く非現実。

その秘密を守るためなら親も友達も騙す。

ひとり暮らしで何が大変かって、自分を律するということじゃないかしら。だって休みの日なんて好きなときに起きて好きなときに食べて寝られるんだから。それなのにいつもの時間に目が覚めるなんて。スマホを見るとメール着信のお知らせ。どうせ広告だろうと思って開いてみたら、学生時代からの友達からだった。

『おはよう。』

今日は何か用事ある？

ないなら会わない？

あげたいものがあるんだ。

返事待ってるね』

という内容が、絵文字でデコられ、日本語とは思えない意味不明な言語で送られてきていた。内容がわかってよかった。小さい文字多用するなよと心の中で悪態をつきつつベッドの中で考える。

それまで仕事が忙しいなんて適当な理由をつけて誘いを断り続けていたから、そろそろ会っておいた方がいいかな。忘れられそう。

『わかった。』

じゃあ、いつものところで』

明確で明瞭で簡潔な返事を返したら、まだデコデコした『わかった〜』という内容のメールが返されてきた。

適当な化粧品に適当におしゃれして、いつもの待ち合わせのイートイン付きのケーキ屋に向かう。

途中の電車の中でスマホから例のサイトにインして今夜の予約をする。今日はどんな人と会えるかななんて思いながら揺れる電車の中吊り広告でBUN-BORGの宣伝を見つけた。きらびやかな文字が躍り、ゲーム内のキャラクターの装備をしたアイドルがポーズを決めている。露出度が高い装備。防御力ってどうなのかな。なんて考えていたら目的の駅に到着。早速待ち合わせ場所に向かう。学生の頃からなじみの店で、ケーキと紅茶でけっこうな値段がするけど、ケーキがすごく大きくて食べ応えがあるんだ。店の中に入ってはみたけど、まだ彼女は到着していないようだ。席に座ってメニューを丹念に眺めてから、今一番人気でトロピカルなフルーツをふんだんに使った涼しげなケーキを注文した。

直後、彼女が到着。彼女は紅茶だけを頼んで席に座った。

「久しぶり！ 元気だった？」

「うん、まあまあね。そっちは？」

「元気だよ」

ひとしきりの生存報告をして、世間話をして、注文したケーキが到着した頃、彼女は、

「そうだ、これ」

ベージュの高そうなバッグからいそいそと細長い紙袋を取り出した。なに？ もったいつけてこんな安そうな物？

「旅行に行った先でひとめぼれしたんだ」

受け取ってセロハンテープを剥がして袋の中身を確認した私は、その場で固まってしまった。そういえばこの袋はあの店の物だ。動揺を隠しながらそれを取り出してみる。

普段の私ならこれを選ぶとはさすがだと盛大に褒め讃えたかったんだけど……、正直、彼女が『それ』を『私』にくれるとは思ってもいなかった。

「この文字が面白くて買っちゃったんだ」

それはピンク色の鉛筆で、金色の文字がお店のライトに照らされてキラキラとかがやいていている。『いつかアレ用に買ってやる』と心に決めていた一品。うれしい。でも、

「あれ？ はずした？」

固まったままそれを凝視している私に、彼女は首をかしげるので、盛大に横に振って、「ありがとう！ もったいなくて使えないかも」

ちょっと口元が引きつってしまったかもしれないけど、思い切りの笑顔で受け取った。

「よかった。今時鉛筆を使うってことないかもしれないけどね」

彼女はそう言いつつ紅茶を一口。それから最近付き合ってる彼氏の話をしはじめた。他愛もない話に相づちを打ってはみたけど、鼓動は激しく打ち冷や汗もでてきて、久しぶりの楽しい時間なのに、めちゃくちゃケーキは美味しかったのに！

まさかとは思いますが、私がアレにはまってるって知ってる??

そんなわけ、ないよ。ね？

彼女と笑顔で別れた後、私は第2の目的の店に向かった。

実は今、BUN-BORGというゲームにはまっている。

スマホのゲームではなく、お店でやるゲームだ。ゲーセン等においてある全身をスキャンして、自分が仮想空間で戦うという奴。女の人にはちと敷居が高いけど、面白くてやめられない。

その時、武器と防具となるのが、手持ちの文房具なのだ。

鉛筆やシャープペンが剣に、ペンケースが防具になる。それを選ぶのがすごく面白い。

たまに伝説の武器とやらも出てくる。海神ポセイドンが持っている三つ叉の武器、えっと、トライデントだっけ？ シャープペンがそれになってでたときはビックリしたなあ。

そうそう、BUN-BORGには二種類あって、ゲーセンでやる表のバトルと、大人が戦闘にお金をかけて楽しむ裏のデュエルというのがある。

表のバトルは子どもからお年寄りまで老若男女問わず遊べるものだが、裏は違う。戦いにはお金を掛けられる。そしてデュエリストと呼ばれるプレイヤーは表みたいに本名じゃなくて偽名を使う。誰が誰だかわからないスリルもあるんだよ。でもデュエルのことは公然の秘密なのだ。

BUN-BORG自体には前から興味はあったけど、いい大人がゲームセンターに出入りするの...  
...いや、そういう人もいるけどさ。ちょっとそういうのに抵抗があったんだよね。

そんなとき同僚とその彼氏と飲んでたら、その彼氏がすごく嬉しそうにデュエルの話をしてくれたんだ。BUN-BORGの裏があるなんておもしろいなあって思って、誘われるままにやってみたら、ものすごく楽しくてやめられなくなった。

仕事でやなことがあっても戦うとすっきりするんだ。勝てばお金が入るし。

まあ言っちゃえば、私は、裏世界で言うところの、誇り高きデュエリスト（笑）なのだ。

衣装と武器を替えまくってるアイドル気取りのライムや、バカみたいに固くて強いオーカーみたいな人気者じゃないから、オッズが伸びなくて金額はそこそこだけだね。

その夜、私は新しい装備を試してみることにした。

行きつけのバーに行くと、「あら、いらっしゃい」と着物を着たママさんが出迎えてくれる。

「ママさん、今日もいいかな？」

離婚したご主人が残していったというBUN-BORGの装置がある店の奥を指さすと、ママさんは笑いながら、

「どうぞ」

と案内してくれた。BUN-BORGって、バーとかキャバレーとか、お酒を飲むところに置いてあることが多いんだよね、きっとBUN-BORGの営業さんは、お酒が好きだったんだろうなあ。……なんてどうでもいいことを考えつつ、奥にある装置の前に立つ。

そして、私なりの儀式。

「今日もよろしくね」

装置をひとりでして、まずはペンケースをスキャン。その次にBUN-BORGの椅子に座って装置を起動させてもらって、全身をスキャン。

タイトルロゴが出るのと同時に目を閉じて、……目を開ける。

真っ青な空に、白くざらりとした石造りの壁。乾いた地面からぶわっと土埃が舞い上がった。いつも通り、コロッセオを模したデュエル会場は、賑やかに満員御礼。観客の興奮が乱れ飛ぶ文字で伝わってくる。

バトルの方では標準装備の歓声はない。嘘でも出してくれればもっと盛り上がるのに。

そう思っていると、対戦相手が現れた。ああ……なんだ。こいつか。いけ好かないシルバーの甲冑彼の名前はそのままシルバー。何度か対戦したことがある相手だけど、ねちっこいから嫌なんだよね。

「のんびりな人ですね。そろそろ武器を出したらどうですか？」

いらつかせたかな？

「ああはいはい」

右手を軽く握って、武器を出す。

ああ……すごい。初っぱなから出てくれた。

胸の奥が焼け付くよう。呼吸が浅くなる。この高揚感がたまらない。

ゾクゾクする。

右手にピンクに輝く一振りの剣。

刀身に刻まれた金色の文字は、【ペンは剣よりも強し】

「始めましょうか」

両手でしっかり握りしめ、一步踏み出す。

レイピアが右を突き刺そうとする。

防御。

分度器が変化した半透明の盾に掠って軽い衝撃。

あ、そうだ、今度この剣、撮って送ってみよう。

「もらった鉛筆がこんなに素敵な剣になったんだよ」

って教えたら、ビックリするだろうな！

さて。お遊びはここまで。さあ反撃。

思う存分切り刻んでやる。何度も何度も何度も何度も！

「あは、あははははははは！！！」

笑いが止まらない。

ああ……、楽しみ。

とっておきの装備を写メして彼女に送ってみた。

しばらくして彼女から返信されたメールには、写真が添付されていた。どうせリア充を自慢するんだろうと思って開いた私は、スマホを落としそうになった。

広大な大草原のど真ん中に、私よりも上位ランクの甲冑を身に纏った彼女が立っていた。

大地に突き刺した細身の剣には、見慣れた金文字が刻まれていた。

会社命令とは言え、これはきつい。

装置の搬入が終わってまもなく続々と集まってきた20名のじいさん達は、設置された大型モニターやその脇の2台の全身スキャンシステムをしげしげと眺めつつコードに足を引っ掛けながらウロウロ歩き、賑やかに話をし始めた。大型モニターの裏にある端末で俺と部下の荻谷とセッティングを急いでいる俺達の所にも声が届いてきた。聞き耳を立ててみると、

「デバッグなんざ若い頃散々やったもんさあ」

「俺も昔はネトゲにはまって何時間もやったっけなあ」

じいさんとはいえ、.....筋金入りのゲーマー集団だった。

時間になると俺達はモニターの前に並び、自信ありげに睨み付けてくるじいさん達20名プラス付き添いの人たちに深々と頭を下げた。

「この度は我が社、SAMAYAが開発中の文房具を使った全く新しい体感ゲーム、BUN-BORGのテストモニターとしてお集まり頂きまして、誠にありがとうございます」

ハリのある声で営業の大崎がマイクに向かって話をした。

このテストモニターというやつは、10代前半後半、20～30代、40～60代、それ以上にやってもらっている。今日はそれ以上の皆さまにお越し頂いたわけだ。

俺はさあ、こんなところでチェックするよりも、帰って少しでも遅れを取り戻したいんだよね。それなのに社の命令だからってこんなところにかり出された。営業恨むぞ。

「是非率直なご意見を伺いたく思います。よろしくお願いします。ゲームの内容については今から青山がご説明いたします」

げっ、やっぱ俺かよ。

ふうふうう～、落ち着け落ち着け。

なにちょっとゲームをやってもらうだけ。そのデータを取って今日はおしまい。

ああ～息子そろそろ誕生日だなあ。プレゼント高いのねだられるんだろうなあ。

.....ってトリップしている場合じゃねえよ。

「ちゃーんと説明が出来るのだろうか？ 若造」

びしっとじいさんが立ち上がって俺を指さした。首から提げた名札は園枝さん。ええそりゃもう。俺は大崎に変わってマイクを持った。出来る限りにこやかに。

「えー、SEの青山と申します。まずはこちらの資料をご覧ください」

ゲームの骨子をわかりやすく説明した物だ。これを作るのに昨日は残業だったんだぞ？ もちろん年配者向けにわかりやすく、

「こんな字のこまけえのが読めるかあ！」

となりのポロシャツ着た禿頭のじいちゃんがせっかく俺が徹夜繰り返して作ってきた渾身の力作資料を投.....げやがってこん畜生！

しかしお客様になるかもしれない御仁だ。更に笑顔を貼り付けた。



「このBUN-BORGというゲームは、みなさんが普段ご使用されている文房具をゲームの中で武器に変化させて戦うアクションゲームです。みなさんには先日のお便りで普段お使いの文房具とペンケースをお持ち頂くようお願いいたしました」

「それなら持って来たぞ」

合いの手かよというタイミングでじいちゃんの一人が手を上げた。よかった。これがないと話にならないからな。

「どなたか、最初にやってみて頂けませんか？ できればお二人で」

すると園枝さんがペンケースを掲げて勢いよく立ち上がった。

「なら俺らがやる。他にいないか？ 二人と言わず何人でも相手になるぞ！」

何言い出すんだこの人は！

「申し訳ありません。定員は二名です」

あからさまに園枝さんは不機嫌になった。

「なんだと？ 昔のゲームだって大人数で参加できただろ！？」

そりゃ今でもそうですよ？ 10人20人で一つのミッションをクリアするのは主流ですがね？

「このゲームは老若男女どなたでも安心してご参加頂けるシンプルな作りになっておりまして」

営業の大崎が口をはさんできた。

「以前取らせて頂いたアンケートで、お孫さんと一対一でチャンバラやヒーローごっこをされたいと思っている方が5名いらっしゃいました。そのうち、『真剣勝負は怪我の心配があることから実際には難しい』と書かれた方が3名、『実際にやってみて楽しかった』と書かれた方は2名でした。このゲームでは身体能力は反映されません。安全に真剣勝負をしていただけます。ゆくゆくは全国のゲームセンターからアクセスできるようにして、遠くにいるお孫さんやご兄弟と対戦することも可能となります。老若男女、運動が苦手な方でもチャンバラを楽しむことができます。それを可能にしたのがBUN-BORGなのです」

ほほ～と感嘆の声が上がる。今なら聞いてくれるな。

「一対一に意味があるのです。昔で言う……巖流島の佐々木小次郎と宮本武蔵のように、正々堂々と」

用意してきた台詞は響いたようだ。園枝さんがさっきと打って変わってすごい笑顔で、

「わかった！ それでどうすればいい？」

大きな声を張り上げる。俺はこれ幸いと続けた。

「まずはこの四角い装置の上におきまして、ペンケースとその中身をスキャンします。そして、こちらの大きなスキャンシステムの中に寝転がって頂き、全身スキャンをして頂きます」

「なんじゃそれは！」

げらげらと笑う耳障りなじい共の声を馬耳東風で右から左に受け流し、スキャンシステムの説明を続けた。

「これは画面にみなさんの顔や体格をそのまま映すための物です」

「全身スキャンって、何回もやったら体に影響が出るとか、そういうことはないんだらうな！」

「大丈夫です。人体に影響が出るようなことはありません。詳しくはお手元の資料をご覧ください」

ざわついているけど続けるしかないな。

「じゃあ園枝さん、どうぞ」

「お、おう」

園枝さんはおそろおそろスキャナの上に革製の筆箱を置いてくれた。

「もうお一方、チャレンジされる方はいらっしゃいませんか？」

大崎の言葉に、

「ならば私が」

スーツをびしっと着こなし、杖をついた老紳士が立ち上がった。名札を確認。三木島さんというらしい。横にいる中学生くらいの女の子がすごく心配そうな顔で三木島さんを見上げた。

「おじいちゃん、やっぱりやめようよ！」

「なに、大丈夫だよ」

「だってこの前まで」

もめてる二人を見ていた園枝さんが目を丸くして三木島さんに歩み寄った。

「三木島さん、三木島さんじゃないか！ 最近ネットで見ないからどうしたかと思ったよ」

「おひさしぶりです。園枝さん。少し体調を崩して入院をしていました。今日は宜しく」

三木島さんには営業が付いてくれてスキャナの上に木製のケースを置いてくれた。これでスキャンした文房具のデータベースに照会、その後スキャンした文房具に見合った武器や防具を選別するはず。なのに、時間がかかるなあ。裏でモニターしてる荻谷を見に行くと、モニター前で唸っていた。

「どうした？」

「だめです！ 全然ヒットしません！」

「なんだって！？」

慌てて戻って園枝さんの手元にある筆箱をつかんだ。

「すみません、筆箱を拝見してもよろしいでしょうか？」

「かまわんが」

だんだん不機嫌になっていく園枝さんのイライラが波のように伝わってくる。手にした問題の筆箱をよく見て驚いた。きれいには出来ているが、紙製だ。

「どなたかの……お手製ですか？」

「ばあさんからもらったものだ」

園枝さんが鼻高々に言う。手作りかよ！ そりゃ文房具のデータベースにはないわ。まあいい。防具は似たような奴を出してやれば。問題は中身だ。蓋を開けて見れば、折りたたみナイフと鉛筆と消しゴムだけか。鉛筆なら問題ないだろうが、この折りたたみナイフ……。

「あの、これは」

「肥後守をしらんのか？」

「……鉛筆削り用の折りたたみナイフって肥後守というんですか」

「文房具で一山当てようって奴がなんたる無知！」

うわ～、お怒り最高潮。今時折りたたみナイフを筆箱に入れている人がいるなんて思わなかった。

「なつかしいなあ。親父が使ってるのを見たことあるぞ！」

「物持ちがいいんですね」

モニターのじいさんたちが食いついてくれてちょっと機嫌を直している間に俺は裏に回った。

「貸せ」

端末をいじってとにかく似たような武器を探す。もっと検索の幅を広げた方がいい。もーっと曖昧に選べるようにしなくては。

「いいんですかあ？ かってにやって。課長が怒りますよお？」

のんびりとした物言いの部下に、

「るせえ！ お前ももう一人の方行ってこい！」

と怒鳴って行かせる。三木島さんもやはり読み込めないでいた。戻ってきた部下が真っ青な顔で駆け込んできた。

「青山さん、こんなものが入ってました！」

マジかよ。木製のペンケースの中に小さなインクつぼと美しいガラスペンが一本。さすが老紳士。表で少しがっかりした声が聞こえてきた。

「やはり市販されている物でなければいけませんでしたかね？ 長年使ってきた物なのですが……」

「いえ、大丈夫です。今調整しておりますのでしばらくお待ちください」

営業が対応しているうちに手と頭を動かさず自分。全ての文房具をカバーできなければこのゲームは完成しない。製品になってから想定外だとは言えない。

思えば10代とか20代とかはちゃんと既存のものを持って来てくれていたから楽にヒットしたし、30代40代も働き盛りってこともあって、愛用のボールペンとかだったから、フツーにヒットしたもんなあ。

まったくよう、ゲームすんのに骨董品持ってくんなああああ！

二十分かけた調整を終えてスキャンをした結果、ちゃんと武器と防具がヒットした。

ふい～。

「先輩お疲れ様です」

ペットボトルを差し入れてくれた部下に感謝しつつキャップを開ける。

「ああ、ホント疲れたわ～。あとやってくれるよな？」

「はい。今入ってもらうようお願いして……あれ？」

見れば園枝さんが渋い顔で全身スキャンシステムの前に立ち尽くしている。

「どうしたんですか？ 何か問題でも？」

「そ、それが……」

うろたえる営業が報告する前に、園枝さんが口を開いた。

「これ本当に大丈夫なんだろうな？」

「はい、もちろんです。安全性は確認しています。自分もやってみましたがなかなか面白いですよ？」

猫なで声で答えてみたが、彼の不安はぬぐえないらしい。

「これ棺桶にそっくりじゃねえか。ここに寝てフタされて、そのままおっ死んじまうんじゃねえか？」

「それは大丈夫です。万が一の時も心電図を取る装置が付いていて、体調が悪くなった場合はゲームを自動的に中断して開くようになっています。看護師さんに待機して頂いてますから」

これを棺桶なんて思うんだ。今までそんなことをいうヤツいなかった。年のせいかな？

「そうかあ？」

渋っている園枝さんに、三木島さんが微笑みながら話しかけた。

「おや、園枝さん怖じ気づいたのですか？ 普段の勇猛果敢なあなたとは思えない」

「ち、ちがうわ！ 縁起でもねえと思っただけだ！」

園枝さんは怒りながら装置の中に横たわってくれた。三木島さんはお孫さんが心配そうに見つめる中、片足を重そうに引きずりながら装置に腰を下ろし、営業の手を借りながら装置に寝てくれた。蓋が自動で閉まる。今頃二人の目の前によくその文字が浮かんでいるはずだ。

「それでは、中のガイドに従って、ゲームを始めましょう」

部屋の中央に設置しておいた大型モニターが、音楽と共に巨大なスタジアムを移しだした。超満員のスタジアムから歓声があがるモニターの皆さんはモニターを食い入るように見つめている。やがて画面の中央に園枝さんと三木島さんが映し出された。どよめくじいさん達。園枝さんの方は早さ重視のレザーメールか。三木島さんは……戦国武将になってる！ ペンケースが木製だったから？

「青山さあん、あれちょっとやりすぎじゃあ……」

「曖昧すぎ検索になってるから今回は仕方がない。帰って調整する」

マイクに向かって二人に話しかける。

『ご気分はどうですか？』

彼等はどこから話しかけられているのかわからずきょろきょろしながら、園枝さんが笑う。

『悪くないぞ』

三木島さんは少し歩いたりジャンプして見せた。

『とてもいい気分です。CGとは思えないくらいリアルで、軽く動けます』

たたたと軽い足音がした。ふり向くと三木島さんのお孫さんが目を丸くしたまま聞いてきた。

「これ、おじいちゃんなんですか？」

「そうですよ」

「だってしわがないし、痛くて歩けなくなっていたのにあんなに元気に……」

お孫さんに涙ぐまれて、俺も鼻がつんとした。

スキャンシステムがそこまで精巧じゃない。細かいシワまでは再現できないから、10年くらいは若く見えるんじゃないかな？ それから見た目だけのスキャンで身体的能力は反映されない

って足が悪くても走ることができる。

『それではお二人とも右手を少し握ってください。武器を出しましょう』

涙を拭いている間に荻谷がマイクに向かって話してくれた。画面に釘付けのじいさん達は口々に「こりゃすごい」とか「次やりませんか？」等と話し合っている。

「あっちで見ていて。これからおじいちゃん試合するから」

にっこり笑うとお孫さんは席に戻って大型のモニターを食い入るように見つめていた。

『右手を握るってえ、こうか？』

園枝さんの手に、すらりとした一振りの剣が現れた。

「ふおおお、ありゃブロードソードか？」

「なるほどなあ、あんなふうに文房具が変化するのか」

会場の皆さんは大拍手。その時、更に大きな歓声と共に、園枝さんの悔しそうな声が聞こえてきた。

『三木島さん、そりゃずるいじゃあないか』

『ずるいもなにも、私もびっくりですよ』

武将の甲冑姿で微笑む三木島さんの手にはガラスの剣があった。

「クリスタルソード？ おい、こんなのデータにあったか？」

「さっき青山さんがいじったからじゃないですか？」

荻谷は呆れたように睨み付けてくるけど、俺のせいじゃねえぞ！

『それでは、試合開始です。試合時間は3分とさせていただきます。みなさんはお二人に声援をお願いします！』

営業が叫ぶのと同時に、二人は一礼して、お互いの剣を合わせた。会場がわあっと歓声で唸るのを画面の中にも伝えてやるが、二人には聞こえていないのかあまり反応がなかった。。緊張感がハンパねえ。どちらが仕掛けるか固唾をのんで待っていると、三木島さんが園枝さんの剣を体ごと押して、数歩下がらせた。

『や、やるじゃねえか』

『あなたも』

楽しそうではなかったと思ってお孫さんを見れば、ハラハラした顔で三木島さんを見つめている。

画面の中の二人は今度は距離を取った。園枝さんが仕掛けようとしたその時、三木島さんが少し早く動いた。手を剣で狙うが園枝さんが咄嗟によける。それは見事な剣さばきでこっちがほれほれするわ。こんな動きした人あんまりいないよな？

「すごいな、あの二人」

「そりゃお二人とも剣道の有段者ですから。参加者のプロフィール読んでないんですか？」

「時間がなかったんだよ！ それでやたらと反射神経がいいんだ」

「.....すごい。先輩が言ったみたいに巖流島ってかんじですね！」

「クリスタルソードとブロードソードのか？」

あははと笑っていると、がん、と装置の中から音がした。

「え!？」

園枝さんが中で画面の中で慌てている。装置の中で足を動かしたんだ。どんだけまっちゃったのこのじいちゃんたちは!

『何か当たったが大丈夫か?』

『大丈夫です。少し装置に触れただけです。続けてください』

マイクに話すと、園枝さんは自分を落ち着かせるためか大きく息を吐き、  
『わかった!』

と、三木島さんに斬りかかっていった。

「荻谷あ、怪我防止に中のクッション追加な」

「はいは〜い」

生返事する荻谷と顔を見合わせて笑った。

一年後、BUN-BORGはめでたく発売となり、更に数年後、BUN-BORGの全国大会が開かれることとなった。そのころ俺は子会社に出向になり、本社とは違う悠々自適な暮らしをしていたのだが、ある日、

「悪いけど全国大会に出てくれないか？」

上司に言われてびっくり、というのか呆れた。

「ゲーム作ったSEが大会に出るんですか？ システムわかっている人間が出たらずるいとか苦情が出るんじゃないですか？」

「子会社から一人ずつ出させて、その試合ごとの経過とか結果とかをHPに載せるんだと。……全力で勝ってこい。なんだったらシステムいじってもかまわん。勝てばボーナス、勝たなかった場合は……わかってるだろうな？」

ドスがきいた声で脅された。

ノース予選当日、俺は初戦で負ける気満々で会場に来ていた。スタッフの数人に

「がんばれよ」

なんて声を掛けられた。

「お前ら出ないの？」

「ああ、他の奴が出るから」

そりゃ安心だ。盛大にため息をついていたとき、

「あなた……、あの時の方ですよね？」

いきなり声をかけられてふり向くと、そこに三木島さんがいた。

「三木島さんじゃないですか！ お元気そうで何よりです」

三木島さんは相変わらず杖をついていた。空いた手で握手を求められ、俺はその手をぎゅっと握った。傍らには高校生の女の子……ああ、あの時のお孫さん。

「今日はお孫さんの付き添いですか？」

二人の顔を見比べると、女の子はクスリと笑った。

「いえ。私が付き添いなんです」

「……ん？」

ちょっとまで。女の子の方が付き添ってことは！？

「最年長の挑戦者です。園枝さんもいらっしゃってますよ」

「そうそう、この間から園枝さんと話をしていたのですが、このゲームのシニアリーグを立ち上げたいんですよ。その後相談をしたいのですが」

そんな話もあるのか。なるほどね。シニアリーグか。自由に動けるといのはお年寄りには面白いのかもしれないなあ。

「それは面白いですね。お手伝いが可能か上司に相談します。お返事は先日まで登録くださった連絡先でよろしいでしょうか？」

「でしたらこちらにを」

そして彼が差し出した名刺には親会社の役員の肩書きが明記されていた。

「あなたのような若い方には、絶対負けませんから」

ガラスペンの老紳士は俺の手を強く握り返すと、闘志をむき出しにした瞳で俺を睨み付けてきた。

「ええっと……よろしくおねがいします」

やべえ。

負けられない。